582
236

582-236
1200501522768

26. 7. 21

213
お

帝國圖書館藏

勝田穂策香月著

青年と雄辯

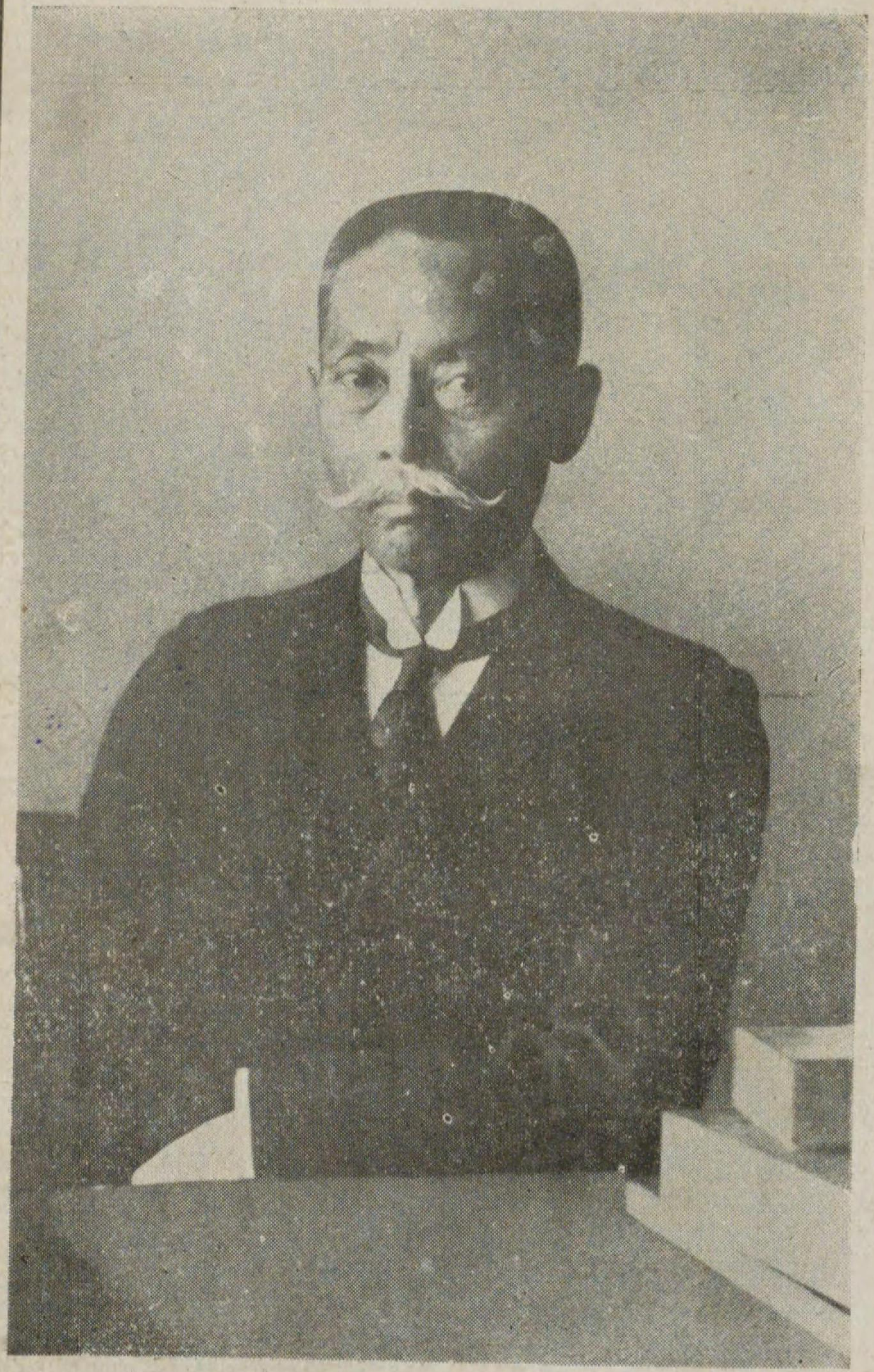
何人も心得べき辯論上達の秘訣

東京閣發行

哀々吐出於真心

右題勝田芙青年句雄辯

茅水士

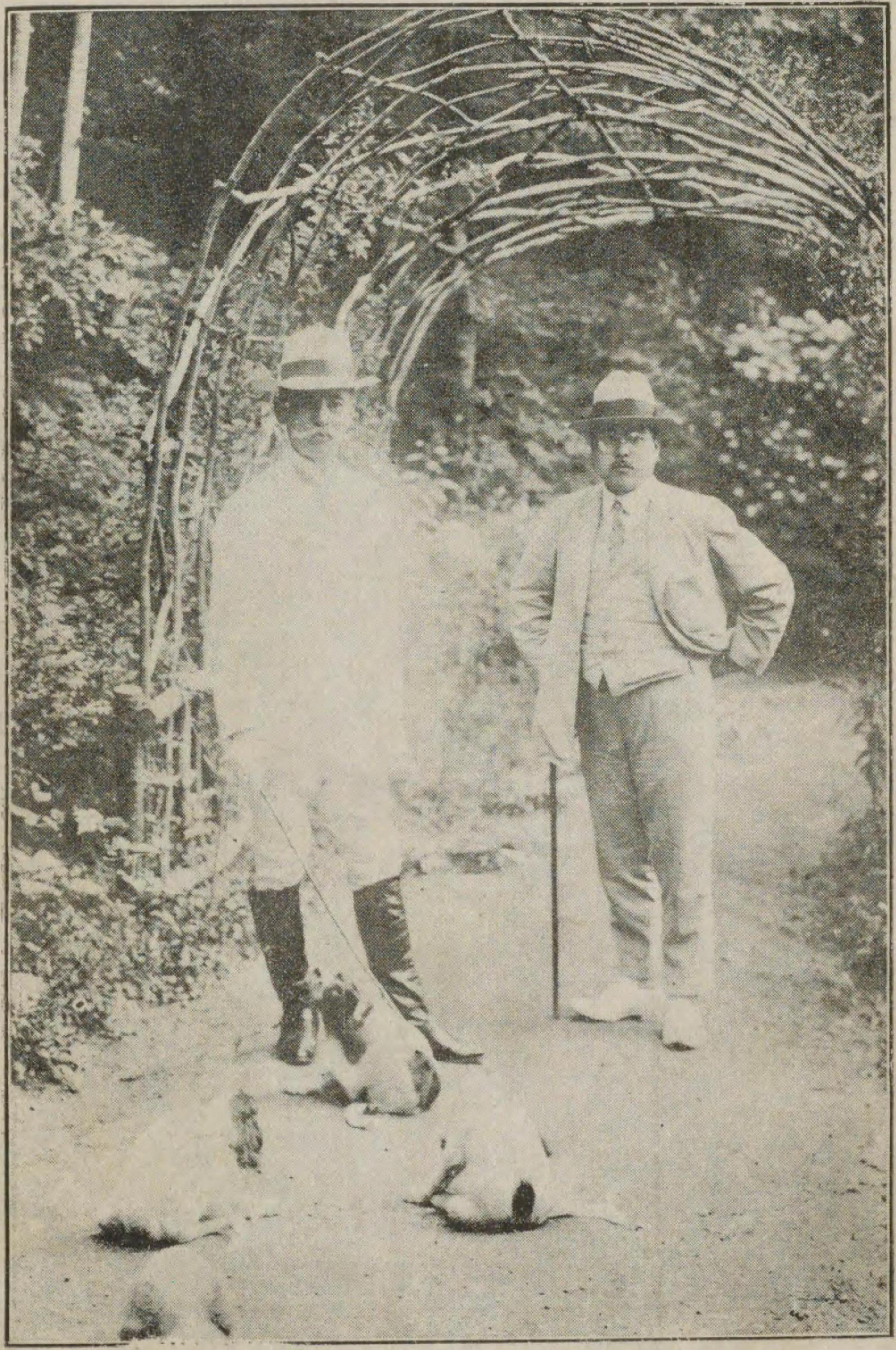


我國雄辯界の巨人　尾崎咢堂先生

ゼスチ(ユ)チ

ゼスチ(ユ)チ

尾崎咢堂と著者



（輕井澤莫哀山莊に於て）

582-236

‖序　文‖

雄辯の本質に就て

衆議院議員
前外務省參與官　永井柳太郎

緒　言

雄辯は火である。野火である。熱烈何物をも燒き盡さではおかない、燎原の火の如き勢を以て語るならばそは自づからにして雄辯となるべきである。また思ふ、雄辯はX光線の如きものである。例ば選擧演說等に於て、如何なる官憲の壓迫、如何なる反對派の妨害ありとも、それらの壓迫妨害を排して、直ちに民衆の肺腑に徹するものでなくてはならない。

私の信ずる雄辯とは畢竟斯の如きものであつて、敢て多く語るを要しないのであるが、折角の希望故、簡單に所懷を申し述べてみたいと思ふ。

空虚なる美辭麗句の羅列

新約聖書の哥林多前書の第十三章に、言論を戒めたる有名な言葉がある。『假ひ吾れ諸々の人の言及び天使の言を語るとも、若し愛なくば鳴鐘や響鐃鈸の如し』といふのである。凡そ、何等の信念もなく、熱誠もない人が、空虚なる美辭麗句を連ね、態とらしい身振りを使つて、無用の辯を弄する程不愉快なるはない、雄辯は畢竟するにその人の心そのものである。訥々たる一語かへつて人を泣かしむる事があり、美辭麗句の羅列かへつて人に慊焉の情を催さしむるものあるは、聽く者またその言葉を聽くに非ず、其の心を聽くが爲である。

太田道灌の歌に

底ひなき淵やはさわぐ山川の
淺き瀨にこそ仇波は立て

といふのがあるが、人の心も亦水の流れと同じである。水の流れが深ければ深い程音を立てずに流れる、之に反して淺ければ淺い程、音を立て、仇波を擧げつゝ流れ行く、そのやうに人の心もまた感動すること、餘りに深ければ言葉が出ない。一語を發する能はず、たゞ淚流るゝのみといふ事になる。憤慨すること餘りに大なる時もまた言葉が出ない、一語を發せず、たゞ眼光烱々として四邊を睥睨するといふことになる。言葉となつて發し、議論となつて現はるゝものは、人の心の比較的淺き部分と言はざるを得ない。本能や直感や言葉として言ひ現すことの出來ない所に、かへつて人間の本性に近いものがある。

科學者は何ものよりも正確なものは數學であるといふ。數字を以て證明しうるもののみが、最も間違ひのない事のやうに論ずる人もあるけれども、その數學の基礎となるべき、1、2、3、4、5、といふやうな數字の、2が1でない、3が4でないといふやうな事は、果して誰が證明し得るか、それは直感であつて、言葉によつて、說明し議論によつて立證することの出來ない、謂はゞ一種の信念である。

また極めて卑近な引例であるが、『君は牛肉は好きか』『牛肉は好きだ』『牛肉は美味いか』『牛肉は美味い』といふことは容易であるが、更にもう一歩進めて、『牛肉はどんな味がするか』と聞かれたならば之に、對してかういふ味がするとはつきり說明出來の得る者は恐らくあるまい、『まあ一口喰べて見給へ』と答へる他はないであらう。卽ち之を味ふものにして始めて其の眞の味を知り得るのである。之を以て言葉や、議論や、文章に現はれるものは、人の心の比較的淺い部分であると

いふ事が判るであらう。

孟子の如き雄辯家と雖も、公孫丑から、『浩然の氣とは何ぞ』と問はれた時に、『曰く言ひ難し』と答ふるの他は無かつたのである。雄辯を以て、單に美辭麗句の羅列であり、或は侃々諤々の議論であると考ふるものがあるならば、さういふ人は、決して眞の雄辯家となり得ないのみならず、彼はそもそも雄辯の何物なるかさへ解しないものといふべきである。

心と心の接觸

聞く方もまたその聞く人の心によつて、同じ演壇が色々な意味にとられると思ふ、かつて外國にゐた人から聞いた事であるが、一人の青年がその生れた農村で親讓りの農業をやらうか、それとも牧師になつて基督教を宣傳しようかと非常に煩悶した。彼は煩悶の餘り、神に祈禱して、『わが爲すべき事を敎へ給へ』と祈つた。すると幻の如く自分の眼前に二つの大きな、文字が現はれた。それは P.C. といふ二つの、文字であつた。彼は心をおし沈めてぢつと考へてをつたが、はたと膝を打つて、之は preach Christ 即ち基督の事を述べ傳へよ、といふ意味に相違ないと氣がついた。そこで鋤鍬を擲つていよいよ牧師になる決心をしたのであつた。その決心を友人に告げると友人もしばし考へておつたが、答へていふやう『いや、それは矢張り親讓りの農業を繼續せよといふ事だ、それは、Preach Christ ではない Plough Corn 即ち穀物を耕せといふ意味だ』といつたとの事である。そのやうに聽く者個々の主觀によつて違ふのである。

道端に立つてをるたゞ一つの墓石、それは心なきものにとつては、無緣の一石塊であつて何等の感激をも與へはせぬであらう。併しながら、心ある者の目に映ずる時は、その無言の一石塊が、大說敎家の說敎にもまして、深い深い感動を與へずにはおかないであらう、それと同じやうに、演說も亦聽く人の心々によつて、受けるところの感動が違ふのである。この故に演說をしまた演說を聽くといふことは、畢竟するに、心と心の接觸であつて、決して舌端の技巧をもつて人を引きつけるものでもなく、また引きつけられるものでもない。美辭麗句によつて、人を動かしうるものでもなく、また動かさるべきものでもない、その心と心との接觸に際して、電光を發し、雷鳴を起すところに、雄辯と雄辯にあらざるものとの相違が生ずるのである。

大聖は總て大雄辯家

斯く考へ來る時は、釋迦や、孔子や、耶蘇や、或は日蓮、親鸞の如き大聖が眞の大雄辯家であつ

た所以が頷かれるであらう。三界の大導師たる釋迦の生涯は、そのまゝにして不朽の大說敎であり孔子の言々句々も亦、凡て經世の大雄辯であつた。耶蘇の有名なる『山上の垂訓』の如き天の鳥を指して天父の愛を說き、地の百合を指して攝理の玄妙を說く、之れを聽きたる者、孰れもその說く所の『學者の如くならず、權威を持てる者の如く』なるに感歎したのである、其の他、日蓮の『立正安國論』の叫び、親鸞の『歎異鈔』『愚禿鈔』の敎へ、いづれか不滅の雄辯にあらざる。之等の大聖はたゞに其の時代の人々に異常の感化を與へたのみなず、恐らくは人類の滅せざらん限り、萬世に傳はつて、いよ〱その感激を新ならしむるであらう。これ實に彼等の崇高なる信念と、深到なる體驗と、聰明なる叡智と、純眞なる情熱から迸り出でたるところの、生命そのものゝ雄辯であるからに他ならない。

雄辯と民族性

——情熱的なフランス人——

私の觀察するところによると、演說は人と人との間に差別がある如く、また民族の異なるに從つて相異があるやうに思はれる。これは、各民族に獨自の信念や、言語があつてその特色が自づから演壇に現はれる爲であらう。

ビスマルクは嘗て普佛戰爭の媾和談判中、その夫人に書き送つた手紙の中で、談判の對手たる佛國の名雄辯家チエールを批評し、『彼はフランス人に獨得なる昂奮性を有し、議論は次から次へと口を衝いて出で、その議論の盡きざること宛も栓を拔きたるビール瓶より、ビールの沸騰するが如し、されどビール瓶より沸騰したる泡が、やがて消散してそのあとに何物をも留めざる如く、彼の言論も、議論も何等の內容を有せず、やがて消散するに至らん』と嘲笑してをる。

フランス人の演說は、このビスマルクの批評に見るが如く、藝術家的情熱と、詩人的修辭に富んだ華麗なもので、彼等は自ら昂奮し、自ら白熱し、自ら鼓舞して聽く者をして感動せしめずにはおかないといふ傾向がある。併し乍ら、その結果は冷靜と眞實性とを缺いて幾分ビールの泡たるの感が無いでもない。クレマンソー、ブライアン、エリオー、ミルラン、ポアンカレーと並べてくると一層この特質が鮮やかであるやうに思はれる。

——學究的な獨逸人——

然らば獨逸人の演說はどうであるかといふと、極めて冷靜に、深到な思想と、明徹な理論と徹底

的斷案をもつて押してゆく、冷靜ではあるが、熱がある、信念がある。從つて强く聽衆の心に迫るものがある、元來思考性に富んだ彼等は、たとへば政治演說と雖も、尙學究的傾向を有するのを以て誇とし、また聽衆もそれでなければ滿足し能はばるがごとくに見ゆる。ビスマルクの演說についてみても、音聲は餘り明朗でなく、その言葉は何等の修飾がなく、冷靜であり、簡潔であつたが、しかもその博大な人格と、卓拔な勇氣とを以て、端的に所論を申し述べるのが例であつた。彼の演說は獨逸流の演說の代表と稱することが出來る。現代のマルクス、ストレーゼマンの如き、皆同一傾向を有することに氣がつくであらう。

――宗教的な英國人――

英國人の演說は歐洲大陸人のそれにくらべると、比較的宗教的であり、道德的であるやうに感ぜられる。英國流の演說の代表者といへば先づグラットストンを押すが當然であらう。ある人がグラットストンの演說を評して

『彼は討論家として常に勝利者であつた。サー・ゼームス・グラハムや、チエールの如く單なる熱情ばかりではない。ロバート・ビールの如く、獨斷と詭辯の爲ではない、マコレーの如く、想像と絢爛な字句を連ねない。彼の勝利は道理の力である。彼は深刻なる宗教心から發する灼熱的至誠によつて勝つ』

と言つてゐる。この批評は移して以て、今日のアスキス、ロイド・ジョージ、ボールドウイン、マクドナルド等に當てはめることが出來る。

歐洲大陸で社會主義者といへば、大抵は無神論者であるとみて差支ないが、英國に於ては社會主義者でさへ、その思想が著しく宗教的である。アーサー・ヘンダーソンの如き人でさへ嘗ていうた『余は神を神ずる、神はデモクラットである。階級の別なく、職業の如何を問はず、總ての人を愛する。故に余もまた總ての人を愛せざるべからず。而して總ての人を愛するが故に無産階級を虐ぐる者と戰はざるべからず』と叫んだ。

ジョーヂ・バアンスにいたつては、

『大陸の社會主義者にとつては、カールマルクスの資本論がその經典であるかもしれぬ。併しながら吾等にとつては、カール・マルクスの資本論が世に出ざりし昔より存在したる聖書こそ、吾等の運動を指揮する、經典である。聖書によつて吾等は、勞働者もまた、資本家と同じく尊とき人間なることを敎へられた。その尊とき人間を物品の如く濫用せんとするものあるがために、吾等は勞働

者の尊とき人間性を擁護すべく戰ふのである』
といつてゐる。英國最初の勞働黨内閣を組織した、ラムゼー・マクドナルドに至つては、熱心なるクリスチャンであつて彼の演說にしば／＼聖書の文句が引用せらるゝことは衆知の事實である。

ルーズヴエルトの大獅子吼

かくの如く、民族の異ることによつて、雄辯の特質も亦異るのである。しかしながら、いかなる民族に於ても、苟くも眞の雄辯家と稱せらるゝもの、雄辯は、總てその人の燃ゆるが如き信念、の如き熱情から迸り出づるものなる事に至つては即ち一である。

私は嘗て米國に於て、偶然にもルーズヴエルトの此世に於ける最後の演說を聽いた。時は大正七年の秋、ニューヨークのカネギー・ホールには聽衆が雲霞の如く參集して、私共はやうやく屋根裏のやうなところへ入りえたやうな有樣であつた。やがて壇上に雄姿を現はしたルーズヴエルトは自分の愛する息子が可惜戰所の露と消えはてた悲しみを訴へながらも寧ろ自分が子供に代つて死なざりしことを嘆き、『併し、自分も米國の建國の精神たる、自由、正義、博愛の爲には自己の老軀を捧げて、吾が子の後を追ふも辭せぬものである』といふに至つては彼は聲涙共に下り、辛うじて語をついで『亞米利加は獨逸が無條件で降伏するまでは、斷じて戰はざるべからず』と絶叫するや、萬餘の聽衆は總立ちとなり婦人は聲を擧げて泣き、男子は帽子ハンカチ等を振つて、百雷の如き歡呼の聲は、さしものカーネギー・ホールを搖り動かしたのであつた。

ルーズヴエルトは普通一時間ぐらゐの演說しかしなかつたといふことであるが、その日は二時間餘に亙つて獅子吼し、然もこの演說を終つて間もなく、彼は病の床に就き竟に再び起つ能はざるに至つたのである。

私はその時、彼の心の底から湧き上つてくる火のごとき熱情に感動したのみならず、今日想起するも、なほ彼が壇上の面影眼前に髣髴して、血の奔えたぎる如き感激をまざ／＼と覺えるのである。想ふに、戰場に於て同じく二子を失つたわが乃木將軍が、若しも凱旋後壇上に立つたとしたならば、たとへ其の時數語を發したにすぎなかつたにしても、そは恐らく千古の名言となつて、滿場の聽衆を慟哭せしめたのみならず、永く後世の人心を感孚せしめたことであらう。

雄辯は熱血熱涙の別名

實に、ルーズヴエルトの雄辯の如きこそ眞の雄辯といふべきである。雄辯は畢竟するに熱血熱涙

の別名である。雄辯の秘訣は熱血の一語に盡きる。滿腔の熱血抑へんとして抑ふる態はず。三寸の舌端に發して始めて鬼神を泣かしむる。大雄辯となるのである。ニイチエは曰ふ『熱血を以て語れ熱血は生命なればなり、余は熱血を以て語らるゝものをのみ愛す』と、私は思ふ。演說は決して技術でない、それはその人の人格そのものである。演說は決して言葉ではない。それはその人の心そのものである。演說は決して演劇ではない。それはその人の眞實なる生活そのものである。私は青年諸君が、言語や態度の末技に捉れないで、雄辯の本質について、眞劍に考究されん事を希望する。(了)

序論に變へる斷想

▽

『不言實行の士石野堅造へ』と云つたやうなポスターが選擧の時になるとベタ〳〵張られる。口先ばかりで何も出來ない候補者へ對抗する意味で有るよりも、多くの場合演說などしたくとも出來ない候補者のそれが又ひとつの看板である場合が多い。不言實行の士――まことに結構で有る――然し雄辯にして且つ實行の士には遠く及ばない。今や、時代は所謂口も八丁手も八丁有能にして眞摯熱烈なる鬪士の出現を期待してゐるのだ。

▽

熱火の辯、冷徹の辯、莊重の辯、輕妙の辯、天來の福音をおもはせる辯、寸鐵骨を刺す辯、個性の躍動せる正義の辯論が人々の心を動かす力が如何に大きいかは說明する迄も無からう。

▽

謂ふ迄もなく、辯論は各自の思想感情を代人に傳へる爲の方便である。然し、道具ではない。それは信念の迸(ほとばし)

りであり。感情の火花であり、意志の正しい表現であり人間から人間への微妙にして且つ強烈なる電流である。

從つて、其の辯論を價値づける重大なる條件は其れが眞實で有ると云ふことで無ければならない。

▽

たとへそれが、訥辯であらうとも洞々と聽く人の心を動がすものがある――即ち其の人の一語一語の眞實が聽く人の心を打つのである。

▽

從つて眞の雄辯とは『信念を持つて自己の思想感情を表明し以て最大限の共鳴感動を聽者に與へる』謂に他ならない――とも云へば云へない事は無からう。而して、此の最も適切にして最も有効なる表現の準備、方法態度とを研究し、それに熟達するのが辯論上達の秘訣だと――云ふことも出來るのである。

▽

『諸君！滿堂の諸君よ……』開口一番、聽衆の笑失を買つた雄辯家（？）があつた――廣い會場には僅か二十名程の聽衆が前の方だけポツポツ坐つてゐただけだつた。

▽

『丁度此の正面の額に書かれてあるとほり忍耐は無事長久の基と昔から――』其處で聽衆は又苦笑させられた――。辯士は大分博識多才らしくさうして立派な風彩をしてゐたが、近眼だつた。さうして其の無學沒常識を聽衆に認識される上に其の演説が非常に役立つた。

△

『此の花咲き鳥歌ふの候目出度く新築落成式を擧行致しました――此の傳染病院が愈々盛大に赴き隣村に負けない多數の患者を收容する日が來るやうに』東北の一寒村の村長さんの祝辭を村の有志諸賢が謹聽してゐる情景も一副の漫畫の題材にはなり得やう。

▽

自分の雄辯に聽き惚れて（とかう辯士は自信してゐるのである）聽衆は一言も發せず滿場水を打つた如き靜寂さに内心聊か得意になつた辯士の長廣舌が續く――其の實、聽衆はあまり長たらしい愚論にあてられてあきれたり――飽きたりそつと下を向いては欠伸を嚙み殺してゐるのである。中には感極まつてコクリコクリやつてゐる

のもある。

▽

こんな例を擧げてゐると際限か無いが、所謂在來の演說用語とか口調とかを鵜呑みにしてゐる人達のよくやる失敗の中にも時代の推移雄辯術變遷の片影を看ることが出來やう。

▽

雄辯法に關する書籍はあまりに多く出版されてゐる――然し、通俗的に然かも要領よく書かれた書籍類は非常に尠い。そこで私は、平易の言葉で書いた一讀役に立つ言論の上達法を自分の多年の體驗から割り出して書いて行かうと思つて書いてみたのが此の一書だ。

▽

こんな所で失禮ではあるが、題字を書いて下さつた尾崎咢堂先生に對して感謝の意を表すると共に東京閣主人上村熊雄氏の勞を多とする。

▽

そこで讀者諸君！本書にはまだ不備の點が尠くないことゝ思ふ。が、限られた頁で如何とも爲し難い。然し乍ら不備の點誤れる點はどし〳〵改訂するつもりだ若し本書に關して御示敎を得れば幸甚である。

昭和三年六月中旬

中野の寓居にて

香月　勝田穗策

靑年と雄辯　目次

題字（尾崎咢堂先生）……（一）
寫眞　其の一――尾崎咢堂先生近影
其の二――ゼスチユア（一）
其の三――ゼスチユア（二）
其の四――輕井澤莫哀山莊に於ける咢堂先生と著者
序文（永井柳太郎）……（一）
序論に代へる斷想（勝田穗策）……（三）
第一章　言論の時代來る
一、何故雄辯は必要であるか……（一）

二、雄辯のもつ力……（一三）
三、普選と雄……（一七）
四、青年と雄辯……（二一）
五、眞の雄辯……（二三）
（一）人格の高潔……（二五）
（二）力……（二五）
（三）赤誠……（二五）
（四）眞實……（二六）
（五）正義——（二八）

第二章　雄辯家となるには

一、雄辯修練と大雄辯家の苦心……（三〇）
二、雄辯家の資格……（三八）
（一）身體……（三九）
（二）精神……（三九）
（三）智識——（四〇）
三、雄辯家の能力……（三八）
（一）感起力……（四五）
（二）記憶力……（四六）
（三）想像力……（四七）
（四）判斷力……（四八）
四、言語と音聲——（四九）
五、姿勢その他……（五八）
六、雄辯成功の秘訣……（六四）
（一）條理一貫すること……（六五）
（二）言語の明快……（六五）
（三）勇氣の充實——（六六）

（四）聽衆の同情……（六七）
（五）熱誠橫溢……（六八）
（六）興味多大……（六九）

第三章　辯論の準備と對度

一、準　備……（七一）
二、草稿その他……（七九）
三、演壇に起つまで……（八七）
四、聽衆の種類と會場の氣分を判別せよ……（九四）
五、雄辯熟達の方法……（一〇一）
六、其の他……（一〇八）
▽演題の付け方……（一〇八）
▽緒論の切り出し方……（一〇九）
▽本論の運び方と結論の納め方……（一一〇）
▽演壇と辯士の位置……（一一一）
▽水、登壇、稿降壇、挨拶、原稿の扱ひ方……（一一三）
▽彌次と其の對策……（一一三）

第四章　演說と種類

一、長演說……（一一四）
（一）政壇演說……（一一四）
（二）議場の演說……（一一五）
（三）選擧應援演說……（一一七）
（四）學術及び文藝講演……（一一七）
（五）說　教……（一一八）
（六）辯論會の演說……（一一九）
二、五分間演說……（一二〇）

三、討論……（一三三）
四、儀式辭……（一三五）

第五章　雄辯の進化

一、希臘の雄辯家デモステネス……（一三八）
二、羅馬の雄辯家とシセロ……（一四九）
三、十字軍とその時代の雄辯家……（一四九）
四、佛蘭西革命の雄辯家とナポレオン……（一五八）
五、近代英國の雄辯の變化……（一六八）
永井柳太郎氏と語る……勝田穗策…（一六九）

—以上—

第一章　言論の時代來る

一、何故雄辯は必要であるか

言論の時代は來た。この言論の時代に雄辯が必要であることは、今更言葉を改めて云ふ必要はなからう。雄辯は最も直接な自己發表の武器である。

元來自己の思想感情を發表する武器は言論と文章とである。勿論演劇、創作、彫刻、繪畫、音樂等も自己の思想感情を發表する機關であることは疑ふことが出來ない事實であるが、そのいづれも藝術といふ衣に深く纏はれてゐるので、直接なものではない。

自己の所信を發表する上に、他の不正を論難攻擊する、誤られたる自己を正しく辯解する上に最も優れた武器は文章と言論である。この二者のいづれが優り、いづれが劣つてゐるのであらうか、或人は雄辯は筆の力に優ると云ふかも知れない。又ある人は文章は舌の力に優つてゐると云ふかも知れない。

云ふまでもなく文章では辯論のやうに機に應じ、時にのぞんで自由に自己の思ふところを發表す

[library seal stamp]

ることは出來ない。例へば此處である倶樂部に集合して、茶話會を催したとする。その時ある人に五分間演説を求めたとする。その人がその時に應じて何等の演説をすれば、その機會に自己の意見を發表して、會衆に何等かの感銘を與へることも出來るであらうが、若し彼が少しもかうした修養がないために、それを文章にして會が濟んでからその人等に送つたとすれば、恐らくその意見の大部は、例へ彼がどんなに優れた所論の持主であつたとしても、その功を奏しないで、その意見は或ひは紙屑にしか價ひしないことも有らう。

彼の大ナポレオンが戰塵のなかに於いて、その時に應じて師率をはげます雄辯を振はなかつたなら、彼が如何に戰術にたけてゐたとしても、恐らくあれ程の連戰連勝はしなかつたであらう。文章によつて發表されたものには、目の前にその人を見てその人の雄辯を聽し程には、その人の人格の輝きが強く響いて來ない。從つてその效果が即刻に現れて來るやうなことはない。殊に文章に對する時は何人もそれを批判しようとする。しかし若し眞の雄辯を聽かされたなら、我々はそれを冷靜に批判しようとしてゐても、遂にはその雄辯の人格の輝きと、彼の論理の明晰とをそのすばらしい情熱にいつのまにか卷き込まれて、遂には說服されてしまふ。從つて雄辯は文章より多數の人に直接的な效果がある。最も傑出せる藝術家の作品には往々如何なる雄辯も及ばないものが無いわけではない。

それにしても、かく力と熱とに滿ちた雄辯にも、文章に劣るところがないでもない。それは雄辯は單に彼の聽衆のみに知られるに過ぎないが、文章は印刷になつて何萬何十萬と云ふ厖大な部數で怪物のやうに社會に現はれて、漸次に地球上到るところの人心に訴へやうとしてゐるのである。しかし辯論は餘程の雄辯で無い限り多少の印象を殘して風のやうに消え去る。そしてたゞある優れたもののみが速記せられて、すべての文章と同樣に出版物となつて現れる。而して眞の雄辯はそのまゝが大文章である場合が多い。斯して雄辯は强い感銘を繰り返して文章より以上の效果を生ずるのである。

然も雄辯が一方出版物となると同時に、近來ラヂオが發達したので、雄辯は一層その價値を高めて來た。

更に又、時代は進んで、今や我が國も、愈々全民衆が政治に關與することになり、普通選擧が實施されることになつた。(近く二十歲以上の青年や婦人にも參政權が許されるに至るであらう。)で普選の實施と共に益々『雄辯の時代來る』といふ感を深からしめた。と云ふのは候補者が自巳の意見を發表して、輿論喚發し、民衆の輿望を一身に擔つて、議政壇上の人となるべき時代が來たからで

ある。即ち言論と文章を唯一の底器として爭はねばならない時代が來たからである。

故に將來議場裡の人とならうとするものは、いづれも辯論の上手下手の如何によつて或る程度までは其の勝敗を左右せられるやうになるであらう、普通選擧とは畢竟するに言論文章の戰である。

雄辯の時代は來た。靑雲の志あるものは、いづれも辯を練つて、先づ自己の思想、感情、要求等を正しく明瞭に要領よく開陳し得るやう心掛修練せねばならない。

雄辯は單に政治方面に必要なばかりではなく、會合に於いて親睦を計るのにも必要である。例へば倶樂部に於ける五分間演説等はそれである。又修養の上から云つても必要である。靑年團や、處女會の總會等で、自己の意見を發表して、靑年男女の修養に資することも必要であらうし、日常生活にも必要缺くべからざるものである。

而して、現代の雄辯家と稱せらるゝ者多くは彼等は自己滿足のために、私利私慾の爲めに、辯舌を弄してゐるやうである。それにしも民衆は今亦誠を以て叫び眞實を以て歩む果敢なる鬪士を求めてゐる。この雄辯の時代に私も亦民衆と共にその人を求めるのである。

——眞の雄辯家が欲しい。民衆と共に眞實の路を辿る人格高潔な一人雄辯家が欲しい。

尙、此に就いてはいろ〳〵な論説もあるが、それらのうち最も要領を得たる川原次吉郎氏の所説を轉載してみよう。

◇來らんとする辯論の時代

普選を轉機として辯論の時代は來らんとしてゐる。殊に今その第一次普選議會の開かれてゐる際、辯論について考察することも徒爾ではなからう。

戸別訪問が禁止されたので、先程の總選擧では演説及び文書による運動より外に、合法的選擧運動はあり得なかつた。普選らしい氣分は、先づこゝら邊りからにほび出てゐたやうに思はれる。

然らばその辯論の力がどの程度まで發揮されたかといふ段になると、また〳〵吾人の滿足に價ひする結果は得られてゐない。『演説會は演説會投票は投票』といふ風に兩者は別個の存在で、その間何らの因果關係が現れない所も幾多あつたらしい。『演説會の景氣がそのまゝ投票に現れるとしたら、わが派の大勝利請合だ』といつた人がある。ところが不幸その人においても「演説會の景氣と投票」とがちぐはぐで、むしろ反對の結果を生じたのであつた。

選擧演説では、概して在野黨に人氣の集まる傾向があるものだ。政府黨は守備軍であり、辯護論であるのに、

在野黨は攻擊軍であり、暴露論である。何れが景氣が良いかはわかりきつてゐる。ところが演說會の言論戰で人氣の無い政府黨がいつも勝利を得る習慣（？）のある我が國の選擧界はこれまた辯論と投票を別個に考へてゐる證據ともいひ得やう。

この事は何といつても喜ばしい現象ではない。言論を通じて政黨の政策を知り、それを判斷することによつて投票するのでなくては本當ではない。しかし追々そんな趨勢になりつゝあることは、今度の總選擧においても、いくらかは窺ひ知ることが出來た。こゝに都會地において、そして將來はます〳〵この傾向を著しくするであうといふ期待の持ち得た證跡もいくらもある。

既成政黨者流の演說と無產政黨のそれとは、演說の內容は勿論、型からして異なつてた。既成政黨のはいはゆる「演說使ひ」流で徒らに大言壯語、大向ふをうならせようとうならせようとかゝつてゐるところがあり〳〵と見える。雄辯といふものは、聲でおどしつけたり、美辭麗句でうつとりさせたりする如きものではない。それは舊式の雄辯だ。「演說使ひ」の雄辯だ。

無產政黨の演說會は多くは滿足に終らなかつたやうだが演說の內容も型もすつかり新時代的だ。いつてみれば「話しかけ」である。有島武郎氏の言葉を思ひ出すなら「申し出」である。都會であればある程このいき方が感銘を與へてゐる。しかし地方に行くとまだ內容なんぞどうであれ滔々懸河の辯であれば無暗にうれしがつてるところがある。

「演說一つ出來ない候補者」は今度はあまり出なかつたやうだ。かつて黨局者の間に、候補者が演壇に登つて何もしやべらず只「どうぞよろしく」といつて頭を下げるやうな場合は、これを演說と見なすかどうかといふことが問題になつたことがあるさうだが、そんな候補者は今度は地を拂つてしまつた。そして何れも馬を陣頭に進めて堂々（？）とやつてゐた事はとにかく心强い次第である。しかし選擧區が廣くなつたので中々一人では行き屆かない。應援辯士を渴仰したのもその爲であらう。或る物好きが、九六八名（選擧當日は九六五名になつてゐる）の候補者が、一回一時間づゝ一日四回演說するとすれば、十五日間で五七・六〇〇時間、日數にして、二・三五八日間、年數にして六年半であると計算したが、一日四回位では濟まなかつたところもありこれを二十間として計算すればもつと多くなる。候補者だけの演說の延時間でもこんなに長いのだから、應援辯士のも入れゝば想像もつかなくなる。しかもその辯士は、殆ど一名の除外例もなく「公正なる選擧」「淸き一票」を叫んだのだから、選擧民にもいゝ加減徹底してゐなければならぬ筈である。にもかゝはらず世間の噂では買收が盛んに橫行しとに農民などはそれによつて動くものゝ方が多かつたと云ふことである。そこで「結局選擧は實彈戰でさあ」と空うそぶいてる人もあるが豈慨嘆のいたりならずやといひたくなるではないか。

雄辯は結局眞面目が大切である。民衆の意欲にぴつたり合致したことを、眞面目な態度で話すに限る。それが世間の所謂「雄辯術」からみてどんに型にはまらないものであつても、最後は聽衆をしつかりとキャチすることが出來る。今後は民衆も益々政治的に目ざめて行くであらう。さうなればいよ〳〵以て「演説使ひ」の魔術などにだまされてはゐなくなるであらう。

もう一つは内容である。内容なき演説は時的の痛快味は與へ得ても、後までその感激を續かせることは出來ない。言葉はまづく少なくあつても後々までも記憶に殘るやうなしつかりした内容の演説を心掛けるやうにならなければならぬ。地方青年の間にすらだんだん、所謂政治家の演説なるものが倦かれて來てゐるのは面白い世想と思ふ。

次に將來の雄辯法とでもいふべきものについて少しく書いて置かう。

雄辯法に關する著書や雑誌は、坊間にも多く行はれてゐるが、しかしそれは飽くまで「型」であることを注意しなければならぬ。柔道や劍道においても、型ばかり習つても強くはなれぬ。型の一通りは心得て置かればならぬことゝ、それは勿論大切であるが、本當の强さは稽古による。練習が足りなかつたら試合に敗ける。雄辯においても雄辯法の型だけではならぬ。練習を必要とする。こゝでは主として政談演説に限つて説くのであるが、たとへば野外で行はれる國民大會の如き場合の演説は、どうしてもそれ相當に練習の積んだ人でなければ、決して成功するものでない。屋内であつても何千人といふ大集會の際には、これまた熟練を要する。今度の總選擧におけるが如く、小學校の教室で行はれる演説會などには、初心の者でも可なり成功したものはあるが、だからといつて大演説會にも成功すると早合點しては大いに誤りだ。

では大なる演説會に處する用意として如何なる練習修養を必要となすかといふに、先づ聲量を擧げればならぬ聲量が不足してゐるために、折角の内容が聽衆に響かず失敗に終る場合が多い。演説の聲量を付けるためには「寒聲」などの修練をやるのもよい。大雄辯家の苦心談を聞いてみるとわかるが、食べ物にすら日頃から注意してゐる。咽喉を大事にすることと決して聲樂家にも劣らない。

政談演説には太い「バス」の聲が最もドッシリした感じを與へるものだ。議會における演説もその通り。

次に大演説會になるとどうしても「ゼスチユア」が必要になつて來る。擴聲器を演壇にそなへて置いても、廣い會場では明瞭に語句が徹底しないことがある。そんな時は、聽衆は辯士の「ゼスチユア」を見て大抵の意思を讀むことすらできる。

わざとらしい「ゼスチユア」は却つてきざで目ざわりになるが、自然に現れる適當なる「ゼスチユア」は効果

のあるものだ。小演說會になればなるほど「**ゼスチユア**」の考慮が必要になつてくる。

かつて**レーニン**や**トロツキー**の演說を目のあたり見て來た一友人の話に、萬を越す大群衆を前にして彼等の叫ぶ演說は、ほとんどその雄大壯烈な身振り足振り表情の連續で、群衆はむしろその「**ゼスチユア**」につれて呼應する有樣であつたといふことである。**タフト**や**ルーズベルト**も壯大なる「**ゼスチユア**」の使ひ手として知られてゐるが、常に大群衆を和手に演說をやりつけてゐると、自らそのこつを吞み込んで來るのであらう。

同じ演說でもラヂオで聞く場合と、本當の演說會で聞く場合とで感動の程度が丸で違ふ。寫眞と肉筆の繪畫との差よりももつと其の差が强い。

しかし如何に「**ゼスチユア**」が大切だからといつて、木に竹をついだやうな不自然なものは、悲慘な滑稽感しか與へない。修練、工夫の必要ある所以はこゝにも存するのである。

第三に、演說の主旨を効果的に徹底せしむるために、適切なる挿話などを入れるのもよい。これも政談演說の場合と、普通の講演などの場合とで趣を異にしなければならぬ。普通の講演の際は、挿話が少しは長くても差支ないが、政談演說の挿話は簡單なものを幾つも入れた方がよい。擧例においても然りである。挿話は議論を論理的に力付けるゆゑんとはならぬが、群衆心理にまき込まれてゐる大なる聽衆には感動を與へる効果は十分にある中には議論のところはほんのわづかで、演說の大部分を挿話で連れ、しかも立派に成功してゐる雄辯家もある。政治家ではないが山室軍平氏の如き、このいはゆる「挿話演說」においては天才雄辯家であると云つてよい。政治家も雄辯を練らうと思つたら、畑違ひだなどゝ云はずに、宗敎家や、學者や、時には噺家の話までも、細心に聞いて、演說と群衆心理の動きといふやうな事について研究する必要があらうと思ふ。たとへば演說會で辯士の代り目などで、どうかすると會場がガヤ〳〵つて靜まらないことがある。辯士が口を開こうと思つても聽衆と呼吸が合はない。そんな時に如何にしてそのザワ〳〵した小雜音を撤するか。それには噺家が高座に上つて、さて口を開くが、わざと口の中でモゴ〳〵いつてゐるかのやうに小聲で何かしやべりはじめる。何をついてゐるかわからぬから聽客の中から『シッ』『シッ』といつて滿場が靜めてくれる。靜まつた頃を見はからつて本當の聲を出すこのほんの十秒乃至二三十秒の呼吸だが、あすこのコツなどは雄辯家は大いに心得て置いてよい。常住座臥、絕えず萬事に注意して修養の糧とすせきものであると考へる。

その他、演題の付け方、緖論の切り出し方、本論の運び方、結論の納め方、演壇と辯士の位置、原稿の扱ひ方、挨拶の位方、彌次に對する態度等々といくらでも雄辯法の研究項目はあるが、以上述べて來たことは要するに前にもいつたやうに「型」である。

生きた演說にはどうしてもそれ以上に血と淚がなくてはならぬ。更に內容なる肉がなくてはならぬ。むしろこれが主で『型』は從である。主が本當になれば從は自らそなはつてくる。否その「型」が「型」でなくなつて「自然」になつて來る。そこまで來なくてはならぬ。この主たるものゝない演說は。いはゆる『演說使ひ』の

演說となつてしまふ。『演說使』とならない眞の雄辯を獲得せんとするところに、

政談演說の內容は將來は出來るだけ具體的なることを要する。抽象的な形容詞たつぷり美辭麗句の連續では、眞の効果はない。またその內容が「我がもの」となつてゐなければならない。「受け賣り」や「つけやいば」では「血熱涙」等が出て來ない。赤裸々に「我がもの」となつてゐるすべてをさらけ出すつもりで聽衆にぶつかる。そこにぴつたりと呼吸の一致も見られるのである。たとひ辯士より以上の智識教養のある聽衆があつても、眞實の叫びであればきつと人の心を動かすものだ。普選時代になつて勞働階級の演說家が增して來た。そして今度の總選擧などにも大なる功績を擧げてゐるが、高尙な理論よりも、體驗より來る熱ある「本當」の叫びがどんなに民衆を動かしたかしれない。議論にしても練りに練つて自已の信念となつたものと、他人の說をうのみにしたのとでは大違ひである。故に將來の雄辯家は同時に遠大なる思索家又は思想家または體驗者でなくてはならぬ。今度の總選擧で聽衆を集める手段としてゞあらうが、珍らしい人間をといふので〇〇や××などといふものを引張り出したところもあるが、普選時代だから何人が政談演說に出ても差支へはないやうなものゝ、單に興味本位、好奇心本位で人集めをしたからとて、その引張り出された者がどれだけの効果ある演說をなし得たであらうか。そのものゝ顏を見たさに集まつても、そしてその演說を聞いても、そのためにとくに投票をせんとする心を起した人は果して幾人あつたであらうか。あんな不眞面目な選擧演說會は、心ある人は大いに非難してゐたやうである。

婦人の雄辯家も今後は多く輩出してくるであらう。今度の總選擧にも婦人辯士の活躍はめざましきものがあつた。これは大いに良い傾向と思ふ。勿論中に前述の〇〇や××やを引張り出したのと同じく興味や好奇心で聽衆を集めるために婦人辯士を依賴したと云ふ候補者もあつたやうであるが、少くも都會地に於ては婦人が出るからとくに聽衆が多いとか、演說會が成功するとか云ふことはあまりなかつた。農村などでは婦人の演說はまだまだ「珍しい」の城を脫してゐない所もある。

しかし今後は婦人も男子と同樣にどしどし演壇に立つやうになり特にそれがために好奇心をそゝられるやうなこともなくなるであらう。

婦人としてのまた特別な雄辯法があるかも知れない。だが大體において男子のやるそれと大差ある筈はない。但し數千人の大聽衆に向つて、或は屋外の大群衆に向つて、大演說を振ふことは今のところ婦人にはどうしても適しないかも知れない。

聲量の關係や體格がその主なる理由であることは勿論である。けれどもそれとても將來は擴聲器などの援助をかつて大いに行はれるやうになるであらうと思ふ。（東京日々新聞載）

二、雄辯のもつ力

一國の内閣が雄辯の力によつて瓦壞し、全國民の輿論が一人の雄辯に依つて支配される如き例も今古東西を通じて尠くない。

一國が戰端を開始する場合に、雄辯を揮つて全國民の輿論を喚起した例も非常に多い。この種の雄辯に於いては、古今の大雄辯家がその偉力を發揮してゐるが、千古の大雄辯家デモステネスの雄辯は殊に有名である。彼が一度マセドン王フヰリブを攻撃する熱辯を揮ふて同時に、聽衆はこの雄辯に感動し、熱狂して、皆立ちあがつて、

「マセドンへ！マヘドンへ！」と絶叫したのであつた。

ピーターが聖地を異端の手から取り戻さうとして諸國に遊説して十字軍を募集した。時もさうであつた。彼は悃々として聽衆の肺肝を衝き、或る時は祈り、或る時は大聲疾呼して、主基督や聖母マリヤの名を呼び、自ら親くこれと相語つたと稱し、自分の眼に一つの幻影が啓示され、自分に宛てた一封の手紙が天上から舞ひ來つたと宣言した。そして基督自ら彼の枕頭に立つて、回教徒の手からその墳墓を奪回すべしと命じたとさへ論斷した。かくてピーターは貴賤を論ぜず教會と街頭とを問はず、聲の限り言葉の限りを盡して、自己の主張を宣傳した。彼の雄辯忽ちにしてその偉力を發揮して、彼の言葉に眩暈した群衆は狂喜して輿論を卷き起した。熱狂の餘り直ちにパレスティンを指して進軍しようとする群衆を控制しなければならない程であつた。

十字軍遠征の結果として、遠しハレスチンの野に退沒せられた基督教の一王國に内訌が生した。その王國が危機に瀕したのを見て、サラセンの大軍は領土の回復を叫んで潮の如く迫つて來た。この時、ベルナールが、嘗てピーターが實行した任務に從事した。不思議なほどこの雄辯も成功してその效果は須臾にして現れた、彼の衣裳は裂かれて義勇軍の十字架となり、都市にも城郭にも人影が見えないほどに民衆は競つて出征した。

戰場に於いても亦雄辯の偉力は甚大である。前にも云つたやうに、彼の大ナポレオンが、戰場に於いて戰士達の志氣を鼓舞する雄辯を揮はなかつたなれば、戰士達は恐らくナポレオンの爲めならば一身を賭しても欲しくないと云ふ感情は起らなかつたであらう。若しナポレオンに對して師率達がこの感情を起さなつたなら、彼は風雲に乘じて世界の帝王の帝王と謳はれることは出來なかつたであらう。

雄辯のもつ力は劍の力よりも強い。と云ふのは、どうしても劍でなければ治まらない國と國との訌爭を、雄辯の力を以て治めるからである。嘗ジェーアとピサトの爭ひは相方に深い怨恨がもつれてゐるので、容易に治めることは出來ないやうに見えたが、ベルナールの說教の力によつて和解の

を手を握ることになつた。騒亂に寧日なきミランの都も、ベルナールの雄辯に魅了せられて、彼に市の大僧たらんことを懇請したこともあつた。又ある時には羅馬を襲ふて法王を虜にしたシシリイ王ロッシャアを說破したこともあつた。敎會の統一と多數者の權利とをベルナールの口から諄々と說かれた時、シシリイの暴君も兵を收めて故島に歸つた、これ等の事實から考へてみても雄辯は劒の力をしのぐ社交の武器である。

平和な時に於いて雄辯は、人々を墮泥から覺醒せしめる力を持つてゐる。その時に當つて我々はデモステネスの獅子吼を以て民衆を覺醒さめなければならない。又シセロを宗とする魅惑的な雄辯によつて、民衆の進むべき方向を指示しなければならない。而して彼等と共に修養し、彼等と共に歩み、彼等と共に進化して理想の國に一日でも早く到着しなければならない。

雄辯は又新興無產階級が持つ偉大なる力である。新興無產階級には資本と稱する金力がない。彼等には正義と自由とをふりかざして力強く戰ふ武器としては、たゞ雄辯があるのみである、然も、其の言論でさへが現代の社會〇〇のもとに在つては自由を採る、從つて彼等に口から洩れる雄辯は血であり、肉であり、火であり、熱であり、力である。彼等そのものの汗と血とはこの雄辯のなかに混然として、新しい力を構成してゐなければならない、この血とこの汗とが將に來る理想の世界に於ける雄辯の眞の力となることは、火を見るよりも明らかなことである。

かくて雄辯はその偉力を生活の全野に振ふことゝなつた。さうして雄辯は社會の中樞となつた。政治家、實業家は云ふに及はず、文士、藝術家の輩に到るまで、自己の主張を辯論によつて物語るやうになつた。と云ふのは資本は無言の力であつたが、その無言の力を持つてゐない新興階級は、雄辯の力によつて新時代を創造しなければならない時が來たからである。沈默は金、雄辯は銀の言葉は、資本主義の時代には眞理であつたかも知れない。しかし現今に於いては全く通用しない、歷史的言葉になつてしまつたのである。この雄辯の力によつてのみ、當來社會は創造せられ、この雄辯の熱火によつて、この現實の腐敗は燒き盡されなければならない。

三、普選と雄辯

常に歩みを續けて當ることのない民家は、漸次にその力を穫得しなければならなかつた。その力の穫得として現れたものが、普通選擧である。この選擧權を得た時、民衆が「あゝ國民は目覺めたり」といふ普選歌を歌つて、都の大路を練り歩いた悲壯な光景は、まだはつきり我々の眼の底に刻み着けられてゐる。この稀利を得た時、民衆は熱狂した。何故民衆は熱狂したのであらうか。單に

選擧權を得たことが、彼等をしてかくまで狂喜せしめたのであらうか。若しその位のことで今の民衆がかくまで狂喜したと解するなら、それは民衆をあまりに輕蔑した見解ではないであらうか。と云ふのは、民衆は千古不滅の眞理の鄕土を指して歩みを續けてゐるものであるからである。民衆は理想鄕に向つて一刻も休むことなし歩みを續けてゐる。この大抱負を持つた民衆が選擧權を得た時に、何故かくまで熱狂したのであらうか。

この狂喜は今まで遠い地平線の彼方にその光を隱してゐた理想の光が、この權利を獲得したことが一つの動機になつて、鮮かに彼等の眼前に輝いたからである。だから民衆は熱狂して歡喜したのである。

「民衆は窺ふべからず、知るべからず、觸るるべからず」の古い制札に、民衆に對して政治は禁斷の木の實であつた。しかしこの制札は民衆の手によつて撤回された。と云ふのは、民衆を救ふものは民衆であるからである。

「上下心を一にして盛に經綸を行ふべし。」とは立憲政治の根本義である。而して理想である。明治大帝の御意は民衆の光になつた。かくて普通選擧が實施されて、特別な事情のあるものの外は、「日本臣民なる男子にして二十五才以上の者は選擧權を有す。」ことになつた。

さて、この普通選擧なるものは、一體我々に何を物語るものであらうか。今まで政治に關與することが出來るものは、生活が安定してゐる中産階級以上のものだけであつた。民衆は窺ふことも出來ない、知ることも出來ない、又解することも出來ないものであつた。しかし今日では二十五才以上の男子は凡てこの政治に關與する權利を與へられた。我々には代議士を選出する權利がある。

代議士となるには、先づ立候補して、自分の政見を發表して民衆に問はなければならない。議員の候補者は何を以て民衆に問ふのであらうか。何の機關によつて自己の所見を民衆に訴ふべきであらうか。それは云ふまでもなく文章と辯舌とである。文章を以て自己の意見を選擧區の人々に發表すると同時に、辯論を以て政敵と戰はなければならない。議員となるには、たゞ單に舌の武器があるのみである。

勿論この場合文章の力も偉大なものである。しかし文章ではその候補者自身の口から聞く辯舌のやうに、人々を感服せしめ、感動せしめ。時によつては熱狂せしめることは出來ない。文章では何と云つても感銘が薄い。だから文章の力だけではどうしても議員になることは出來ない。

此處に於いて雄辯の時代から來たといふ言葉が。雄辯を以て政敵を說破し、雄辯を以て輿論を喚發し、雄辯を以て民衆に訴へて民衆の聲望を一身に擔つてこそ初めて代議士となるのである。

今日恐らく選擧演說ほど盛んなものはない。選擧演說は現今の雄辯界の花である。與黨はその黨派の政策を述べて民衆の同情を求める。野黨は政府の非を難じ、更ら自己の黨派の政見政策を發表して、他の黨派を說破して、民衆の利を計つて、民衆の爲めに戰はうとする。各黨各人各々滔々として熱烈な懸河の辯を揮ふ。

かくて普通選擧とは換言すれば文書戰と言論戰を意味することになつた。當選者はこの文書、言論戰の勝利者に外ならない。落選者はこの文書、言論戰に敗北したものである。それ故、普通選擧の實施なるものは、又一方言論の時代が來たことを意味するものである。

民衆が如何なる道を通つて、理想の光明圈に踏み入るべきかを、最も明晰に民衆に指示して、舌端火を發する熱辯を揮ふものこそ、將に議場裡の人となり、一黨の鬪士となり領袖となるべき人である。かくて雄辯の時代は來た。將來、爲すことある士は、民衆の武器であり力であり、肉であり血であるこの雄辯を修體しなければならない。

——と云つても、未だ現代の選擧界を支配し、其の候補者の當落を左右するものは畢竟するに金力であるが遠からず其の金力が如何に無力で有るかゞ證明される時代は來る——否まさに來りつゝあるのである——而して其の時代を一日も多く到來させる上にも言論は重要な役目を果すことであらう。

四、青年と雄辯

民衆は目醒めた。眠前に光明を見出た。そして普通選擧は實施されて、雄辯の時代が到來しつゝある。やがて十八歲にして選擧權を行使する時代がくるかもしれない。さうして純眞熱烈にして果敢なる青年の言論が時代を動かすかもはかり得ない。「辯は劍よりも强し。」といふシセロの夢は、二千年後の今日漸く實現されてゐるのである。この言論の時代に、苟くも青年たるものは、是非共各自其の運命を開拓進展せしむると共に、眞理の爲に自由の爲に公正の爲に、勇敢に鬪ふべきである

青年時代は修養の時代である。鬪ひの時代である。勇往邁進すべき時代である。この時代に努力奮鬪して、修養を積み自己の進むべき道を明確に見出さないものが、どうして將來名を爲すことが出來るであらうぞ。如何なる天才も修養しないで、生れながらの天才であつたものは一人もない又努力しないで一人として名を爲したものはない。青春の血に燃える我々が一體何を爲すべきかは自ら明白ではないか。

民衆は目醒めつゝある。新しい時代の黎明は來た。我々も亦目醒めて眞の自己を見出さなければ

ならない。而して民衆と共に果敢なる闘爭を續けて以て光り輝く理想の國に進まなければならない
眞の自己を見出すには、學識を豊富にし見聞を博め、幾多勞苦の體驗を積んで專心を修養積まねばならない。而して自己に何等かの所見があるなれば。機械會を掴んではこれを發表して批判を乞ふべきである。從つて青年も亦自己の意志を十分に表現出來得るやう修養を積まねばならない。

自己の意見を忌憚なく發表することが出來るやうな人でなければ、現代の青年たる資格がない。例へば青年團の辯論會などで、五分間演說を勸められながら、しかも壇上に立つことを恐れてしりごみするやうなことは、何と云ふ現代青年の恥辱であらう。かう云ふ機會がある度に、我々は進んで自己の所見を發表すべきである。又演說が出來ない青年ならば、演說が出來るやうに修養すべきである。

言論の時代が來た。現代の青年たるものは、叫ばなければならない。述べなければならない。獅子吼しなければならない。青年が討究すべき問題は實に多いではないか。――我等は何を爲すべきか、我等は何の爲めに生れたのであるか。民衆の眞の光は何であるか。民衆の理想は何であるか。この腐敗した政治をどうして救ふべきか。眞の人間とは何であるか。今後宗教はどうなるか。機械文明と人間の問題。科學の問題、軍備と人道の問題。我等は何の爲めに生きるのか。――等。討究すべき問題が、こんなに多いのに、我々青年はたゞ青春のまどらかな夢を見てゐることが出來やうか。

――起て。而して叫べ！　青年よ！

環境が惠まれた青年も、亦惠まれない青年も皆立つて自己の意見を述べて、互に意見を交換して更に更に向上しなければならない。自己の赤誠を述べるのに、何等の躊躇も必要ないではないか。遲疑逡巡は普選實施以前の置物である。

かうして我々は自己の所見を最も正確なものにしやうではないか、眞の自己を確立しやうではないか。眞の民衆の光を見出さうではないか。

五、眞の雄辯

この種論の時代に、私は眞の雄辯が生れ出ることを望んで止まない。さてこの眞の雄辯と稱すべきものは、一體どんな雄辯であらうか。雄辯の目的は聽衆を脫服して感動せしめることであるが、これのみで眞の雄辯と云ふことが出來るであらうか。勿論、如何に高遠な思想で、永久不滅の經國の大理想であつても、聽衆に馬耳東風に聽き流されては、この思想、この大理想も結局は豚に投げ

た眞球で、何の役にも立たない。だから如何なる大理想でも聽衆によく理解されて、その辯論の最後まで聽集の心理を惹きつけて行くやうて述べなければならない。そしてこの演說が興呼も充分あつて、雄辯家の言語も明晰で、聽衆はその理想と輕快な辯舌に醉はされて、熱狂したとすれば、その雄辯は眞の雄辯と云ふことが出來るであらうか。これだけ聽衆を感動せしめればその演說の目的は充分に達してゐる。しかしこれだけのことから考へて直ちに彼を大雄辯家、眞の雄辯家と云ふことが出來るであらうか。そして彼の辯舌を直ちに眞の雄辯であると云ふことが出來るであらうか。

聽衆を感動せしめ、熱狂せしめるものが眞の雄辯であるとすれば、嘗て惡指導者が民衆を煽動して自己の利益を計つた演說も、眞の雄辯であると云ふことになる。惡政治家の言論のやうに民衆を弄絡するものが、眞の雄辯であらうか。彼等の辯舌は表面に羊の皮を着た獅子である。これが果して眞の雄辯であらうか。とすると表面では滔々と人道を說いて熱烈懸河の辯を揮ふその人が、內面では墮落した生活をしてゐるとすれば、果して彼の言論は雄辯であらうか。

これ等は皆眞の雄辯と云ふことが出來ないものである。と云ふのは、先づ第一にその人の人格がその辯論に流露してゐないからである。第二にはその人の眞の人格が流れ出てゐないから、其處には人々の肺肝を動かす力がない。第三には赤誠が溢れ出てゐない。第四には、その言論が眞實でない。第五にはその言論が眞の正義の擁護者でないからである。

（一）人格の高潔　――演說家であつて、その人の人格が高潔でないものは、鬼に金棒がないと同樣である。だからその言論に眞の威力がない。どんなに大雄辯を揮つても、人格が高潔でないと聽衆は「何んだ。口ばつかりぢやないか」と云ふ感情が起つて、熱辯を揮へば揮ふほど、聽衆は彼を輕蔑してくる。又演說家自身としても、自己を僞つての演說であるから力を入れるべき時に力が這入らなくなる。從つて聽衆に感銘が淺い。しかしその演說家は非常な鐵面皮であつて、全々自己を僞つて平氣な顏で、滔々と正義道德を說いたとする。それにしても人々は言葉だけに感動するものではない。聽衆は明晰な言葉で流麗な演說をしたからと云つて直ちに感動するものではない。時によつては訥辯でも感動するものである、それは何故かと云ふに、後者にはその人の人格が如實に流露してゐるからである。演說の言葉を縫つて、その雄辯家の人格が燦然と輝いて、人々の肺腑に言語に絕した感銘を與へなければ、眞の雄辯とは云へない。

（二）力　――自己の人格が高潔であつて、深い自信があれば、一語一語に力が溢れて來る。この力によつて如何なる訥辯であつても、その一語々々が人々の靈に喰ひ入るのである　世に「訥辯の雄辯」と云ふ言葉があるが、それはこの一語一語に力のある演說に外ならない。（雪嶺三宅雄二郎先

生の演説は此の『訥辯の雄辯』と言ふ言葉に適しいものである）

（三）赤　誠——は又雄辯の重大な要素である。この赤誠に動かされて壇上に立つたものでなければ、どうしても彼の言語動作に油が乘らない。唯一場の申し譯に壇上に立つたと云ふのでは、壇上の人も氣乘りがしない、だから彼の言論は人を動かすに足るものではない。自己の內部に赤誠が溢れて壇上に立つものは、少しも聽衆を恐れない。自信が內部からその人を動かしてゐる。又聽衆がどんなに彼の意見に反對するものとしても、赤誠が溢れて所說を述べてゐるのであるから、俯仰天地に恥ない、頑として自己の所說をまげない。かうしてゐるうちに、この雄辯家は山のやうに偉大に見え海のやうに廣大に思へて來るので、遂には聽衆は說服するのである。この赤誠が內部に燃えてゐないと、聽衆に反對されたやうな場合には、その論理が四離滅烈となつて、自己の所見を撤底せしめることが出來ないうちに、演壇から下りなければならなくなる。赤誠がなければ、辯論戰で舌端火を發するやうな熱辯を揮ふことは出來ない。赤誠は雄辯の原動力である。

（四）眞　實——雄辯の一語々々には眞實が張つてゐなければならない。無責任なその場限りの言葉を喋々と辯じ立てただけで、それが雄辯であるとは云へない。民衆を煽動して自己の利を計る時代は旣に過ぎ去つた。何故と云つて、民衆は目醒めたからである。もう民衆に嘘を吐いて弄絡しても、民衆は動かない。民衆には眞實を以て訴へ、眞實を以て語らなければならない。民衆はもう指導者はいらない。民衆と共に眞實を語り、民衆と共に眞實に步む人を求めてゐるのである。若し雄辯家の言葉が眞實でなかつたなれば、當來社會の選擧に於いては一票の投票を得ることは出來ないであらう。勿論惡に力があるやうに、時によつては嘘にも偉大な力がある事がある。日露戰爭の時の誰であるか、味方が漸次に戰死して戰は不利になつて來た。しかしこの地點を敵軍に占領されては、わが軍の爲めには偉大な損失である。その時、その一隊を統率してゐる將校が云つた。「今直ぐに援兵が來るから、それまで必死になつてこの地點を守れ！」と。しかし何時まで立つても援兵は來なかつた。兵卒は將校の言葉を信じて、必死になつてその地點を守つたので、敵兵は漸次にその陣容を崩して、遂に敗北四散した。しかし未だ援兵は來なかつた。又來ない筈だつたのである。援兵が來ると云ふことは、兵卒をして必死になつてその地點を守らしめる爲めの嘘に過ぎなかつたかう云ふ意味で嘘や惡の力は偉大である。この嘘は單に嘘の爲めの嘘ではなくして、わが國民が哀心から願つてゐる勝利を得る爲めの嘘である。正義の爲めの嘘である。從つて其處に何等の罪もない。惡の爲めの惡は似然として惡いが、惡によつて眞理を生かし、我々の生活を活氣づけるとすればその惡は尊い。それは惡ではなく一種の眞理である。又將校の嘘としても、それは單なる嘘では

なくして、大きな正義である。かう云ふわけで、單に眞實と云つてもその意味は實に廣いが、民衆の爲め、正義人道の爲めに、心の底から湧き上つて來る眞心を以て壇上の人となれば、どんな人でもその人の言葉に動かされずにはゐない。雄辯なるものは、その一語一語がこの眞實によつて照し出されるものでなければならない。

（五）正　義――最後に雄辯は正義の擁護者でなければならない。世の中には、惡い事でも三寸の舌頭でこれを善いことのやうに說けば、善く思はれると信じてゐるものがある。果して我は三寸の舌頭によつて、不正を正と思はせられていいのであらうか。我々人間社會の進化はそれによつて防げられないであらうか。民衆はそれで滿足してゐるであらうか。それにしても不正は何處までも正義ではない。惡は何處までも惡ではないか。我々は三寸の舌頭を以て不正を正義とした辯論を眞の雄辯と云ふことが出來るであらうか。これで果して民衆が求めてゐる眞の雄辯が生れて來るであらうか。

このやうなものでは當來社會の眞の雄辯と云ふことは出來ない。と云ふのは、この種の辯論は社會民衆を侮蔑した辯論であるからである。それでは嘗て惡指導者が使用した辯舌と何等異るところがないものではないか。眞の雄辯は何處までも惡として、不正は不正とするものでなければならない。而して正義を擁護しなければならない。「正義に敵はない」と云はれてゐる。正義の旗の下には如何なる逆賊も征服される。それと等しく、雄辯が正義を擁護して、その味方であればこそ、劍の力をしのぐのである。若し雄辯が正義の味方でなかつたなれば、決して劍の力に勝てるものではない。雄辯は正義の旗を押し立てて進む。それだから如何なるものもその力に遠く及ばない。劍を携へたものはその劍を收めて雄辯の軍旗を禮拜し、不正なるものは權力を捨てて遠い彼方に逃げる。雄辯に正義がなかつたなれば、柱がない家のやうなもので、何の役にも立たない。

以上は眞の要素をあげたのであるが、非常に重大な要項であると思ふ。この五項を完全に備へた眞の雄辯家がこの日本に一日でも早く現れて來ることを私は望んで止まない。眞の雄辯家は人類社會の燈火である。光明である。

第二章　雄辯家となるには

一、雄辯修練と大雄辯家の苦心

さて、かく重大な眞の雄辯を揮ふのには、一體どうしたならいいのであらうか。雄辯は生れながらにして揮へるものであらうか。それとも修練の結果にあつて揮へるやうになるものであらうか。かうして雄辯の時代は來たのに、將來爲すべきこと、及び發表すべき多くの思想がある青年たるものが、辯舌を以て已の思想感情を發表することが出來ないとすれば、恥ずべきことではないか。それなれば一體どうすれば雄辯家になれるのであらうか。自分の所思に聽衆を感動せしむることが出來るであらうか。

我々は眞の雄辯を揮はなければならない。我々の赤誠を以て、民衆に叫びかけなければならない。民衆と共に語らなければならない。光明への道を叫ばなければならない。

今古にその名を絕してゐる大雄辯としても、決して苦心なしにその榮冠を得たのではない。世の中には雄辯は天の賜であつて、人爲的にはこれをどうすることも出來ないやうに思つて雄辯の修練を笑ふものがある。彼は、我々が赤誠の情を以て壇上に現れたなら、何人でも大雄辯を揮ふことが出來るもので、雄辯の修練などは必要がないと思つてゐる。果してそれが眞實であらうか。手習いをしないで、立派な字が書けるであらうか。詩人でない人が折に觸れて得た名吟を以て、彼は大詩人であると云ふことが出來るであらうか。これは特殊の場合であつて、これを以て一般の通則とすることは出來ない。若し彼の言葉が眞實であるとすれば、畫家となる爲めに師匠をとる必要もなければ、手本を探し求める必要もない。だから廻辯家にならうとするものも、雄辯學を修得して辯說を修練する必要はない。

しかし如何なる天才としても、生れながらにして、その道の大家であつたものは一人もない。彼等としても苦心の結果大成したのである。古今東西を通じて天下に名を馳せた大雄辯家の傳記をしらべて見ても、その修練修得の苦心の跡は歷々として現はれてゐる。豐饒な土地であつても、開懇しなければ所穀を得ることは出來ない。どんなに天賦の萬能がある人でも修練を積まなければ、大雄辯家とはなれない。助辯術の練磨に全力を傾倒した古今の大雄辯家の成功と實績とは、雄辯術の修得と修練の價値ある確證である。

デモステネス――彼は古今獨步の大雄辯家であつて、その辯說は巧妙精緻、優美絢爛、滔々懸

河の辯であつて、到底人力の企て及ばないものと云はれてゐる。それにしてもデモステネスは生れながらにして、この大雄辯を揮ふことが出來たのであらうか。傳記によれば、彼は苦心慘憺たる修練研磨の結果、この天才を發揮するに至つたのである。この古今獨步の雄辯家は、生來吶辯であつた。しかも彼の聲は憂聲であつた。しかし彼は雄辯術に長じやうにして間斷なく努力したが、失敗に失敗を重ねた。彼は不撓不屈の精神で、その失敗を懲りずに研磨を續けた、彼は毎朝海岸に立つて叫んで音聲を修練した。彼は又地下に籠つて大鏡の前に立つて、日夜自分の身振の研究と練習を重ねた。或時は二三ヶ月も外へ出なかつた。彼が頭髮の半分と眉毛とを落して、外に出ることが出來ないやうにしたのもこの頃のことである。

かくして遂に彼の苦心の祈は顯はれて、世界の雄辯史は彼の爲めに偉彩を放つた。この點から考へて雄辯は天才であると斷ずることが出來るであらうか。彼のデモステネスとしても、苦心慘憺たる修練の結果によつて、これほどの偉彩を放つことが出來たではないか。彼の大雄辯は實に苦心の賜ではないか。その當時、デモステネスが得た尊敬と讚美の言葉は、その程度に達してゐる。彼の雄辯を聞いたものを云つた。「これは世界の一大偉觀である。」と。彼が演壇に立つといふことが知れると、邊陲僻邑の地から遙に遠い路を辿つてアゼンスに集つたとのことである。たゞこれだけのことから考へてみても、彼の雄辯がどんなに偉大なものであつた推察することが出來る。デモステネスと共に世界の大雄辯家として並び稱せられる羅馬のシセロは云つた。「吾人希くはデモステネスを學ばん。是を措いて他に何をか學ぶべき。これ以上に何を希望せん。されど吾人は到底彼が完實の城に達すること能はざるなり。」と。

シセロ——希臘に於いて博したデモステネスの名聲と、羅馬に於いて博したシセロの名聲とは共に相匹敵するものである。シセロは實に千古の大雄辯家であつた。彼が大雄辯家として名を爲すまでには、デモステネスにも讓らない練磨の苦心を重ねた。雄辯家は何れも苦心の結果としてなつたものであるが、殊に希臘羅馬の兩大雄辯家は、それが千古の大雄辯家として偉大であつただけに、辛苦の跡も亦深い。シセロの傳を記した者によると、シセロのやうに聽衆の感情を自分の思ふ方向に轉じ得たものはない、と云つてゐるが、實に彼は完全不缺の大雄辯家として稱讚すべきものどあつた。この雄辯を以て彼は、たとひ一時であつたとしても羅馬共和政治の滅亡を喰ひ止め得たのである。

ウヰリアム・ピツト——彼は雄辯を以て英國議會に雷名を轟かしたのであるが、彼の雄辯として一朝一夕にして出來上つたものではない。彼はオツクスフオード大學に在學してゐた頃に、峻嚴

を極めた訓練を經て、漸くにして卽席演說の法を學び得たのであつた。彼は在學の當時、たゞその才能を以て有名であつたばかりではなく、雄辯術が練達してゐたので學生間ではその名が高かつた。

文豪**マコウレイ**は、云つた。「ピットが初めて議政壇上に現れた時、その容姿は優稚で、しかも凛然たる威風を帶びてゐた。その狀貌は魁偉で、しかも氣高く、目は閃々と光を放つてゐた。その聲が沈んで全く耳語するやうな時でも、尙よく隅々の議席まで達した。勵聲一番力をこめて編する時は、寺院に於ける大風琴の洋々として湧き起るやうな聲であつた、その聲は全院を轟かし、幾つとなくある控室を通して、廻廊の方まで達した。そして時としては更に隔つてゐるウエストシンスタアホウルの境内にまでも達した。」と。この卓越した技能は何によつて出來上つたのであらうか。それはたゞ多年練磨の辛苦によつて、かくまで達成したのであると云ふより外に、何等の言葉もない。彼が喜怒の情を面相に現はす能力は、實に驚嘆の外はなかつた。憤怒又は侮慢の一瞥を以て何度も反對黨の辯士を狼狽させた。そして人を戰慄せしむべき叫喚から、鬱憤を含む獨語に至るまで機に臨み、時に應じて自由自在に抑揚操縱した。これ等の總ての能力は年年の修練の結果によつて得たものではないと誰が云ふことが出來るであらうか。學窓にあつて峻嚴な雄辯の習練者であつた彼は、遂に議政壇上にあつて、一國を支配する雄辯を揮ふことになつた。

小ピット——彼の大**ピット**が、自分の子である小**ピット**を教育するのに當つて、幼少の頃から、その音聲を調ふことを練習せしめた、かうして將來議政壇上の大雄辯家たらしめようとして、全力を傾涯して敎育した。かくて小**ピット**は非凡な大雄辯家となつた。さうして彼大英國の史上に最も小壯な大宰相として燦然たる光を放つことになつた。彼は演說する前に何等の立案もなかつたと云はれてゐる。しかし、一度彼が舌端を動かせば、一語も躓かず、一語も反復することなく、綽々として餘裕あり、堂々として威嚴がある言詞長句を、何等の苦心もなく滔々として發した。彼の音聲は銀鈴のやうに清く、彼の言葉は極めて明晰であつたので、一語も曖昧な響を發しなかつた。彼の小ピットが、かくまで大雄辯家になつたのは、實に彼の幼少からの硏究の賜に外ならない。彼の硏究修練は、何等の立案がなくしても、滔々懸河の辯を揮ふに至るまでの深いものであつた。如何なる天才でも修練なくしては、到底これまで雄辯術に悟入することは出來ない。

チヤルス・ゼエムス・フオックス——はピットの好敵手として、英國政壇の大立者であつた。彼は「理と情の融合」から出來上つた至高の雄辯家として天下にその名を博した。**マッキントツシユ**は「雄辯家の主眼である資質、卽ち理性と質樸と熱烈とを共有するものは、たゞ**フオックス**一人である。彼は實にデモステネス以來デモステネスの衣鉢を傳へ得た第一流の雄辯家である。」と

許してゐる。**メジヨンソン**博士は云つた。「わが英國民は、ジヨウヂ三世の笏の下に支配せらるるか、將又、フオツクスの舌に支配せらるるか、これは大きな疑問である。」と。彼は聽衆の顏色を察して、その樣々に變化する情操に自己を適合させて行くといふ非凡な能力があつた。このやうな能力は、一面から見て、身振その他の修練の結果と云はねばならない。

チヨン・ビイ・ゴフ——の雄辯は古今全くその例のない新式のものであつて、東西兩半球を探し廻つても、**ゴフ**の如き雄辯家を見出すことは出來ない。彼が聽衆を動かす不思議な感化力を現はす所以は、單に彼が熱烈な同情心を持つてゐたといふばかりではなく、人間の性情をよく知つてゐることゝ、人に對する信念が深かつたことゝ、摸擬と描寫の力に富んでゐたこととである。これ等のことは雄辯家の眞價を檢する試金石であつて、人間の心情を開くべき鍵鑰である、かくて、**ゴフ**の演說は規則法式を超越してゐた。勿論彼としても初めは雄辯の法則に從つて雄辯術を修練したのであるが、その修練の結果、遂に雄辯の法則を超越して、獨自の世界を切り開いたのである。あらゆる天才が苦心研究の結果、法則から出發して法則を破つて、法則より以上の偉大な世界を創造すると同樣に、彼も亦かくて偉大な雄辯を揮ふに至つたのである。彼は天才であつた。それなればこそ獨自の世界を開拓したのである。

以上列擧した雄辯家はたゞ一例として擧げたのに過ぎない。しかしこれだけでも古來世に大雄辯家と稱せられる人々は、如何にその修練に苦心を重ねたかを察するに難くない。如何なる人でも雄辯を揮はふと思へば、必ず周到な修練を積まなければならない。

雄辯家となるには、どんなに汲んでも盡きない思想を內に貯へると同時にそれを表現する機關と云ふべき——音質、音力、音壓、音節、拍子、滑動、姿勢、手勢、顏色——等に細心綿密な研究と修練を遂げなければならない。さうして此等の諸點について充分な研究を遂げ、修練を積み、熟達した時には、更にこれ等の規則的なものを超越して、これ等のものに囚はれないやうにしなければならない。畢竟するに、雄辯術は建築落成して活達自在になつた時には、取外ずしてしまはなければならない足場である」と云ふのは、雄辯術は兵法と等しく任きな學問である。從つて、其處に完全にその人の人格が生き、個性匂ひ高く微笑まなければならないからである。これを研究し修得する必要はあるが、これに囚はれてはならない。若し囚はれてしまつたならば、自由を失つて不自然となり、所謂演說術といふ藝當になつてしまつて、眞の雄辯ではなくなるからである。雄辯術を學んで、その術に通じたからと云つて、決して雄辯家ではない。演說法に通じて後、更に一步を進めて自我獨創の境地を確立しなければならない。かうして始めて雄辯家となるのである。**ダニエル・**

ウエブスタアは云つた。「雄辯は果して何處から來るのであらうか。それは地から泉の流が迸出するやうであり、又、噴火山が爆發するやうでもある。これは自發の自然力を以て來るものである。」と云つてゐるやうに、結局雄辯は自發のものでなければならない。だから雄辯術を學んで、その法則を超脱しなければならない。

かくてこの法則を超脱して、自分の個性や人格、及び身振にあつて、生命の息を吹き込んで、初めて雄辯は聽衆を感動せしめる力を具備するやうになる。外形がどんなに美しくとも、それが生きて人々の肺肝に働きかけなければ何の役にも立たない。

二、雄辯家の資格

研究修練しなければ、雄辯家にはなれない。それなれば雄辯家となるには、一體何を研究し、何を修練すべきであらうか。眞の雄辯家になる資格は果してどんなものであらうか。雄辯修練の第一歩には一體何を爲すべきであらうか。

雄辯家となるには、先づ第一に身體が强健でなければならない。第二には精神が健全なものでなければならない。第三には智識が勝れたものでなければならない。この三項のうち一つでも缺けてゐたなれば、雄辯家となる資格がないものである。

(一)身　體――如何なることをするに當つても、身體はその原動力である。病床に呻吟してゐて、どうして仕事が出來やうか。ある理想の爲めに戰ふことが出來やうか。又ある目的の爲めに努力奮闘して、修養を重ねることが出來るであらうか。

健闘は身體が强壯なもののみに惠まれた立身の武器である。雄辯家は時としては戰場のやうな舌戰を續けることもある。又、時としては一日に五回も六回も演說するやうな場合もある。かうして舌戰で惡戰苦闘するには、身體が弱くてはどんなに努力しても出來るものではない。こんな火を見るやうな舌戰でないとしても、身體が弱いと一時間位の講演をしても、直ぐに體が疲勞して、音聲が枯れて來る。これではどうしても雄辯家たる資格があるとは云へない。眞の雄辯家は二時間でも三時間でも、少しも疲勞しないで滔々懸河の辯を揮ふものでなければならない。それ故、雄辯家となるものは先づ第一に身體が强健でなければならない。若し雄辯家を志すもので身體が不健康なものがあるとすれば、先づ自己の身體を健康にして、それから第二の修練に移るべきである。

咢堂尾崎先生の如き三時間から熱辯をふるはれても疲勞の色が見えない。

(二)精　神――肉體と等しく精神も亦健全でなければならない。殊に雄辯家は多數の人の面前

で、自己の所見を述べるものであるから精神に異常があるものでは到底聽衆の滿足を得ることは出來ない。例へば精神病の爲めに途中で論者が轉倒したとすれば、聽衆にはその演說家の云ふことが判らなくなる。又發作的に、演說の途中で踊り出したりすれば、どんな雄辯でも何等の效も奏しない。效がないばかりか、聽衆は一度にどつと嘲笑して、會場の靜肅が保たれなくなる。このやうな失敗は皆精神が不健全だから起るものである。雄辯に志すのは、身體と等しく精神をも健全にしなければならない。身心共に完全であると云ふことが雄辯家となる第一の資格である。

（三）智　識――雄辯家たるものは、身心共に健全であると同時に、その内部に汲んでも汲んでも盡きない智識の泉がなければならない。心身共に健康で何時間の雄辯にも耐へることが出來るものでも、彼に何等の智識がなければ、彈丸のない戰爭のやうなもので、一分間の演說もすることが出來ない。智識は雄辯の彈丸である。だから智識が多ければ多いほど雄辯の戰鬪に長く耐へる。雄辯に志すものは刻苦奮勵してこの智識を頭腦に貯へなければならない。

政治界の雄辯を揮ふものは、現今の政治に通ずると共に、その根本である政治學を知つてゐなければならない。又思想の雄辯を揮ふものは現代の思想や過去の思想に通じてゐなければならない。法曹界の雄辯家は法律に、學術界の雄辯家は學術に宗敎會の雄辯家は宗敎に通じてゐなければならない。かくて自己の專門と爲す方面に通ずる同時に、他の方面にも廣い研究があつて、常識が發達してゐなければならない。ともすると自己の專門の方面にさへ通じてゐれば、それでいいやうに思ふ人もあらうが、單に學者として生活するにはそれでいいかも知れない。しかし雄辯家はそれだけでは足りない。と云ふのは、常識が發達してゐないと思はぬところで失敗することがある。常識が發達して廣く世の中のことを知つてゐないと、雄論を變通自在に聽衆の種類と會場の氣分によつて變化させて述べ立てることが出來ない。だから高等敎育を受けた人のみ集まつてゐる場合も、地方の農民にも同じ程度の演說をするやうな結果になつて、一方に於いては相當に迎へられても、他方に於いては全々失敗することになる。かうした失敗は常識が完全に發達してゐない結果として招いたものである。だから雄辯家は博覽强記であつて、しかも自己の定見がしつかりしてゐなければならない。確固たる定見がないと如何に流暢な辯舌を振つても、その所說が一貫して聽衆の肺腑に迫るものがないで、結局駄辯を弄したに過ぎないことになる。自己の定見が確立すると同時に、その雄辯家の人格が高潔でなければならない。人格の高潔が必要であると云ふことは前にも云つたことであるが、人格がその人の智識や定見や所說に伴つて高くなれば、その辯舌は實感の伴はない一場の空言である。

さて以上に述べたゞけのことが出來れば、直ちに演壇に現れて、例へば**デモステネス**のやうに千古不滅の雄辯を描ふことが出來るであらうか、それ程の雄辯家でないとしても、壇上の勇者になることが出來るであらうか。世の雄辯家なるものは、今述べたものだけが勝れてゐるものであらうか。諸者のうちで、氣の早いものは或はこれだけ讀んで雄辯家として直ちに壇上に現れることが出來るやうに思つたかも知れない。壇上の勇者となつて聽衆を感動せしめることが、そんなに容易なことなれば何故**デモステネス**はあれほど苦しんだのであらうか。そして**シセロ**は何故雄辯家たらんとしてかくまで努力したのであるか。それは眞の雄辯家となるには學ばなければならないことが餘りに多いからである。雄辯家となるには、先づ修辭學を研究して、自己の言語が聽衆に最も快感を與へるものを選ばなければならない。何人でも不快を與へる言葉よりも、快感を與へる言葉を喜ぶ。如何にその論旨が立派なものであつても、それを表現する言葉が不完全であると、聽衆はそれを理解することが出來ない。從つてその言論は效果のないものになる。だから修辭學を研究して言葉を整理して、聽衆に快感を與へるやうな言語を使はなければならない。

その次に修めなければならないものは論理學である。この論理學を研究して、自己の所說を明晰な論理を以て述べなければならない。言論に論理的な秩序が立つてゐないと、聽衆は「なるほど。」と思つて、その所說に感服しない。例へば、甲は乙に等しい。乙は丙に等しい。だから甲は丙と等しい。と云へば何人にも判るが、直ちに甲は丙に等しいと云へば、演說家が何を云つてゐるか聽衆には少しも判らない。判らないことを云ふと、聽衆は倦怠して隅の方からひそかに退場し初める。かうなつてはその演說は雄辯とは云へない。それ故、雄辯に志すものは、論理學を修めてその理論を明晰直截に聽衆に訴へなければならない。

最後に心理學の研究であるが、雄辯家は殊に群衆心理や、集團心理に通じてゐなければならない。例へば今聽衆の心理が、かうなつてゐるから大聲叱呼して激烈な感情を以て彼等の感情に訴ふべきであるとか、又今は聽衆の理智に訴へて冷靜に述べるべきであるとか、流暢な辯で聽衆に快感を與へるべきであるとか、一々聽衆の心理を摑んで述べ立てなければならない。それには聽衆の心理をよく理解してゐなければならない。若し聽衆が理智的で明晰な言論を求めてゐる時、大聲叱呼して演說家が熱狂すれば、聽衆は役の熱狂をたゞ嘲笑するだけである。熱狂して熱辯を振つても、聽衆に嘲笑されては何の役にも立たない。だから雄辯家は聽衆の心理を自已の精神の手に、しつかり摑んでゐなければならない。そしてその演說と聽衆の心持とが常に一致してゐなければならない。その二つのものが一致してこそ、初めて雄辯家が熱狂すれば聽衆も熱狂し、雄辯家が冷靜に批判する

時には、聽衆も亦冷靜に批判する。かくて自分の意見を聽衆に貫撤せしめることが出來るもので、これが各々獨立して演說家は自分勝手なことを云ひ、聽衆は各個に自分勝手なことを考へてゐたのでは、どんなに熱心に說かれたとしても聽衆には馬耳東風である。

　私は此處にたゞこの三つの學問が必要な理由を說いたゞけであるが、勿論是ばかりが根本的な學問だとは云へない。宗教に哲學に藝術に心あるものはこの研究に十分の努力を試みるがよい。

三、雄辯家の能力

身體精神共に强健であつて、しかも確固たる定見があるので、自分の內部から發表すべき思想が河のやうに流出する。この思想を修辭學や論理學から見て完全に發表することが出來るほど修練を重ねたとすれば今度は自分が最も有效にその思想を聽衆に訴へる事を研究しなければならない。

　我々が演說をした時に、聽衆から「あの辯士は演說が上手である」とか、「拙劣である」とか云はれるのは果して何に因るのであらうか。これは單に聽衆各個の所感であると云つて不問に附すべきではない。だからして、聽衆に「演說が上手である。」と、評せられたなれば、雄辯術から見て、その雄辯家の能力が豐富であることを意味するものと解しなければならない。又拙劣であると評されたのは、前者に反對に雄辯家の能力が不十分であると見て差支へない。苟くも雄辯術を研究してこれを實際に所用しようとするものは、この能力といふ問題に就いて輕々視することは出來ない。これは心得て置かねばならない重大事項であるから、漸次に、これを揭げて研究の資としよう。

　（一）感起力――とは他人を感動せしめる力である。演說の目的は聽衆に多大の感動を與へて、その言ふところを承認せしめて心服せしむることである。流暢の辯舌といひ、明快の修辭法といひ何れもその目的を達する一手段に過ぎない。しかし感起力は人々によつて同じものではない。同一のことを說いても、甲の人の言では何等の反響もない。しかし乙の人の辯舌によつて說破せられると、聽衆は悉く醉へるが如くその言に心服する。それ故、前者には何等の感起力もないが、後者には大いにその力があると云はなければならない。

　これは何故であるかと云ふと、その辯は訥であつても、句々人々の肺腑を衝くものがあるので、人々に生きて働らきかけるのである。しかしどんなことを云つても馬耳東風に附せられては、修辭法に協つた美辭麗句を用ひてもその目的を達して熱狂せしめることは出來ない。如何に流暢に喋つても、機械的に辯じ立てただけでは、眞情赤誠が溢れ出ないから、聽衆は感動しない。これに反して一方は例へ訥辯であるとしても、辯者自身が感激發奮して、滿身の熱血火の如く燃え、制しよう

としても制することが出來ない活氣を程してゐるから、聽衆は知らず識らずその感激の雷光石火に撃たれる。かくて聽衆は感動するのである。ある人はこれを「訥辯の雄辯」と云つてゐるが、たとへ能辯であつても、聽衆を感動せしめる力のないものは雄辯家とはなれない。

(二)記憶力――雄辯家となるには博覽强記でなければならない。博覽とは廣く各方面の著書その他のものに眼を注ぐことで、强記とはその廣く見聞したものをよく記憶することである。博覽の方は誰でも强勉さへすればそれでいゝのであるが、强記といふ方はさう旨くは行かない。萬卷の書を讀破しても、何も腦裏に殘らない。宛然長夜の夢を見たやうで、何も話す事が出來ぬといふことは强記の出來ぬ證據である、これでは雄辯家として世人に對する資格はない。殊に即席演説といふやうなものは、念頭にある智識で演説するのであるから、十分な素養がないものは常に失敗に終るのが當然である。

杜荀鶴の詩に「半夜青燈十年事、一時和雨致心頭」とあるが、十年前のことも善く記憶して心頭に現れ、明白に一々これを他人に話し得るのは、確かに立派な記憶力を備へたものと云はねばならない。原稿の持ち合はせがない時には、總てを腦中から持ち出して述べるのであるから、記憶力が强くなければならない、折角初めた演説を、途中で記憶を喚起することが出來ないから中止すると云つたら、誰でも笑はぬものはないであらう。斯くまで極端なことはないとしても、少くとも歴史上の有名な事實やその年月等は間違ひなく、記憶してゐなければならない。それを間違へて述べると「この辯士は無學だ」と云ふやうな念を聽衆に起さしめる。かうなると、その一刹那に於いて不快な印象を聽衆に與へて、感起力を減殺する。勿論、記憶力は天性のものではあるが、これも修養の如何によつて、天性健忘性の人でも强健な記憶力を持つやうになる。

雄辯家が記憶力の善いのは、その品性を增すと同時にその人の學殖の深さを思はしめる。それ故一個の飾物にもなるが、實は最も重大な資格である。演説家が、途中で重大な事項を二三點忘却してもその說明は光彩を失する。經濟上の問題を辯ずる場合、その數字を明白に語ると、語らないのでは、その演説の光彩がどれだけ違つて來るであらう。かう云ふ點から考へてみて、記憶力も亦雄辯家の重大な能力である。

(三)想像力――雄辯家として他人に快感や興味を與ふるには、單に心のまゝを語れば足りると思つてはならない。聽衆に多大の興味を與へるには、健全にして豐富な想像力がなければならない想像力と云つても、事實を誇張して語るといふ不健全な思想を云ふのではない。質實にして健全な想像力と云へば、先づ事實に餘り違はぬやうな想像力を云ふのである。

凡そ人間として想像力のないものはない。自分は外國に行つたこともないのに、新聞雜誌や、書籍や寫眞を見て、海外の事情、光景は此の如きものであると觀察を下し、それに基いて文章を書くとか、或は演說をするとかは、想像に基いて出來るもので、何等の想像力がなければ到底出來るものではない。白痴瘋癲でない限り、どんな人でも想像力がない人はないが、人によつて豐乏の差は免れない。この想像力なるものは、天性によるものであるから、如何ともすることは出來ない。しかしこれも亦他の能力と等しく修養の力で補充することが出來る。雄辯家として壇上に現はれるには、どうしても豐富な想像力がなければ、人を惹付けることは出來ない。だから、是非ともこの力を豐富にしなければならない。それには平生その覺悟で興味が多くて想像力を湧起せしめるものを讀むことなども大切な練習法である。

(四)判斷力——紛糾せる事柄に就いても、明晰な判斷を下さなければならない。雄辯家にこの能力がなければ、公衆に向つて堂々と自己の所見を開陳することは出來ない。殊に議論をして事の是非優劣を決する場合には、この力は必要缺くべからざるものである。例へば歷史上の問題に就いて云へば、井伊直弼を開國文明の先驅者で、英敏なる斷行家として賞讚するものと、彼は最も意氣地なき輩で開國進取の人ではなく、止むなく恐怖に驅られてここに出たのである。從つて眞の開國進取の人とは見做されないと云ふ兩派の議論があると、何れも相當な理由が立つから、井伊が眞の愛國的殉難者とも見られれば、不忠の臣とも解せられる。しかし雄辯家として堂々とその所說を公衆に訴へるほどの勇氣があるものは、何れなりともその信ずる所をとつて、他を排して屈しない判斷力がなければならない。かう云ふ場合に、自己一流の見識を立てて、十分徹底した眼光を以て、條理正しくことを判斷し、痛快なる斷定を下して、どんなものにも迷はない信念がなければならない。かうした明晰な決斷力が雄辯家には必要である。雄辯を以て人に訴へようとするものは、如何なる事物に就いても直裁明晰な判斷を下して、快刀亂麻を斷つの槪を缺いてはならない。これが出來なければ、雄辯家として、痛快巧妙な斷案を下すことが出來ないのは當然である。これも亦修養の力になつて、相當の程度までは上達することが出來るやうに思はれる。

以上は雄辯家の能力の重なものであるが、此等のものをよく硏究して壇上の人とならなければならない。

四、言語と音聲

今までに云つたやうな修養をすれば、直ちに立つて壇上の人となつて大雄辯が揮へるものではな

い。これから述べようとする言語、音聲、姿勢は雄辯の三大要素とも稱すべきもので、この三者を除いて決して大衆に向つて演說が出來ろものではない。

自分の思想を直節其の場で對者に傳へるには、先づ言語か表情を以てしなければならない。この言語にも、雅語、俗語、卑語、方言等がある。況して內外交通頻繁の今日では、漢語ばかりてなく英語、佛蘭西語、獨逸語伊太利語、西班牙語々等がある。言語と云つても殆ど際限がない位であるが、日本語で演說するといふ前提の下に論を進めて行かうと思ふ。

演說は聽衆に自分の思想を理解せしめるのが目的であるから、その言語は明亮簡單で誤解を招かぬやうなものでなければならない。如何に日本語で演說するとしても、その言葉の使用法が宜しきを得ない時には、全然失敗して演說の目的を達することが出來なくなる。言語は自分の思想を傳達する手段として用ふるのであるが、それと同時に聽衆に快感、優美の念を抱かしむるものでなければならない。從つて演說の用語は上品で倚麗で、且つ意味の明白なもので他の言葉と誤解されぬやうなものでなければならない。それには修辭學を應用することもいいことであるが、又常に讀んだ東西の文學書籍を參照して、その善美なものを採取するのが適當の處置である。

而して演說には是非とも日本の標準語を用ひなければならない。この標準語は東京に居住しないものでも、この標準語を用ふれば如何なる人に聞かせてもよく理解せられる。

東京は日本の文化の源泉地であるから、言語としても一番よく整つてゐる。勿論下賤な言葉がないではないが、それは下級社會か、乃至は地方からの輸入語に過ぎない。學術演說でも、政談、教育、宗教、說教、等の演說でも、この標準語を以て演說するのが一番立派で、且つ聞き善いのである。

奥州へ行けば例のズーズー辯であるが、このやうな言葉で演說しても、その地方は兎に角として標準語を聞き慣らされてゐる他の地方では少しも理解されないであらう。如何に苦心して演說しもて聽衆に判らないでは、結局失敗に外ならない。これを避けて堂々と演說して自分の目的を達するにはどうしても標準語を撰ばなければならない。

方言と云ふものは、自分としては何の氣なしに眞面目な顏をして使ふものであるが、他人から見ると實に滑稽である。日常の談話に於いてすらもさうであるから、況して多人數の人を相手に演說する場合には特に然りである。堂々たる論旨で流暢な語調で卑論を述べても、一寸した俗語とか、方言とか、その他下賤な地方語などを加へると、聽衆は「この演說家は餘り教育のありさうもない人である。」と云ふ感を起し、心中にその演說家を輕蔑する氣味になる。隅の方で一人がクスクス笑

ひ始めると、それが暗示となつて多數のものがドッと吹き出す途端に、演說家の熱誠はわけもなく殺される。その不利の大なることは殆ど云ふべからざるものである。それ故、地方の訛言なども力めて矯正しなければならない。

それにしても漸次に敎育が普及されて、交通機關は益々發達するので、遂には標準語が全國に行き亙つて、地方語訛言などが全くその影を潜める時代が來るであらう。かうなれば言語の統一上には眞に好都合であるが、かうなるまでには未だ大分年月を要する。ある地方語で演說すると、他の地方では全く理解されないものがある。と云ふのは奥洲の言葉で九州に於いて演說するとか、九州訛言で奥州へ出かけて演說しても、その言葉は全く理解されない。從つて演說も失敗に歸する。この場合に、標準語である東京語で述べれば、今日の如く敎育が普及された時代には、殆どこれを理解し得ぬ聽衆はゐない。敎育ある人には標準語が能く理解せらるゝのは、日本に限つたことではない。歐米各國皆然らざるなき有樣である。歐米人の演說は多くは言語明亮であるから、その意義も亦明白である。これは少くとも公衆の前で演說でもしやうとする人は、相當に敎育もあり、且つ又地方的訛言を脱するやうに力めるから、話が聽いても如何にも流暢である。文化の發達、文明の普及は言葉を整理して標準語を作つたのであるから、それを最も有効に使用すれば、雄辯術の眞の用語となるのである。

それにしても眞の雄辯の用語を生み出す爲めに、どうして日本語の朗讀を學ぶべきであらうか。それには機會さへあればどしどし演壇に起つて研究すべきであるが實際に自分の發音の惡癖を矯正すると同時に、言語の明亮を欲する人にとつては、謠曲や義太夫を習ふのが一種の鍛錬法とならう。演說の用語を美化するには、先づ何よりも標準語によつて優美雅致ある語を選取しなければならない。それと同時に現代の詩人が創造した、言葉を取り入れ、現代の文學書や「其の他の文献」等を參照しなければならない。

かうして雄辯の用語の研究が出來上つたならば、その用語を如何なる音聲にて發音すべきか、更に一考を要する問題である。ある人は、演說には音聲はどんなでも、又姿勢はどんなでも、苟もその趣さへ立派なものであれば、大演說であつてその他のことは末技に屬すると云ふやうな結論を下すかも知れない。これも一應の理屈ではあらうが、これでは文章も演說も同一なものに取扱ふことになつて區別が立たない。文章ならば默讀が出來るから音聲を立てなくても善いが、演說は多數の聽衆の前で述べ立てるものであるから、音聲を使はなければならない。この音聲が發表の最も重要な機關ではないか。立派に仕組んである名演說でも、銅鑼聲を張り上げて演說したなればどんなも

のであらうか。思想を現すに雄辯を借りるとすれば、それを表白するのは音聲である。この音聲の優美と明亮を欲することは自然の勢ではないか。

雄辯の音聲の理想は、どんな音聲であるかと云へば高くして能く澄めるものである。人の音聲には色々あつて一樣ではない。澄めるものもあれば、濁つたものもある。鐘の鳴るやうなものもあれば、牛の唸るやうなものもある。云ふまでもなく音聲は天賦のもので、俄にこれを變改することは出來ないが、平生の訓練一つで如何樣にもなる。性質のものであれば、これは先哲が屢々實驗したことであつて、雄辯に志ある人で音聲の惡いものは、幾多の工夫を凝らして人爲的に矯正して、立派なものにしなければならない。

雄辯に活氣を添へるものは音聲である。餘り面白くない論旨のものでも、これを明快にして流暢に抑揚頓挫ある音聲で述べ立てると、聽衆も思はず感動する。これは世間一般のことで、問題の旨向もあるが音聲の力によつて人を動かす場合も亦實に多い。多數の人を相手にするのであるから、その聲は小さいよりも大きい方がよく、低いよりも高い方が目的に適つてゐる。さうかと云つて漫に大聲をあげて咆哮する調子で述べてはならない。かう云ふ聲は長續きしないから、途中で疲勞を來すといふのは當然である。だから大抵六七分の程度で、その緩急高低をなすが至急と云はれてゐる。初めだけ大聲で漸次に疲勞を來して終りにはヒー／＼悲鳴を上げるやうに龍頭蛇尾に流れることは演說家の失態と云はなければならない。

かう云ふ呼吸を豫め注意して、その聲は充分に用ひ盡さないで先づ六七分の程度で使用しなければならない。かうすると餘裕綽々たるもので、悠容不迫の態度を保ち、高低緩急、意の如くなつて勞することなし、苦しむことなし、議論の妙境に入るに及んで意氣愈々揚る。その一度び、感激念憤の域に入つて咆哮すると、宛然雷霆忽ち落ち、風雨驟かに起るの概あつて、滿堂の聽衆は彼の舌端に恍惚として熱血一時に湧出する。これ卽ち音聲の使用法が巧妙である爲めに、感動を與たのに外ならない。

雄辯家が舌頭を使用するのは、宛然俳優や聲樂家が壇上でその聲を使用するのと同一である。かう云つたなれば、雄辯の神聖を汚すものであると云つて、憤怒するものがあるかも知れないが、事實、音聲を使用するところから見ると、雄辯家であらうと、俳優や聲樂家であらうとも少しも區別はない。この點から云つて、雄辯家が音聲の保護に注意することは、丁度劇壇の人のやうでなければならない。

前にも云つたやうに、人間には天賦の資質があるから、銅羅聲の人が俄に清朗明快な音聲になる

ことは容易なことではない。しかし修養の力は偉大なもので、天性の弱點に打勝つて、充分に美しい聲を發するやうになるのである。生理學から云つて、肺臓の弱い人は演説には不適當であるが、練習の力によつてその發聲機關を强壯にして、濁つた天賦の聲を改めて清く美しい聲にすることが出來る。それ故に、どんな人でも日々の修養を怠らなかつたなれば、美音美聲を發するやうになるのである。

人間の發聲機關が鍛錬を加へると四肢その他の如くに强健になつて、人の使命に應ずるやうになるのは、寧ろ意外なことである。希臘の雄辯家デモステネスが、雄辯に適合する美音を發するやうにならうとして、毎朝海岸に出て、大聲を發し、礫を口中に銜んで發音の工合をして、雄辯の習練をしたといふことは、何を我々に物語つてゐるのであらうか。それは明らに修養の力が天性に打ち勝つことを證明するものである。義太夫の女弟子が「寒稽古」と云つて寒氣凛烈な早朝から、その聲を練磨するのも、デモステネスの習練と同一の工夫に外ならない。聲樂の大家が高座に登つて、美しい清い聲を長時間に亘つて發しても、少しも疲勞しないで抑揚高下自由自在に歌つて、滿堂の聽衆の感嘆措く能はざるやうにするのは、何によつてであるか。それはたゞ音聲にするばかりではないか。そして多年その練習を積んだ結果として、その發聲機關が特別な發達を遂げた結果によるのである。換言すれば平生修養を積んで休まなければ、音聲も相當に發達して、長時間の演説に差支へないやうになるのである。

咽喉さへ健全なれば、その訓練を怠つてはならない。前にも述べたやうにその訓練には謠曲などは當を得たものである。これは日本式の朗讀の稽古となると同時に、音聲の訓練法としては最上のものである。それにても長時間に亘つてそれをやる必要はない。起床後二三十分づゝ缺かさずにやれば善い訓練法になるのである。又青年にとつては唱歌や俗歌などで咽喉をつくる方もよいかうして修練を積んで、長く喋り續けても疲勞を覺えないやうにしなければならない。さうでないと、聽衆に大なる印象を與へることは到底不可能である。勿論演説の主旨も大切であるが、その論旨が堂々として價値があつても、緊要な咽喉が悪くて、黄色な聲や、銅羅聲で述べ立てたのでは到底聽衆に多大の感興を生ぜしむる事は出來ない。耳で聽かせる性質のものが、聽くに堪へぬやうな忌はしい聲では、誰でも疲倦を催する。それ故、雄辯家に志すものは、平生から咽喉の修練を怠つてはならない。その修練を怠つてゐて、演説の時のみ俄に善い聲を出さうとしても、決してさう旨くゆくものではない。文章を作るものが先づ筆を執るやうに、雄辯を揮はうとするものは、先づこの音聲を以て自分の思想を發表する。從つてこの音聲が雄辯を揮ふ時の中樞をなすものである。

五、姿勢（ヂエスチユア）その他

雄辯の三大要素の中で尤も困難なもので、最も修練を要するものは、云ふまでもなくこの姿勢である。西洋の雄辯術を說いた書中には、姿勢卽ち**ヂエスチユア**のことを詳しく述べて、それに圖解まで入れて、――斯かる時には、かうせよ。斯かる場合には、斯くせよ――と一々例をあげて示してある。勿論これにも法則があつて、勝手に書いたものではないから、相當に參考になるには違ひない。しかし、一々書物に記載してある通りにやつて行けば、それで充分であると思ふのは間違ひである。それは單に大體の暗示を與へるものに過ぎない。實際の場合に臨むとその通りではよくない點が起るから、書物上で說いた姿勢を凡呑みにして、それで足りると思つてゐる人は、共に雄辯の活術を談ずるに足らない。書中に書いてある姿勢は大體の注意を與ふるに過ぎない。千變萬化して料り難き活きた雄辯に處する姿勢を一々書中で說明することは、到底人力の及ぶところではない。

永井柳太郎氏の如きも此の事に就き本書の序文に書かれた。

かう云つたからと云つて、姿勢卽ち演說に處する時の態度、及び身振その他のことを輕視するのではない。それ等のことを何處までも重大視して、姿勢上の修養を積まなければならない。演壇に現はれて、單に自分が云ふべきことを云ふことは誰にでも出來る。三尺の小童でも、――「――皆さん、今日はよくお出で下さいました。」位の挨拶は出來る。これだけでは雄辯とは云へない。聽衆に何等かの感動を與へる爲めには、姿勢態度その宜しきに協ふことが極めて重大である

若し自分が云はうと思つてゐるものを云ひ終りさへすれば、雄辯の目的は達したものとすれば、我々は多忙な時に萬事を繰合はせて演說會場に出席する必要はない。それなら文章を書いて他人に代讀させてもことは足りる。又樂屋の中に潛んでゐて自分の所思を述べてもいいのである。或は一層簡便な法を取るには、蓄音器に自分の演說を吹き込んでそれで演說に代へても善いわけである。しかしそれでは聽衆に對して感動を與へることは出來ない。だから結局、雄辯の目的が達しられないことになる。

多數の人の前に現れて演說することは、文章や蓄音器では到底及ばない力がある。本人自らが陣頭に現れて、その熱誠な雄辯を揮へば、文章で感じるより以上に聽衆は感動する。それにしても、この感動を與へることは、容易な業ではない。議論の主意は堂々として犯すべからざる威力を帶び

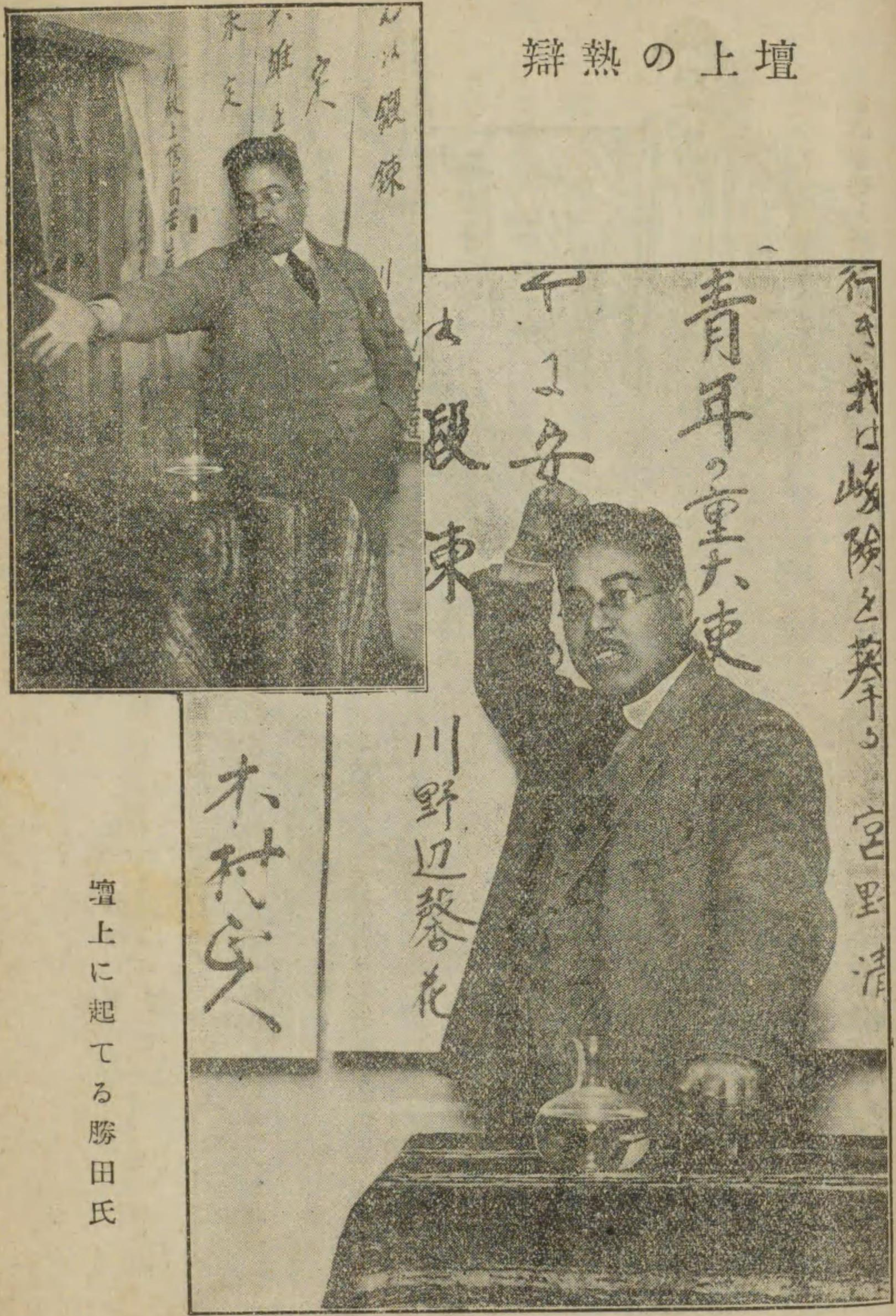
てゐるとしても、風采といひ、姿勢といひ、態度といひ、よくこれに伴はなければ何の役にも立たない。否、ともすると名論もそれ等のものによつて打ち壞されることがないでもない。

さうかと云つて「これから演說をするぞ」と云はぬばかりの調子で、堅苦しく構へるのも面白くない。要するに我々の姿勢は殊に氣取らないで、自然にしなければならない。殊更らに技巧を加へてはならないといふ一言に盡きてゐる。かうすれば、喜びの時には自然と頰や唇に笑ひを帶び、怒つた時には眉を顰め、驚いた時には左も當惑したやうな狀態が現はれるのである。これ即ち自然である。この自然のうちに、詐りもなく、飾りもなく人間の眞情が美るしく流露するので、それによつて聽衆は動かされる。

言語で及ばないところは、姿勢と態度とで助けるのであるから、雄辯は文章や蓄音器やラヂオ等よりも大なる印象を與へる。言語で充分に現はれなければ、姿勢でこれを一層强める。それ故に、姿勢と態度とは何處までも言語と並行させなければならない。かくて姿勢は自然の理法に從つて、表示しようとするものが最も明白に表示されるやうに修練を積まなければならない。何れにしろ演壇へ立つてぐにや〳〵身體ばかり動かしたりぺこ〳〵お辭儀ばかりしてゐるのは滑稽だ。

この姿勢と態度は聽衆に快感を與へるものでなければならない。他人に不快を與へるやうな動作

壇上の熱辯



壇上に起てる勝田氏

は謹んでこれを避けるべきである。例へば両手を洋服のズボンのポケットに入れたまゝ演説すると、和服で手を懐に入れて無頓着な風に出ずるのは、本人の意志は第二として、聽衆を愚弄したやうに見えて決して快感を與へない。寧ろ忌はしい念を起さしめるものであるから、かうした動作は極力注意して避けなければならない。

何人でも明快流暢の雄辯家として、風采が堂々たるものを欲する。しかしこの風采なるものは、一様ではなく矮少の人もあれば、巨大の人もある。だから殊更らに虚榮虚飾を事として、美服をつけて觀客に示すやうなことは全く不必要なことであるが、適當な風采を保つて、他人から見て笑ひを蒙らないやうに準備することも必要である。

衣は肝に至り袖は腕に至るとは、頼山陽の詩にある薩州健兒の風采であるが、學生なればそれでも善いかも知れないが、大人の集まる席上にそんな詰らぬ一種の虚榮を張つて出席したよりも、尋常一様な衣服で現はれた方が成功の可能が多い。必ずしもフロックコートとか、又は羽二重の羽織に仙臺平といふ服裝で現れる必要はない。木綿の袴に羽織でも結構であるから、他人に不快を與へぬ服裝で出席すべきである。

或人は演説するには、前面に卓子を置かなければ不體裁なやうに感じて、必ず卓子を前に置き、

水注まで載せて置くやうにしてゐる。これは一方から見れば如何にも用意周到のやうに、思はれる又これがなければ手持ち無沙汰だといふやうに感じるのは、習慣の力である。しかし、かうした習慣が自分にあるとすれば是非とも打破しなければならない。演說する目的は何度も云つたやうに、文章やラヂオでは及び難い至大な印象を聽衆に與へる爲めである。即ち言語の及ばないところは、姿勢や態度で補ふのである。それ故、前面に卓子などを置いて身體の一部分でもその表現を防げるといふことは、眞に雄辯の道に悟入したものには一種の邪魔ものである。全身を聽衆に示して、全身の自由自在な運動を悉く現して、言語の及ばない點を助けるのが、一番有利である。自分の前に巨大な卓子を置いて全身の二分の一、乃至三分の一のみを示すといふのは、身振を他人に示すのを避けるやうなもので、これが爲めに聽衆に與へる多大の興味と感動を全く減殺する場合がないでもない。自分の身體を聽衆の面前にその全部表して、——手を動かし、首を振り、身體を動かし——等して、赤誠を以て辯じたなれば、聽衆に多大な感動を與へるであらう。又一方からしてゐるうちに、演壇上に於ける姿勢や態度の呼吸が漸次に判つてくるのである。

日本人の演說は西洋人のそれに比して **ヂエスチユア**を用ふることが、、比較的少ないのが普通である。餘りに多く**ヂエスチユア**を使つて俳優の如く行ふのも考へものである。さうかと云つて、全然**ヂエスチユア**を無視して、天井の一方を凝視し壇上に木偶の如くに突立坊となつたまゝ口ばかり動かしてゐるのも實に拙劣な方法である。これでも思ふことは充分に云ふことが出來るかも知れないが、雄辯の根本たる生氣とか活氣とかが全く喪失してゐる。丁度、氣の抜けた酒のやうに妙味もなく趣味もないものである。

日本の雄辯體は自然的雄辯法である。だからそれ相當に自然の理法の命ずるがまゝに、この**ズエヂチユア**を用ひなければならない。そして壇上の中央に位置を占めて、泰然自若たる意氣で、始めは靜かに語り出して漸次に語調を高めて、最も感動を與へる樣に雄辯を揮はなければならない。言葉の表現は、又一方**ヂエスチユア**と大きな關係がある。といふのは、聽衆に多大の感動を與へる爲めには、言語を發すると同時に、その意味を又牡貌に現はさなければならない。單に言語の表現のみで、器械的に云つただけでは、躍如としてその人の所思が現はれて來ない。この兩相寄り相助けて、初めて雄辯は成功するのである。

「わが腕を斬れ。わが脚を斷て。わが耳を落せ。わが鼻を削げ。然も若しわれにしてこの三寸の舌なほ存せば、われは天下を動かさん。」と、叫んだのは誰であるか。その大雄辯家は又言を重ねて云つてゐる。**「あゝされど、われよりこの兩手を奪ひ去らば、わが天**

下を動かすの辯は、忽ちにして一群を支配するの辯とならん。」と嘆じたのは一體何を意味するのであらうか。彼は雄辯なるものは決して舌のみ――言語のみ――のものではなくして、**ジエスチユア**によつて始めて生きることを物語つてゐるのである。其の他うまさうに有ひはまづさうに水ばかり呑んでゐたり、演壇の上を動物園の虎みたいに行つたり來たり行つたり來たりするのもまづい。

六、雄辯成功の秘決

雄辯家の姿格もあり、能力もあり、その要素も完全に修練したものが、如何にすれば自己の所説を發表する演説に成功するであらうか。それに何等かの秘決がないであらうか。その條件は頗る多い。――條理一貫すること、言語の明快、勇氣の充實、聽衆の同情を得ること、熱誠横溢、及び興味多大――の六大條件を備へてゐなければ殆ど成功しない。若しこれ等のものを完全に備へてゐるのに、それでも尙且つ成功しないとすれば、これは最早雄辯家に責任があるのではなくして、聽衆に責任があると云はなければならない。しかも古今東西の雄辯家の實例から考へて、みてこの六ケ條を備へてゐて大喝采、大成功を奏しないものは殆どない。と云ふのはこの六ケ條は雄辯成功の秘決であるからである。この秘決を私は順を追ふて説明したいと思ふ。

（一）條理一貫すること――どんな演説でも、その云はうとする題目の下に秩序が立つてゐて前後がよく脈絡が取れてゐなければならない。單にそれは議論的問題を取扱つた時ばかりではないどんなものでも、この見地から割り出して行かなければならない。例へば「富士の風景」といふ題目に就いて演説をすると假定する。その時に富士山のことを述べて、他の高山との比較論をして富士の風光の美なる所以を對照せしむるのは少しも笑ふべきことではないが、突然にして富士山のことを止めてアルプス山のことを云ふとか、筑波山のことを云つては、最早本題の富士山には無關係になる。かうなつてはその題目に外れて、何を云つてゐるのか殆ど判らなくなる。かう云ふ種類の演説には誰一人として共鳴する人もないことは確かである。

論理學の一般を修めた人は勿論であるが、その素養がない人でも、常識から考へてその演説の條理が一貫してゐるか、ゐないかは明確に判斷し得られるものである。その判斷によつてその條理が一貫してゐない言説は一切排除しなければならない。

（二）言語の明快――日本人が日本語で演説をするのに、言語が明快でない筈はないと思ふかも知れない。しかし日本人でも東北や九州の其の他の方言訛言を多く用ひれば、多くの人には理解さ

れない。又敎養ある人が、その敎養を誇るといふやうに、漫りに難解な熟語を使用したり、時としては英、佛、獨の言葉を使用してその博學を誇示するに至つては、一般の聽衆は迷惑するだけである。それが學者達の集合ならばいゝが、一般の人を集めた演説に、この種の外國語を混用すると言語が不明瞭になるばかりでなく頗る氣障なものである。明快な辯舌と、理解し易い言葉で適當な問題を提げて、堂々と演述すれば、何人でも感動しないではゐられない。

(三)勇氣の充實――勇氣といふものは、何事をするにも必要なものである。わけても戰場に臨んで敵軍と對抗するやうな場合には特に必要であるが、雄辯家として壇上に立つにも、亦、非常な勇氣が無くてはならない。勿論壇上には劍戟閃き彈丸雨下する間を馳驅するやうな危險はない。しかし多數の聽衆を前に控へて忌憚なき意見を述べるにはどうしても勇氣がなくてはならない。笑はれないであらうか自分の意見は輕卒なものではないであらうか。又自分の意見に對して世間は何と批評するであらうか――等を心配してゐては、多人數の前に現れて堂々と所見を披瀝することは出來ない。

演壇に現れても、勇氣が全身に滿ちあふれてゐないとその演説に活氣がない。言葉に油が乘らないで聽衆に何等の感動も與へることは出來ない。古今の名流の大雄辯は何れもこの勇氣が滿々とし

てゐる。**デモステネス**のフキリップ攻撃の熱辯が雅典の人をして顏色なからしめたと云ふのは、**デモステネス**の勇氣が外面に流露したからである。**アントニー**がブルタスの意見を駁したシーザー追悼の雄辯を揮つたことがある。この雄辯が羅馬市民を泣かしめ、たといふことは、實に **アントニー** の至誠と勇氣とが知らず識らずの間に現れたからである。かくて勇氣は壇上の人をして戰士たらしめ、且つ人々を感動せしむる原動力であるとも謂へやう。

(四)聽衆の同情――演説に成功するには、聽衆を恐れてはならないと同時に、聽衆の感情を傷つけてはならない。聽衆は演説家にとつて大事な華客である。商人が華客の感情を害しては營業をなし得ないと等しく、演説家は聽衆の同情を得なければ何事も出來ない。雄辯なるものは、一人角力ではない。自己の所説を聽いて呉れるものがなければ、如何なる名論卓説も寶の持ち腐れである。それ故、演説家は聽衆の心理を解してその所感を害するやうな言葉を用ひてはならない。しかし同情を求めると云つても、心にもない愛嬌を振り蒔いて自己を欺くやうな便佞の言を弄してはならない。雄辯家は自己の主義主張を以て演壇に立つものであつて、俳優や藝人が觀客の愛顧を求むると同一視してはならない。如何に雄辯家であつても、聽衆に所見を訴へその心を動かさうとすなら、卑しからぬ意味で聽衆の同情を得なければならない。同情を得なければ謹聽しなくなる。謹聽

しなくなると、自然その演説を疎んじて退出するものが陸續と起る。退出しなければ「簡單々々」といふやうな聲が起る。聽衆をして自分の所説を傾聽せしめて他を顧る遑がないやうにするのが、眞の雄辯家である。聽衆に嫌はれたり飽きられたりしてはもうおしまひだ。

(五)熱誠横溢――演説で聽衆を感動せしめるのはたゞ熱誠あるのみである。言語が稍々亂れたのは恕すことが出來る。説明が不十分であつても忍ぶことが出來る。論理が多少相違したと云つても看過することが出來やう。しかし熱誠の缺けた雄辯は殆ど聽くに堪へない。古來、雄辯術には二つの方法がある。一つはその題目の下に、簡明適切に、何等の熱狂もなく叙述することである。今一つは、聽衆の感情を喚起する熱誠横溢の雄辯である。議場の演説は前者であつて、政壇演説は後者に屬するものである。それにしてもこの熱誠は或る目的を達する爲めに虛構を裝ふやうなものではない。これは雄辯家がその討究する題目に全力を集注することによつて發するものである。換言すればある希望を鼓舞されて一種の刺激的行爲に出たものである。しかし眞の熱誠は眞實、公平、無私から發するものであつて此の熱誠のみが萬人をして感動せしむるのである。

近代人では**ミラボー**が最も熱烈な辯論を揮つた。彼の辯論は丁度電池のやうで、一言又一言、次第に傷感を急打して來ると云はれた。しかし熱誠に驅られたとしても、條理が整つてゐないと、人の傾聽的熱心を冷却して次第に輕侮の念を起さしめる。それ故、自ら深く戒めて、熱しても狂しないやうにしなければならない。壇上に起つても憤激のあまり若しくは悲哀の極一言も發することが出來ない場合もあらうが、此の場合其の人を雄辯家とは云はない。沌朴卒直で公平無私で、且つ獨立不羈の念慮は斯る熱誠家の特色であるから、その云ふ所に無理のありやう筈はない。又つまらない嫌疑を蒙るやうな恐れもない。衷心から出た赤誠は論理學を學ばないでも自然に論理に叶ひ、修辭學を研究しなくとも自然修辭の妙を穿ち、心理學を修めぬものも自然に心理學に一致して、聽衆に深い感銘を與へるやうになる。此處には事理の顚倒する恐れや、人情に反した論斷が起る筈がない熱誠は何等の修飾を加へなくとも聽衆を惹き附ける威力である。

(六)興味多大――一概に雄辯と云つてもその種類は實に多い。議場の演説、政談演説、學術講演、滑稽趣味の談話、討究會、説教、法廷の辯論、等擧げ來れば數へ切れないほど多いから、必ずしも一樣に論ずることは出來ない。從つてその中には撤頭撤尾眞面目に辯論しなければならないものもある。しかし多數の人を集めて、自分の意見を陳述して聽衆を説服しようとするには、演説に興味を含ましめて疲勞させないやうに聽かせなければならない。海外視察者が歸朝の上で、その目擊したことを演説する場合には、時に日本人が知らないことを述べるのであるから、特に興味のあ

るものを加へなくとも成功する性質のものである。これを反對に單純な議論問題は、ともすると乾燥無味に流れて、聽衆を倦怠させ易い。かう云ふ場合に面白い例などを入れて、一大彩色を加へて聽衆の疲倦を解くやうにするのが雄辯家の一種の技術である。かうして聽衆の喝采と同情を博するこの興味を與へるにはどうすればいいかと云ふに、それには實例を多くして、人の印象を强めるのが一番大切なことである。かうすれば乾燥無味な問題に興味が加はつて、學問のない人にもよく理解される。道徳とか、修身等の問題は如何にも堅苦しくなつて、俗耳には入り難いものであるからこの點を殊に注意しなければならない。

聽衆に快感と興味とを與へる引例を交へて談論を試みると、その所説に光彩を添へて、聽衆を惹き附けて面白くその辯舌を傾聽せしめる。如何なる名論であつても、演説中に聽衆を退散せしめるやうでは、演説家としての技倆の不足を證明するものである。演説が終るまで無事に聽衆を惹き附け得るのは、即ちこれ雄辯家としての技倆を備へたるものである。以上の六大要項は雄辯家の秘決である。少くともその雄辯をして成功せしめるには、これを完全に備へてゐなければならない。と云ふのは、これがあつてこそ、始めて演説に生氣を與へ、趣味を添へ、人を感動せしめる。この六大要項のうち一つでも缺けたならば、到底、長時間にわたつて聽衆を心服せしめることは出來ない。

第三章　辯論の準備と對度

一、準　備

雄辯家となる修養を積んで、愈々壇上に立つて自己の意見を發表する雄辯を揮ふことになつたとき、その準備として先づ第一に必要なことは雄辯材料の選擇である。（突嗟の場合は別として）と云ふのは單に明快流暢の言語と修辭的文章を羅列しただけでは、聽衆は必ず感動するものではないからである。それ故、どうしても材料を選擇しなければならない。先方から『何々に就いて話して貰ひたい』と依頼して來た時は勿論、さうで無い場合でも材料を選擇して、その會場の聽衆に最も有效な主題を選ばなければならない。少年小女に話す場合と、大人とは自然に違はなければならない婦人と男子とも異るべきである。又老年と青年とは違はなければならない。知識の程度によつても當然異るべきである。又市民と農民とによつても違はなければならない。又國土によつても違はなければならない。

かくてこれに最も適當する主題を選擇したなら、今度はそれを如何なる手法を用ひて、最も有效

にその理論を進めるべきかを考へなければならない。それが聽衆に多大の感動を與へるものは、先づ次の三種であらう。

一、譬喩を使つて面白く理論を説明すること。

二、實例を擧げて説明をすること。

三、古人や聖人の金言を引用し、又時には統計に基いて自分の議論が正當であることを證明すること。

等である。單に抽象的な幾多の理論を並べ立てても、乾燥無味となつて、折角の理論もその印象が薄い。これでは演説した甲斐がなくなるから、例へ理論の演説をするとしても、よく判るやうに面白く話すのが一番大事なことである。哲學や宗教等の無形なものを老人や婦人に語るには、或は實例を以てし 或は譬喩を以てするのが判りよくて面白いものとなるから、是非ともその方法を取らなければばらない。聖書に散見する基督の説教は常に多くの譬喩を設けて理解し易いやうに述べてゐる。この譬喩は實に適確なもので、しかも巧妙であると云ふ點で古今に絕してゐると云はれてゐる新約聖書に現はれてゐる有名な譬喩を參考に掲げてみよう。

一 彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども、內は殘狠なり、是れ其果に因て知るべし、誰か荊棘より葡萄をとり蒺藜より無花果を採ることをせん。凡そ善樹は喜果を結び、惡樹は惡果を結べり、善樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能はざる也、凡そ善果を結ばざる樹は斫れて水に投入らる、是故に其果に由て之を知るべし。

二、狐は穴あり、天空の鳥巢あり、されど人の子は枕する所なし。

三、新しき布を以て舊き衣を補ふ者はあらじ、蓋はつくろふ所のもの反て之を壞り、その綻び尤も甚しからんまた新しき酒を舊き革囊に盛るものはあらじ、若し然かせば囊はりさけ、酒もれ出でゝ其囊も亦壞らん、新しき囊に新しき酒を盛りなば兩つながら存つべし。

四、天國は人畑に美種を播くに似たり、人々の寢たる間に其敵來り、麥の中に稗子を播て去り苗はえ出でゝ實りたるとき稗子も現はれたり、主人の僕來りて曰けるは、主よ畑には美種を播かざりしか、如何にして稗子あるか、僕に曰けるは敵人之を行せり、僕主人に曰けるは、然らば我儕ゆきて之を拔あつむるは宜しきか、否恐らくは爾曹稗を拔きあつめんとて麥をも共に拔べし、收獲まで二つながら育ておけ、我かりいれの時、まづ稗子を拔きあつめて焚んために之を束れ麥をば我が倉に收めよと刈者に言はん。

五、それ天國は朝はやく出で葡萄園に工人を雇ふ主人の如し、工人には一日に銀一枚を與へんと約束をなし彼等を葡萄園に遣はせり、また九時頃出て街に空しく立てる者を見て爾曹も葡萄園に行け、相當に價を與へんと彼等に曰ければ則ち住けり、また十二時と三時頃出て前の如く行けり、五時頃出でゝ又外の立てる者に遇て曰けるは何故終日こゝに徒く立つや、之に答へて曰けるは、我儕を雇なきに因てなり、彼等に曰けるは、爾曹も葡萄

園に行け、相當の價を得べし、日暮るゝとき、葡萄園の主人、其家宰に、曰けるは、働きたるものを呼て、後に雇へるものを始とし、先の者にまで價を給へよ、五時頃に雇はれしもの來りて銀一板づつを受けたり、先の者ども來りて我儕は多く受くるならんと意いしに亦銀一枚づゝを受く、これを受けて主人を怨みつぶやきけるは、この後至者の勞力たるは、一時ばかりなるに、終日くるしみを任あつさに當る我儕と均しく之をなせり、主人その一人に答へて曰けるは、友よ我なんぢに不義をせず、爾と銀一枚の約束をなしたるに非ずや、爾のものを取り往け、われ亦この後至者にも爾の如く與ふべし、我物を以て我おもふ如く行は宜からず乎、わが善に因て爾の眼あしき乎、此の如く後の者は先きに、先きの者は後になるべし、夫れよばるゝものは多しと雖も選るゝ者は少なし

六、其とき天國は燈を執て新郎を迎に出づる十人の童女に比ぶべし、その中の五人は智く、五人は愚なり愚なる者は其燈をとるに油を携へざりしが、智き者は其燈と其油を器に携へたり、新郎おそかりければ、皆假寢して眠れり、夜半ばに叫びて新郎來りぬ出で迎へよと呼聲ありければ、この童女皆おきて其燈を整へたるに、愚なるもの智きものに曰けるは、我儕の燈熄へんとす願くば爾曹の油を我儕に分與へよ、智きもの答へて曰けるは我儕と爾曹とに恐らくは足るまじ、爾曹賣者に往て己が爲に買へ、逝かれら買はんとして往きし時、新郎きたりければ既に備へたる者は、之と偕に婚筵に入りしが門は閉ぢられたり。

七、燈を持來りて斗の下、あるひは牀の間に置くものあらんや、之を燭臺の上に置くならずや、隱れて明啾にならざるはなく藏んで露はれざる者はなし、耳ありて聽ける者は聽くべし。

八、神の國は何に比べ、何の譬を以て喩へん、一粒の芥種のごとし之を他に播くときは百樣の種より微けれども既に播へ萌出づれば、百樣の野菜よりは大きく、かつ大なる技を出して空の鳥その蔭に棲ほどに及なり。

かく基督の譬喩は自由自在なもので、天國の有樣が手に取つてみるやうに判然と描き出されてゐる。かうして嚙んで含めるやうに言はれゝば、如何に無智識なものでも高尙な靈精上の問題がよく理解し得るのである　譬喩で說明すると、つまらない理屈でも面白くなつて印象を强くするに足るのである。事實ばかり云つてゐると、聽衆は何等の感興も起さないから效力が薄い。尤も譬喩としても右の如く適切なものならばいいが、不適當のものならば却て破壞的に終るものである。

又演說準備をするに當つて、實例をあげて適切に說明するやうに組立てなければならない。實例をあげると云ふことは、一種の證明法で今まで云つたことに疑ふことの出來ない證據物件を提出することになるのである。しかもその實例が適切で面白いものであると、腐を化して新としてこの辯士の議論に一層美しい色彩を放たしめる。雄辯家としては、高尙な議論をする時は勿論のことであるが卑近の問題に就いて語る時でも實例をあげて論ずるといふことは無限の興味と魅惑とを感じさせると共にその論が獨斷的でないことを證明する重大なものである、それにしても聽衆を赤面せしむることや、憤怒せしむることや、下賤の感を起さしむること等は縱令それがその場合に適合する

實例であるとしても避けなければならない。この實例なるものはどんなに大切なものであるか、此處に「自信の力」といふ題の下に演說をするとして實際に臨んで考へてみよう。その演說が次のやうなものであつたなら、どんな結果になるであらう？

「――人間は自信の念がなければ、何事も出來ないものであります。大人物と云はれる人は、何れも自信の念が强かつた人で、是は洋の東西を問はず何よりも確かなことである。將來世に立つ青年は、自信力を養つて、掛らなければ駄目であるから、お互に勉强してこの力を養はうではないか。」

成程それには相違ないから、何も否と叫ぶものはあるまい。否定はしないが物足りない。言葉通りの無味乾燥である。老人達は恐らく睡氣を催すであらう。この議論の骨組みに、これを準備する時に何か適當な實例を加へたなれば、より以上に聽衆を引きつけることが出來る。この骨子に大人物、偉人の例を加へて「先づ太閤秀吉は如何であるかと點檢してみるに……」と前置きして、

『本多忠勝は德川四天王の一にして、三河豪傑中の豪傑である。慶長元年七月、大地震があつて伏見城の樓閣が悉く破損した。家康が急いで登城して秀吉を見てその無異を賀し、且つ速に天機を伺はむことを勸めた。秀吉曰く「我もしか思へり、されど斯かる異變にて、陪從のものまだ整はず幸のことなれば德川殿にも共に行かるべし、從士を借り申さむ」とて、家康の陪從を從へて出た、途中で秀吉曰く「久しく刀を佩き居れば、腰の邊重くして堪へ難し、從臣の中に持たるべし」とて刀を脫したので家康自ら之を持つた。秀吉曰く「それにては心苦し、家臣の內に渡されよ」と家康これを井伊直政に持たしめた。幾くもなくして秀吉の從者追ひ來つて轎輿を用意したので秀吉之に乘らうとして、本多忠勝を呼びよせ「汝が下心には今こそ秀吉を討たんと思いつらむ。されど汝の主の家康は、懷に入りし鳥を殺すやうな事はせぬ人なり、我れ前きに汝に刀を持たせたく思ひしが折惡しくて隔りたれば、間も合はで、殘り多し。汝に持たしめたれば、さぞ面白からんものをと、斯く思はるるも、汝等は畢竟小心者なればなり。」と笑ひながら轎輿に乘つた。流石の本多も秀吉に遇つては、まるで小兒扱ひであつた。

新納武藏と云へば、薩摩豪傑中の豪傑であつた。その主島津義久のところへ秀吉が來た時、武藏守は衆中に廣言して曰く「謁見せば秀吉を一刀に刺さむ。」と。謁見の時に秀吉が彼に向つて「其方まだ軍がしたきか」と問ふた。武藏守は答へて「主人に敵對致さるれば幾度にても軍を致すべし。」と云つた秀吉はその言を壯として陣羽織を脫いで、彼に與へた。武藏守は進んでこれを拜受して次の間に退いた。「又遣るものがある」と云つて、側に立つてあつた白刃の長刀蝶鮎のを取り、石突の方を差出したので、武藏守は恐る〳〵近づいてこれを受けた。歸宅すると少年の壯士どもが押寄せ

て「今日は如何にせし」と問ふた。『いや／＼、秀吉は迚も我等の手向ひ出來る人に非ず、今日はこの武藏も腰が拔けたり」と語つた。』

このやうな實例を取り入れて話せば、實にかくあるべき筈のものであるといふ念慮が油然として湧き出て來るのである。かうしてみて初めて實例の效果がどんなに甚大なものであるが、明瞭になるであらう。單に抽象的ではその理論が生きて人々の肺肝に働きかけない。

最後に立論の正當なことを證する爲めに、或は金言を引くとか、古聖賢の言を用ふるとか、又統計的數字を擧げるといふやうなことは、世上の雄辯家の慣用手段であるから、材料の選擇上よく心得て置かなければならない。統計表を揭げることは、數字ばかり多くして趣味が乏しい。しかし自己の立論を具體的に證明することが出來るから、非常に好都合である。證據物に基いて議論を進めて斷定を下すのであるから、決してそれが獨斷とか妄斷とかにはならない。如何にも公平な議論のやうに思へて、雄辯の目的を達するのである。

それにしても、此處に一つの注意しなければならない問題が潜んでゐる。所謂統計なるものは數字の羅列で、特別にこれに興味を持つてゐる人の內には、以れも無味乾燥で、人を喜ばせるものではない。人の感興を呼び起すものではない。從つてこれを用ふる時に、は餘程巧妙に引用する心要がある統計も譬喩でも用ひて話せば興味さへ湧かせることが出來ないものでもない。

雄辯の材料の選擇は、各自の考へもあるであらうが、先づ以上の三法を除いては聽衆に深い印象を與へること、興を多くすることは出來ない。それにしても材料は出來るだけ新しい、面白いものを用ひなければならない。金言や格言にしても、誰にでも知れ切つてゐるもの、例へば「山高きが故に貴からず、木あるを以て貴しとす」とか、「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり。」と云ふやうな古臭くて黴の生えてゐるやうなものは、惰氣を催すばかりである。例を出すにしても誰でも知つてゐてありふれたものは少しも興味がない。又面白い實例であるとしても、名もない人の失策談は何等の感興も呼び起さない。有名な人の行爲のうちで、未だ世に普く知られてゐない實例が耳新しくて興が深い。譬喩としても難解なものはよくない。無教育なものにも判るやうな巧妙な比喩を自由自在に使へるだけの用意が必意である。

二、草稿その他

材料の選擇が完全に出來あがれば、その次には草稿の作成にかからなければならない。それにしても日本の今日の雄辯家は何等の具體的な用意もなくして、演壇に現はれるのを得意に思つてゐる

らしい。演說の爲めに特に準備をするやうなことは思想の貧弱なものと見做してこれを賤しむものさへある。從つて演說會に於いても「題未定」の掲示をなすものがある。これは雄辯家が會場へ出席する途中に何か問題を考へ出して、當座の間に合はせるといふことである。所謂これが即席演說であるが、この方が突嗟の間に準備が出來て、結局氣が利いてゐると思つてゐる。果してそれが雄辯として立派なものであらうか。

大隈伯の如きはこの種の雄辯の急先鋒で、即席演說に巧妙なことは天下その右に出づるものがないと云はれた。ある時關西へ旅行した時には一日に十時間も十二時間も演說をしたとのことであるが、かく一日に回數を重ねるには一々準備することは到底出來るものではあるまい。勿論雄辯道に悟入すればそれも可能であるが、普通人がその眞似をしたなら、吃度失敗に終るべき性質のものである。平々凡々な感想を述べ立てることは誰でも出來るであらうが、誰人でもその論に卷き込まれるやうな奇拔で興味のある問題を聽衆に示すには、其處に相當な準備がなければならない。それは云ふまでもなく草稿の作成である。

今日の社界では即席演說の出來ない人は、手腕の足らない人とか、言ふべき材料の乏しい人のやうに思つてこれを貶す者がある。しかし、幾度か其の演說を重ねて暗誦してゐるものならとにかく、

首尾の統一した大雄辯を揮ふには、何等の準備も無く草稿を持たずしてくしては絕對に出來る筈がない。勿論突然では名論卓說を吐かうとしても、到底不可能である卓上演說、即ちテーブル・スピーチや、祝賀會、開業式、結婚等に於ける即席演說は特に準備しなくとも出來るものであるが、少くとも公會席上の演說をこれと同一視することは出來ない。

草稿によつて演說の準備をすることは、頗る有利なもので一々數へ切れないが、その最も顯著な點のみを示すと、第一は自分の所說を洩れなく指示し得られる。第二に順序正しく演述することが出來る。第三に冗長放漫の語句を去つて必要なことのみを擧示することが出來る。第四に其の演說材料の記憶を正確にする等である。

自分の所說を洩れなく述べると云ふことは、容易のやうに思はれるが實際演說をしてみると往々言ひ洩しが生じる、結尾のころになつてそれに氣がついても、今更ら補充することも出來ないので大いに困却することがある。しかし一々草稿にこれを記述して置くと、かう云ふ心配がない。又順序正しく云ふことも演說上大いに必要なことである。長い演說をしてゐるうちに、順序を違へて赤面するやうな場合がある。しかし草稿によつて論を進めて行けばかうした心配がない。そして云はうと思つてゐることは全部草稿に書いてあるので、それによつて論を進めて行くのであるから、自

然に冗漫迂遠の辯が消失して、極めて簡潔明晰ものとなる。

　草稿なしに演説する人は、外見上の受けはよいやうに思はれるが、實は責任を解しないものである。と云ふのは、その時偶然に頭に浮んで來る熱情を喋々と述べ立てるに過ぎないからである。識者に訴へ、民衆と共に語るには拙劣でもあり、又不親切だと云はなければならない。人の思想には限度があるものであるから、金玉の感想が滔々として溢ると云ふことは天才でなければ出來ぬことである。かくて外國に於いても、**ジヨンブライト**の如き、**コブデン**の如き、**ピツト**の如き、の如き、**フオツクス**の如き、**チスレリー**の如き、**グラツドストン**の如き、著名な雄辯家は尤も丁寧に演説の草稿を作成したのであつた。當日留學中の有名な英國の雄辯家が他から招待を受けて演説を求められた時、準備がないから謝絶したといふやうなことは殆ど日常の事件のやうに多くあつたのを見ても、如何に準備に忠實であつたかと云ふことが判る。

　我國に於ては永井柳太郎氏の如き一字一句も事實に反したことは云はぬと云ふ信念のもとに愼重精査立派な草稿を作られる。

　さて私は今此處に「勞働組合の」といふ演説の草稿の準備例を示して、青年雄辯家の參考に供しやうと思ふ。

（上）序　論（現在の社會制度と勞働問題の意義その生發と進展に就いて大要を述ぶ）

勞働問題は今日に於ける尤も重大な問題である。と云ふのは——

（一）勞働者と雇主との關係

（二）この二者の利害は相反してゐる

（中）本　論

（一）勞働組合は勞働者階級の福利を增進する。と云ふのは——

（イ）この爲めに薄給のものに對しては保護を與へる。

（ロ）過度の勞働を防止する。

（ハ）資本階級に對して團結の力の偉大なることを示し、自由と公正の爲に確固たる鬪爭が出來、虐げられて來た勞働者階級の生活向上の爲のあらゆる要求を貫徹する上にも便宜である。

（二）勞働組合は勞働者社會に左の利益を與へる。

（イ）精力集中の利益

（ロ）熟練家の保護

（ハ）產業的能率增進の動機

（三）勞働組合が職工社會に與へるその他の恩典。

(イ) 病患、不慮の變に際しての準備。

(ロ) 政治的に職工の利益を增進する。

(下) 結　論

(一) 勞働組合は一般勞働者に利益を與へる。と云ふのは——

(イ) 給料の一定の範圍を保證する。

(ロ) 不當なる長時間の勞働を防止する。

(ハ) 資本家の幾多の不正を排擊する。

(ニ) 精力集注の利益を與ふ。

(ホ) 熟練の人々を保護する。

(ヘ) 疾患、不慮の變に備へる。

(ト) 組合を母體として無產者の代辯者を政治的代表者たらしむるに便。

(二) 勞働組合は一個の勢力である。と云ふのは——

(イ) 今日何れの文明國にも勞働組合が存在してゐる。

(ロ) 國際勞働團體と共同して事業をすることが出來る。

これは或學生の演說草案の假想論材でまことに幼稚であるが、是れを形式的參考にして自由に排列するがよい。しかしこれとても直ちに演說の草稿そのものではない。單なる骨組みであつて、要點を示したに過ぎない。これに充分な材料や正確な統計の數字や實例を加へて花もあり實もある堂々たる資料としなければならない。これから改めて文章に作つて其の要點〳〵に目につき易いやうに記しをつけて置いてもよい。又其の時の會場の氣分や時間の都合で十分に壇上で附加して演述してもよい。尾崎先生や島田氏の如き演說そのまゝが立派な文章だつた。

かうして全部を文章に書きあげて演壇で朗讀する人がある　故桂公の演說はそれであつた。しかし朗讀演說には活氣がなくて、聽衆の興味を喚發しない。演說が出來ない人は止むを得ずして試みるには善い方法であるかも知れないが、決して巧妙な雄辯法ではない。又その全部が朗讀の形とはなつてゐないとしても、座右に自己の草稿を備へて、それを見ては一句づつ云つてゐる人があるがこれ亦滑稽の至りで徒らに聽衆を笑はせるに過ぎない。

草稿を調製したならば、それを熟讀して殆ど諳誦する位にまで記憶しなければならない。我國の現代の雄辯家永井柳太郞氏の如き實に此の草稿に苦心される一人だ。かくて記憶した順序に實例と譬喩をそのまゝ用ひて演說すべきである。さうすれば滔々數千言を發しても思想の源泉が涸渇するといふことはない。自由自在に述べられるのである。それは畢竟準備の力であつて、準備のない演

説は、忽ちにして思想も涸渇すれば言論も振はないので、興味が自然と薄くなるのである。

若しこれを全く諳誦する時間がない時には、その草案を提携して演壇の右に置いて、これに基いて演述しなければならないが、それは一語一句悉く書き連ねたものである必要はない。大體の骨組みを記載したもので足りるのである。文章に書いたものを座右に於いてこれを讀みつつ演説することは實に不體裁なもので、それよりも寧ろ男らしく堂々と朗讀した方が立派である。

それにしても草稿を用意するのは長い演説の場合に限るもので、極めて簡單なテーブル・スピーチのやうなものはこれを即席に演述すべき當意即妙の機智と頓才とを養はなければならない。三分か五分の挨拶にさへも辭に窮すると云ふのは、思慮の鈍い機轉の利かない人と云はなければならない。草稿は雄辯家に必要なものではあるが、簡單な一場の挨拶さへも即座に述べることが出來ないものは、草稿があるとしても長演説に成功するものではない。と云ふのは如何に一語一句草稿に書いてあるとしても、會場の氣分や聽衆の智識の程度でその草案に手加減をして述べなければならないからである。

要するに極めて簡單な即席演説をするやうな場合には草稿なしで述べることも結構なことであるが、念の入つた秩序の立つたものを述べるには一應の準備として草稿を作り、それに基いて雄辯を揮ふのが古今東西の習慣となつてゐる、又さうすることが一般聽衆に對する雄辯家の德義であると同時に自分が云はうとすることを寸毫も苟もせずとの實を示すものとなつて稱揚すべきである。これに反して口から出まかせに喋々と述べることは無責任に一時の責を塞ぐに過ぎぬもので、決して貴ぶべきことではない。演壇に立つまでに熟讀諳誦した草稿を更らに壇上に持つて登るといふことは、これを時々瞥見して順序を取違へぬ參考に過ぎないのである。

三、演壇に立つまで

自分の意見を完全に發表する爲めに、充分に草稿を朗讀諳誦したとしても、演壇に立つ前には何人でも何となく不安を感じるのである。何事をするにも自任自信が大切である。これが人間活動の源泉である。人間といふ微妙な精神生活をしてゐる奇怪な生物を動かすものはこの力に外ならない一度志を決してその路に發足すると、それが動作に現れ、言語になつて示される。それにしてもその場合自信力がないと、口頭では大言壯語を吐いても、その言行が一致しないので多數の人の前に現れても何等の活氣もない。その言語は何となく無氣力で消沈してゐる。その演説そのものに活氣がない、流れゆく感情に得も云へぬ快感がなかつたならば、どうして聽衆を感動することが出來や

うか。だから演說家は一定不動の自信力所謂信念を以て、聽衆が冷評しやうが、惡口を云はうが、決然として自ら信ずる赤誠を披瀝しなければならない。殊更らに雄辯家らしい技巧を弄すべきではない。

技巧を加へると、ともすると自然の妙趣を失つて全氣靈動するものが缺けるやうになる。從つて人を感動せしむる力を喪失する。しかし、自分が信じてゐるものを有りの儘に語り出せば、其處に天眞爛熳の狀態が流露して、その語々句々は人々の肺肝を動かすのである。それは別段に修辭學や論理學を學ばない人でも、自然に修辭に協ひ、論理學と一致した堂々たる言辭となる。基督の說教釋迦の說教の如き、孔子孟子の道話の如きこれと云つて別段雄辯學や、修辭學や、論理學や心理學に腐心したものではないのに千古にその名を留めるやうな大雄辯である。これは前にも云つたやうに、是を是とし、非を非として思ひのまゝ天眞爛漫にその所信を述べたからである。彼等のその言葉は自然に法則に協つて雄辯の美觀を呈したのである。それ故、胸中には溢るゝばかりの自信力を持つてゐて、それを何等の僞りもなく、欺きもなく天眞爛漫に發表してゐれば、演說學を學ばないでも自然に雄辯家となり得べきものである。

自信力を抱いて語る時には、自己の熱誠が油然として湧出するのを禁ずることは出來ない。洋服

のボタンが外れたとか、ハンカチが卓上に落ちたとか云ふやうな區々たることを氣にするやうでは未だ其の演說に油が載つて來ない。かう云つたからと云つて、粗放の行爲や態度を以て聽衆に臨んでもいいものであると誤解されては困るが、實際自分が述べようとしてゐる辯論に熱誠を濺いで、奮鬪的猛進的態度を取つて起つた時には、そのやうな外形的些事に心を注ぐことは出來なくなる。尤もこと更らにかくするのではないが、我を忘れて知らず／＼の間に玆に到るのである故に自任自信の力の前には殆ど敵するものがない。訥辯家であつても、かう云ふ場合になると立派な演說をするやうなことがある。雄辯の原動力は一面熱誠と自信力とであると斷定しても敢て過言ではない。

この自信力は反對攻擊を恐れない。そして泰然として壇上に現れて、その熱烈な辯說を揮ふ。又一方鞏固な信念の力は、演壇に起つた雄辯家に於いて殊にこれを見るものである。彼等の信念の深切嚴肅なことは殆どその本能的である。彼等は神來の感應に確信して、直ちにこれを民衆に訴へようとするのである。彼等の信念には生氣が燃えてゐる。これが壇上の雄辯の生命でなくして何であらうか。如何に才能が傑出してゐても、如何に學殖が深遠であつても、又如何に智慮が萬人に傑出してゐても、この信念を缺いたなればその辯論は拙劣にして虛飾の色を帶びて殆ど聞くに堪へない。況してそれに雄辯といふ名稱を與へることは到底出來ないのである。繰り返して云ふが何人でも壇

上に起つ以上は自己の定見がなければならない。英國の雄辯家**チヤタム**卿の演説には「予はかく確信す……」とか「予はこの主義を執て動かず……」と云ふやうな論法で一貫してゐるのは注目しなければならない事實である。これは云ふまでもなく卿が一世の大政治家として抱負もあり自信もあつたので、定見の動かすべからざるものを持つてゐたからである。これが卿をして萬人に傑出した堂々として威儀を帶びた雄辯家たらしめたのである。

モンダク夫人は嘗て云つた。——

「議場に於ける最も必要な性質は、第一に鐵面皮である。第二に鐵面皮である。第三にも鐵面皮である。柔和の人にして未だ嘗て好運を開いたためしはない。**ハリフアックス**卿や、**ワルポール**氏の如き總て昇進の早かつた人々は皆鐵面皮である。柔和な人は常に衆人の背後に附隨するに過ぎない。」と。

これは極めて大膽な言葉であるが、この言葉を誤解しないやうにしなければならない。鐵面皮と云つても、事理を沒却して自我に固執するものを云ふのではなくして、一定不動の主義主張の下に俯仰天地に愧ぢない心事に基いて決して人を恐れないといふ決心から起つて來るものである。禮節を沒し、事理を無視して自我のみに左右せられて進むものと同一視すべきではない。それ故に强固の意志と見るべきもので、世俗の所謂「鐵面皮」と同一視すべきでないことは云ふまでもない。

壇上に表はれて、演説をする時には一定の覺悟が必要である。その演説の成功不成功はこの覺悟如何によつても決定される。既に覺悟である限りこれを外に求めるものではなくして、內に求めるべきである。卽ち聽衆に向つて要求するものではなくして、自分自らに求むる所を云ふのである多くの壇上の人を見るに、どうすれば不贊成の聲を免れ、どうすれば喝采を博するかに腐心してゐる。自分の意見を述べるのではなくて聽衆のためにしやべつてゐるのである。

これを芝居に譬へてみると、俳優が舞臺に登つて見物の顏ばかり注意して、一顰一笑を迎へようとしてゐるのに等しい。かうしてゐるうちに、肝心の藝道の方が御留守になつて、多くの場合は失敗に終る。芝居に例へた序に更らに一例をあげてみると、何代目かの市川團十郎であつたか能く覺えてゐないが、忠臣藏の芝居をするのに、師匠が高師直に扮し、その高弟が鹽谷判官になつて殿中松の間の廊下刄傷の幕を演じた、幾囘舞臺に登つても師匠が賞讃の辭を與へない。見物も亦鹽谷判官に扮した弟子に向つて一度も喝采しない。その高弟は非常に苦心して種々の點に就いて師匠の團十郎に問ふたが、一向に敎へてくれない。只一國の大名たるものが衆人稠座の間に於いて、輕蔑された場合にどんな心持になるか、その時堪えきれないで斬り付ける心持になればよい。貴様がそれが出來ないやうではおれの後は嗣げないぞ、と云つただけであつた。高弟は師匠のその不親切を憤

つた。そして彼は、師匠は何事も教へてくれないし、その役を相談することは無論望みがないと思つた。かくの如き不親切な師匠を師として仰ぐに足らない。この身が團十郎の名を繼ぐことが出來なければ、自分は藝人社會に生命を絕たれたのも同樣である。即ち藝人としての死である。このまま死ぬよりも舞臺の上に於いて師匠を一刀の下に斬つて自分も割腹して死なうと決心した。そこで次の日のその幕になると、師匠は高師直として現れ、自分は判官として刄傷の一幕を演ずべく表れた。その日の弟子の心中では最早芝居ではない。事實に於いて師直に扮してゐる師匠を刺刄して、自分もその場で潔く切腹するつもりである。もうかうなれば眼中に舞臺もなければ觀客もない。目指すところは高師直の師匠一人である。判官が師直に切りつける刹那を利用して刄を加へてこれを殺さうと考へたのである。そこで師直が「鮒だ、鮒だ、鮒武士だ！」といふ罵倒詞に續いて、判官が腰間の秋水拔手も見せず振り翳したその瞬間に於いて、師直の師匠は聲を潜めて「うまい、この呼吸を忘れるな」といふ一語を發した。開場以來幾日といふ間失敗に了つた判官が、この時に當つて始めて師の賞讃を得、場中の喝采暫らくは止まない程であつた。かくて演劇は遂に演劇に終つて刄傷の事實とはならなかつた。

その後その弟子が師匠の前に膝を折つて、その告白をした。師の云ふには如何にも今日の判官は上出來であつた。殆ど判官その人が現はれたやうに感じたが、これは判官が當時の腹と、汝が今日の腹とが合して一枚になつたからである。これまでの汝の判官はまづくはないが、俳優が判官をつとめてゐると云ふ心が離れない。即ち判官と俳優と腹が二枚になつてゐる。其處でどうしたら見物が喝采して、師匠にほめられるかと云ふことのみに心を注いだ。その爲めに振りあぐる太刀の先きに隙が出來る。だから氣乘りがしない。今日は憎しと思ふ一點に一命を投げ捨つるといふ大目的だつたので、舞臺も見物も眼中になかつた。俳優即ち判官となつた爲めに技が眞に迫るといふよりも眞が自然に技を發露した。これまで自分が不親切にしたのは、汝の技を引出すといふよりも、眞を引出す爲めに試みた一つの方法であつた。と云ふことを申聞かされて、その高弟たるものが、今更らながら名人の人を指導する手段の一樣でないことに感じたといふことである。

この話を移して以て雄辯家が演壇に立つ時の心得とすべきである。壇上の人が聽衆やその會場の模樣にのみ心を奪はれて、其處に彼の精神の大部分を分つときには、その演說は自然に氣乘りのしないものとなる。要するに眞を缺いた演說になるのである。このやうな演說を演說つかひとも云ふべきもので、演說者と演說とが揮然として一なるものに融合してゐない。丁度俳優と判官が二つになつてゐると同樣なことで、そんなことでは雄辯家なる千兩役者になれない。

熱誠を濺いで自信力を傾注して演述すれば、恐れることもなれば遠慮することもない。滔々として所信を述べられる。苟くも心事一度決すれば、匹夫も奪ふべからざる氣慨を備へるものであるから、充分に雄辯を振つて聽衆を動かすことが出來る。强て雄辯の秘訣を問ふ人があれば、先づ斯かる心掛が秘訣であると云はなければならない。

　演壇に立つ前に不安が念頭に浮ぶやうでは未だ自信力が足りないのである。精神修養が足りないのである。自己の内部から燃え上つて來る熱誠が未だ足らないのである。民衆と共に正義を語り、正義を守つて正義の爲めに戰はうとする覺悟が足りないのである。熱誠が溢れて民衆に向つてその眞實を叫ぶものが、どうして恐れる必要があらうか。不安を感ずる必要があらうか。敢然として雄辯の正義の旗を押し立てて進むべきではないか。正義人道を主張するのに、誰に憚る必要があらうか。堂々と壇上に現れて、眞情が溢れ、赤誠が流れてゐる劍よりも强い辯を揮ふべきではないか。登壇する前に不安を感ずるのは畢竟するに自信念が無いからだ、よく自分を戒めて、正義の爲めに戰ふ强い決心を呼び起さなければならない。

四、聽衆の種類と會場の氣分を判別せよ

　充分な自信力を以て壇上に立つたならば、聽衆の種類に應じてその辯論に手加減を加へることを忘れてはならない。智識や學問の高い人も、無教育の人も同樣に見做して、千篇一律の演說をすることは、極めて拙劣な方法である。

　ある法學博士が先年選擧運動の應援として地方に出張して雄辯を揮つたことがあつた。地方の人人は今日東京から高名な學者が出かけて演說せられるから、定めし面白い立派な演說であらうと思つて樂しみにして待つてゐた。約束の時間に果してその博士が現れて滔々として長廣舌を揮つた。しかし博士は英語やら佛蘭西語やら、獨逸語やら、漢語やらを多く交へて語つたので、大部分の聽衆には少しも分らなかつた。彼等は失望して歸つた。學殖がある人から見れば、その所說は定めし堂堂たる經國の抱負を述べたもので、實に雄大なものであつたかも知れない。そしてその辯說も流暢であつたから、大喝采を博すべき性質のものであつたらうが、何にしても相手は無學な百姓であつたので、その雄辯は理解されなかつた。從つて何等の效も奏しなかつたのである。

　これと反對に今一人の青年演說家は深い素養もなかつたが、農家の智識程度を能く理解してゐたので、極めて通俗にして卑近の例を擧げて面白く說き立てた。それで智識の足らない農民にもその主張が十分に徹底したので、大いに聽衆を滿足せしめた。

博士は聽衆の智識程度を考慮しないで、自分の高等教育に標準を置いて演說した。その結果「あの辯士は見懸けに因らないほど下手だ。」とか「少しも面白くない話だ。」と云ふやうな印象を與へた後者は明らかに學問と云ひ教育と云ひ前の演說家に劣つてゐたが、農民に演說するに適するだけの智識と辯才とを持つてゐたので、その力量に應じて演述した。かくて聽衆の喝采を博した。前者はたしかに雄辯の才と學問とを有してゐるが、殘念ながら聽衆の力を計ることをしなかつたので見事に田舍辯士の青年に敗北した。これから考へても、聽衆の智識程度を計つて演說することがどんなに大事だかと云ふことが判るのである。

演說は先づ聽衆に適切であるか、時期に適中してゐるか、演題が不當ではないか、等をよく熟考して述べなければならない。雄辯家としてこれ丈けの用意がないと、折角苦心を凝した名論も水泡に歸することになる。

これは俗に「人を見て法を說け」といふもので、相手によつて同じ眞理を說くとしてもその手法を變へなければならない。政黨の遊說とか選擧應援などで地方へ巡回演說に出かけるものが、甲地で云つたことを乙地でも丙地でも千篇一律に述べるといふことは餘り優れた雄辯家の手法ではない少し苦心を凝したなれば、何とかその土地に適するやうに變化させることが出來るものであるからかう云ふ點は充分に注意しなければならない。

演說家のうちには、田舍者には高尚な問題を捉へて話しても理解しないから駄目だと云つて、始めから見込みをつけて濟ましてゐるものがある。かう云ふ演說家は雄辯家としての見識が不足してゐるものではないであらうか。勿論地方人に高尚な論說を述べても馬耳東風に聞き流される事も尠くなからうが、さうさせるのはその演說家の力が足りないからである。難解な理論でもこれを平易に說いて、老翁老婆でも成程さうかと深く心服させないのは、彼の技倆が末だ足りないのである。

思ふに世の中には難解の問題は少くないが、何と云つても哲學上の問題ほど難解なものはない。それにしてもこれを唱道した元祖の人々はどうであつたか。釋迦にしても、孔子にしても、基督にしても極めて平易な言葉と通俗易解の譬喩を以てこれを述べたではないか。彼の孟子の引證の如きはわけても通俗的であつて、しかも豐富なものではないだらうか。又聖書の譬喩は何と云ふ巧妙さで、興味の深いことであらう。それなればこそ、忽ちにして多くの信仰を得るやうにもなれば、かくまで多數の信徒を得るやうにもなつたのである。

人生の大問題や、末來の問題を取扱ふべき宗教ですらも、かくまで通俗に平易に說明が出來るとすれば、政治や經濟に關する問題を平易な言葉で通俗的に說明することは何でもないことであらう

これが出來ないといふのは、蓋しその人の雄辯家としての修養が足りないからである。

どんなに高尙な思想問題であつても、これを通俗的に說明すれば誰にでも判る。苦い藥は一寸呑み難いがオブラートに包んで呑めば、苦もなく飲下せらるると同樣である。智識の乏しい人を相手に演說する時には、高尙なことを云つて相手を煙に捲くやうなことをしてはよくない。成るべく丁寧親切に、且つ平易明晰の言葉で述べなければならない。

深遠な學殖のある人でも、これを無學の聽衆に誇示しようと思つたなれば、それは明らかに間違つた考へである。高尙な學理を平易に說明して、聽衆によく理解せしむることが、その人の眞の技倆であると共に雄辯の威力である。この點から云つて新渡戸博士の如きは立派な技倆を持つてゐる高等敎育がある人に對しては、學者として立派な學殖を表示して演說をするので、常に大なる喝采を博するが、しかもそれが誇學的ではなくして、熱誠に基いて演ずるから敬服の外はない。これと同じやうに小學校の生徒や、老人たちや、婦人の集合に於いても、それ〴〵に應ずる面白い話をする。これは實に得難い技倆と云はなければならない。博士は學者としては珍らしいと思はれる程に常識の發達した人である。從つて聽衆の性質や階級に應じて巧みに演說の手加減をすることを知つてゐる。だから如何なる階級の人に對しても滿足を與へ得るのである。この點から云へば、如何に學者であるとしても一般に理解されるやうな演述が出來ないと云ふ筈はない。

深い智識を持つてゐる人々に對する場合、卽ち議會とか、その他智識階級のものに對する演說は又非常にむづかしいものであるかと云へば決してさうではない。却てその方が演述し易い。と云ふのは相手は相當な敎育があり智識がある人々であるから、殊に卑近な引例をとるとか、嚙み碎いて說明するといふやうな勞が不必要だからである。論理學でも、心理學でも經濟學でも、政治學でも、遠慮會釋なくこれを應用して堂々と云ひ放つのであるから、その方が手數も掛らなくて、何等の苦心もない。

勿論、聽衆の程度に應じて演述すると云つても、一々試驗して入場させたのではないから、先づ大體から觀察するだけであつて、常識に基いて判斷するに過ぎない。かうして大體の觀察を下して大抵これ位ならどれ位の話をしても理解する可能があると云ふ目算を立てて述べるべきである。

世の靑年雄辯家には、一般の靑年や農夫を集めて演說する場合に「聽衆の種子が惡いから、演說する張合ひがない。いくら旨いことを云つても、こんな聞き手ではどうにも致し方がない。」と云ふやうな不平を唱ふるものがある。如何にも敎育ある聽衆と、無敎育な聽衆とは、その性質が違つてゐるから、智識あり敎育ある人々に對する演說とはその調子が違ひ、呼吸が異るのは明白なことで

ある。しかし相手が教育がないとか、智識が足りないとか云つて、演說が出來ないと云ふのは演說の本質を解しない人の云ふことである。如何なる階級の人々であらうとも、苟くも狂人白痴の群でない限りは、理解し易い明白な言葉を流暢の辯舌で說明して感動を與へ得べきものである。

農民は教育程度は低いかも知らないが、理解は小學生徒よりも多い。小學生徒や幼稚園の生徒でも、噛んで含るやうに說明すれば、十分に彼等を感動せしむることが出來る。それよりも遙かに理解が發達して、しかも智識も一層進んでゐる農青年に向つて演說をして彼等の心に强い印象を與へることが出來ないと云ふのは、所謂人を見て法を說くの變通の才がない見苦しい見識と云はねばならない。

教室内では、法律や經濟の講義をして學生に對して雄辯を揮ふことは出來るが、一般の人に對する演說は調子が狂つてゐて戸迷ひすると云ふのは、ありに苦しい辯解である。この辯解は常識の缺陷を告白するもので、又一方には頓才の乏しいことを意味する眞に憐れむべき言葉である。

經濟學で有名な某大學の教授である法學博士は、自分が公衆に向つて演說する前に、自宅の書生や下女までも集めて豫備演說をやつて見る、それで、それ等の聽衆が「先生よく分りました。」と云つて感服すると、それで滿足して、翌日公衆に對してその通り演說する。さうすると果して大喝采を博するさうである。教育の足らないものでも決して度外視してはいけない。單に難解な理論を並べ立てれば、聽衆は滿足すると思ふのは大なる誤解である。

かうして聽衆の種類と會場の氣分を判別して、時に應じ、機にのぞんで、變通自在に、自己の持論を述べなければならない。勿論かうした頓才が處女演說の時から、自由自在に活動するものではないか、それ故に如何なる雄辯家も、苦心の結果一家をなしたものである。自己の所信を述べるのに誰に恐れることがあらうか。進んで民衆に叫びかけるべきである。訴ふべきである。而して光り輝く理想の國に向つて、その歩を進ませるべきである。雄辯家なるものは民衆を理解しなければならない。會場の氣分と聽衆の種類とを理解しなければならない。而して共に語るべきではないか。

五、雄辯熟達の方法

完全な準備をして壇上に立つたとしても、處女演說から完全な成功を得るものではない。さて、どうしたならば雄辯家になり得るであらうか。又どうしたなら演說が熱するであらうか。何人でも處女演說の後、かう云ふことを考へるであらう。

若し强ひて再び雄辯熟達の秘訣とは如何なるものであるかと問はれたなら、私は別に三つあると

答へたいこの三つとは何であるとか云ふに、多く知り、多く思ひ、多く演ずることである。平凡であつて何の奇もない說ではあるが、實際これ以上の秘訣はない。多く知るとは、智識が充實して言ふべき材料が豊富なことである、多く思ふといふことは、如何にすれば聽衆に多大の感動を與へて、自分の思想を完全に傳へることが出來るかを考察することで、演壇に立つ前に是非とも考へなければならないことである。

多くを演ずるといふことは、屢々演說をして練習を重ねる事である。かうすれば演說も自然に熟達する。この說も亦雄辯熟達の秘訣であることを忘れてはならない。雄辯家の資質が備つてゐる人でも、屢々練習してその缺點を矯し、その美點長所を發揮するやうに努めなければ、到底堂々たる大雄辯を揮ふことは出來ない。

千古の大雄辯家**デモステネス**にしても、一朝にして大雄辯家になつたのではない。苦心して研究を續け、練習の結果によつてなつたのである。又**チヤタム**卿の如きも幼少の頃から父の指導を受けて雄辯の研鑽を積んだと云はれてゐる、**ウエブスター**でも、**ヘンリー**でも、**クレー**でも皆同樣の次第で漸次に熟達したもので、決して一朝一夕にしてこのやうな高名の大雄辯家になつたのではない。

萬卷の修辭學や雄辯法の書を讀破しても、單に讀み終つたといふだけでは、到底雄辯家とはなれない。雄辯術は兵法と等しく實際に活用すべき生きた學問である。單に雄辯の理論のみを知つただけでは決して雄辯が揮へるものではない。

如何に雄辯の理論に長じてゐても、演壇に度々立たなければ、その呼吸が判らない。それ故初めて演壇に立つて意見を述べる場合になると、大いにまごつく。精神が沈着な人でまごつかないとしても、その演說が變に固くなつたりして、生々したところがない。從つて興味がない。かうなつては單に名ばかりの演說で、人を感動せしむる力が缺けてゐる。

意志がどんなに强健な人であつても、初めて壇上に立つと、一寸面喰ふものである。しかし幾度か演壇に立つた經驗のあるものは、何千人の聽衆がゐやうが平氣のものである。初めて壇上に現れた人は、どうしても少し狼狽氣味で、顏色が眞蒼になつて、言語も不得要領である。靜座法や禪學で度量を養つて、これを活用することも結構なことであるが、それでも練習なしで初めて群集を相手に演說をすると呼吸が判らないので、巧妙適切の雄辯は揮へない。

稽古をしないで、事に上達しようとするのは無理である。天才と云はれる畫家でも、詩人でも勉强して始めてその堂に入つたのである。しかも雄辯術といふものは、總ての藝術の中で最も成功に

困難なものである、十分に研究と練礎を積まなければ、決して達成するものではない。

往時希臘が盛んであつた時には雄辯術が高尚な學科として重んぜられた。又羅馬に於いても、高等教育科程の中に雄辯術を加へた。苟くも高等教育を受けたものは、誰一人として演説の出來ないものはないやうにした。この事實に徴しても、どんなにその研究が盛んであつたかを察するに足るのである。今日の日本は立憲政治を布いて、普通選擧を實施して、覇を列國に爭ふ時代となつた。從つて我國の民衆の性行は直ちに外國の批評を蒙るといふ前古無比の時代が來たのである。斯かる時代に於ける青年たるものは、他人の要求を受けるまでもなく、必要を認める時には、進んで自己の意見を公衆に向つて滔々と述べ立つべき確乎不拔の精神がなくてはならない。

自己の信念の下に赤誠を以て述べ立つる上には、誰を憚り、誰を恐れる必要もない。文明の進歩文化の發達、人類の進化なるものは、智識のある人も、智識が不足してゐる者も互に一堂に會して、遠慮なく所見を吐露し、その上で自分が悟つたなればこれを正し、他人が誤つてゐるのを駁撃して互に研究を忘れてはならない。而してこれは辯論の術を養成すると同時に、思想を鍛錬すること、もなつて、この上もない有益である。斯くて民衆は更に進むべき路を發見する、斯くして時代がそれに從ふ。さうして各自の雄辯が益々發達して健全な社會を建設する。自分の惱みを解決し。人文の進歩を見るやうになる、だから私は雄辯の眞の時代が來たと云ふのである。しかし自分は自分、他人は他人といふやうに互に孤立してゐれば、思想の研究は不可能になり、雄辯は不必要になつて、人智の進歩と文化の發達と民衆の伸長とに何等の貢獻するところがなくなる。かうなることは有爲の青年にとつて餘りに無思慮ではないか。

先づ場に慣れると云ふこと、大膽で公衆に向つて何等憚ることなく自己の所見を述べると云ふこと、この二ケ條さへ備へてゐれば、誰にでも相當に演説が出來るやうになる。尤も始めから巧妙にやらうとか、笑はれぬやうにしようとかのみを案ずるのは、自己の自由な思想の湧出を妨ぐるもので、好ましからぬものである。自分として相當に演述すべき思想があれば、既に一個の雄辯家たるべき資格を備へてゐるのであるから、宜しく堂々と所見を吐露すべきである、先のことのみを氣にして、戰々恐々としてゐるやうでは、到底豪放自在の言論を弄することは出來ない。嗤ふものには嗤はせておけばいゝのである。そんなことに頓着しないで、自分が最良最善と認める所説を進んで述べるべきである。かうして動かすことの出來ない自信力を以て演説をしなければならない。これ以上に雄辯を練る道は何處にもないのである。

序ながらもう一つ上達の秘訣を話して置かう。それは先輩有力家の演説を傾聽することである。

或人は日本には模範となるやうな雄辯家はゐないなんて云ふが眞に其の人物が偉大で然もすばらしい雄辯家であるといふやうな人は、極めて尠い。然し自分よりも先輩である演說家を求むれば、恐らく數限りもない程である。苟くも一日の長たる人の演說ならば、それが模範的でないとしても、何等か敎訓となり參考となるべきものがあるに違ひない。それだけでも既に少なからぬ利益ではないか。例へ日本には模範的大雄辯家はないにしても、當代名流の演說は、我々にとつて多大の參考になることは確かである。

それ故に出來る限り名流の演說會に出席して傍聽者となるべきである。さうしてその巧拙を目擊して、自分の會得してゐる雄辯要領と相違してゐれば、それを記憶して參考に供すべきである。どんな人でも初めから一擧して最高級の技倆を備へることは出來ない。それまでには何度か練習に練習を重ね、苦心に苦心を加へて始めて此處に人に聽かせ得る程度に達したのである。自分よりも一段進んだ演說家には學ぶべき點が頗る多い。又彼に缺點があるとしても、自分は彼を見て避けるやうにすれば、敗を轉じて利と化すの術で、如何にも智慮ある人の取るべきことである。

書籍の上で抽象的に演說の巧拙を論じても十分徹底するものではない。しかし百聞は一見に如かずで、演說家の爲すところを實際に見れば、「あゝ、成程さうか？」首肯せらるゝ場合が多い。

それにしても研究の爲めに傍聽するには幾多の條件が必要である。單なる他の傍聽人と同一に受身的に聽いてゐるだけでは研究にはならない。少しく智腦の作用をして十分に働らかせなければならない。それならば、どんなことに注意しなければならないかと云ふに――

（一）演說の構想は如何なるものであるか。

（二）思想の順序排列は如何

（三）言語は明晰か。

（四）音聲は淸朗であるか、晦澁であるか。

（五）態度の巧拙は如何であるか。

（六）演說の感動力は如何であるか。

（七）その演說の興味の大小は何如であつたか。

（八）論旨が徹底したか。

勿論この外に各自に觀察して自問自答するのは惡いことではない。さうすべきである。しかし以上の要點は是非とも觀察しなければならない。

眞の雄辯家となる方法としては、單に机上の空論を連らねた書籍を勉强しただけでは足りない。

何處までも實地の應用が伴ふべきである。これは全く兵法と等しい。書籍やその他のものによつて急所要點と認むべきものを研究すると同時に、壇上に立つて實際に雄辯を揮つてみなければならない。又名流の演說會がある時には、進んで自ら傍聽して、名士先輩の實例に倣はなければならない廣い見聞を伴ふ知識の涵養と理論の研究と、實地の經驗を積むこと〻、更に進んで先輩の演說會に出席すること〻等の要件を除外して、他に雄辯熟達の名案はない。かうして習練を積めば、遂には大雄辯家になることも敢て不可能ではない。

六、其の他

▼**演題の付け方**――演題の付け方はあまり長たらしいのより簡潔で要領を得た然も未だ聽かない前から聽衆の心を惹きつけるやうなのがい〻と思ふ。

時に依つては都合により先方で勝手に演題を廣告したり、氣をきかしてたゞ『挨拶』とか『所感』とか發表してゐる場合も有る。從つて、――此處に私の演題として自學自修の精神と掲げられてありますが、是は主催者の方がお定めになられた演題でありますから、是から私が致します――お話しの內容が或ひは此の演題とは多少異るかもしれませんが――大體は此の自學自修の精神に就いてお話ししようと思ふのであります――

と云つたやうな事になる場合もあり、時に依つては演題など全然發表してない事もある。然しさうした時には又『此處には、別に演題が掲げてありませんが、若し演題はどう書いて置くか？と聞かれたときは私は『彼の手を見よ』と答へる考へでをりました。T氏の手は普通の人より指が少しく短いのであります――さうして、それは二十歲過ぎるまで田や畑に鍬を打ち振り鎌を握つたしるしであります、此の手の所有者であるT氏にして始めて農村振興の爲の各種の懸案が解決せられるでは無いかと思はれるのであります。』

と云ふやうに話してゆく事も出來る。演題ばかり堂々として內容が頗る貧弱なのもみつともないが、演題の付け方によつて聽衆をひきつけ、演說を引きたゝせることをも忘れてはならない。

▼**緒論の切り出し方**――是は會場の空氣に依つて一樣には云へないが、何か此の演說は面白さうだ――此の演說はしつかりしてゐるらしいぞ――此の辯士はすばらしい演說をしさうだぞ――と云つたやうな氣持ちを聽衆に持たせることが非常に大切であるが、それには最初の切り出し方が大切だ。『石川啄木の歌に――働けど働けどなほわが生活樂にならざりぢつと手を見る――と云ふ歌がありますが、是現代の社會制度の不合理を――』と云つたふうに始めたり『選擧期日が切迫するにつ

れまして、今や全國に於いては』と云つたふうに口を切り出す人もあらう。最初に自己紹介のやうな挨拶をする人もあるが、とにかく前提のあまり長いのはどつちにしろ面白くない。またとてつもない奇妙な聲を發して『ショックン！』なんてやらかして聽衆を噴飯せしめてしまつても收まりがつかない。さうかと云つて餘り勿體振つて水を飲んだりヒゲをひねつたり、眼鏡を拭いたり、一寸頭を撫でたりおもむろに『えー』なんて始めるのも氣障で不可ない。人によつてはいきなり結論を先に云ひ出す人もあり、本論には全然關係の無いやうなことをしやべり出して段々話しの本筋へ運んでゆく人も有るが、何れにしろ其の切り出し方は餘程聽衆との呼吸を合せて大體に於いて壯重に切り出した方がよい。一寸、此の點角力の立會の呼吸に似て頗るむづかしいが、聽衆のまだザワ〳〵してゐるうちにベラベラ始め出したり、聽衆が片唾を飲んで聽き耳をたてゝ乘氣になつて來てゐるのに切り出しが遲れてたぢたぢになつたりするやうではどうしても其の演說は成功しない。演壇で話してゐても時々此の聽衆と自分の呼吸が一致しないで焦つて愈々チグハグな氣持ちになつて脫線したりする事も度々ある。

▼本論の運び方と結論の納め方——本論を定められた時間内に聽衆に飽きさせないやうに聽かせてしまふ事は一寸初心者にはむづかしい。各自の許された短時間内に話してしまはねばならない青年學生雄辯大會などで、野次に拘泥したり、序論を長々とやつたりしてゐる爲、是から本論へ入らうとする時に定刻が來てしまつて全く要領を得ないことばかりを叫んで降壇するやうな辯士もある。時間に制限が無くとも聽衆の空氣を看取して飽きさせぬやうに然かも十分に自分の所論を盡すやう平常から練習する必要が有らう。冒頭に一寸聽衆の想像もしなかつたやうな話を持ち出して好奇心を湧かせるのも時と場合に依つての一方法である。結論の納め方は又非常に大切で、此の納め方一つではかに聽衆を緊張させて演說の印象を强めることも出來れば折角の名演說を尻切れ蜻蛉のやうなだらしの無いものにして了ふ恐れも有る。『諸君——降壇するに當つて更に繰返して叫びたい——堪えよ！忍べー克て！鬪へ！』と云つたふうに云ひ放して降壇するなども氣のきいた一方法である。

▼演壇と辯士の位置——辯士はなるべく壇の中央か傍に立つてゐるのがよいが、何れにしろ、聽衆の前列と遠く離れてゐるのは話しにくゝもあるし、聽く方も聽きにくい。壇上に於けるゼスチユアに就いては前述してあるとほりであるが、人に依ると動物園の熊のやうに手を腰へ當てたまゝ演壇を左へ歩いてゐつたと思ふと又ヒョツクリ向きなほつて今度は右へ向つて歩き出しながら演說すると云つたやうな人も有るが是もあまりに不自然で感心しない。

▼水、登壇、降壇、挨拶、原稿の扱ひ方——それから登壇の仕方なども非常に態とらしく威張つて出てくる人や無暗に氣どつてつんと澄まして出てくる人も有るが、餘り傲慢なのや氣障なのは聽衆に好感を持たれない——さうかと云つてチヨコ〳〵出て來てヘラ〳〵笑つたり、羞しさうにお辭儀をしたりするやうな卑屈なのや不活潑なのも困る。畢竟するに素直な堂堂たる進退をとる必要が有らう。

それから壇上に置かれた水であるが、これも、餘りわざとらしいのは不可ない。中には特に反り返つて此のコップを片手にしてヂロ〳〵聽衆を横目に睥睨したり、さうかと思ふと其の水を如何にも苦々しさうに呑んだり、又、其の反對に如何にもうまさうに何杯も立續けに呑んだりする者も有るが是なども適度にやる必要が有る。筆者などは三時間ぐらゐ話しても嘗て水を飲んだ經驗は無いが何も水は何も姿態を整へたり、てれ隱しの爲に飲むために置かれてゐる譯では無い。あんまり水ばかり飲んで演說會の翌日下痢したりする者が有るから注意する次第である。

それから草稿を壇上で弄んだりポケットへ入れたり出したり、窓から吹き込む風に吹き飛ばされて壇上に周章狼狽するやうな醜態を演じないやうに、心掛けねばならない。

▼彌次とその對策、 近頃の政談演說會では『演說を妨害すると犯罪になります』と云つたやうな注意書が張られてあるので、從前のやうな猛烈な彌次は無いが、まだ此の彌次の爲に演壇で立往生をするやうな演說會は非常に多からうと思ふ。此の彌次にも非常に鋭いのや輕いユーモアを含んでゐて滿場を哄笑せしむるやうなものも有るが、寧ろ辯士以上の學識や才能や體驗を持つた彌次の呼吸をねらつて瞬間相手の急所を突き拔く名彌次に懸つては如何なる辯士も立所に止めを刺されてしまふ。胸の澄くやうな彌次は多少有つた方が演說會らしくてよい。然し、下手なうるさい出駄良目な彌次に至つては話す方も聽く方も甚だ迷惑であるが、是等の彌次は輕く受け流して反對に揶揄するとか、默殺するとか、逆襲して其の會場に居られない程其の彌次を赤面させるとか、早く馴れて自由自在に會場の空氣を自分で導くやうに熟練せねばならない。たゞ初心者は眞面目になつて、下劣な妨害を目的の彌次に抗議したり、辯解を試みたり、慌てたり、憤つたりして、壇上に起つた目的を忘れてしまふやうな事が往々有るから注意せねばならない。

第四章　演說の種類

一、長　演　說

今までどうして演壇に立つて、聽衆を感動せしめる雄辯を揮ふべきかを研究したが、今度はその演說の種類に就いて述べて見たいと思ふ。演說の種類は種々雜多、千變萬化のもので、一々これを定義に當てはめることは到底出來るものではないが、出來る限りその種類を說明して、讀者の參考に供したいと思ふ。此處では先づ滔々懸河の辯を揮ふ長廣舌、即ち時間が比較的長い演說に就いて述べてみる。

（一）政壇演說——政治界の演說のうちで政壇演說が一番よく發達してゐる。その爲めに議場內の雄辯は甚だしく衰微した傾がある。それは何故かと云ふに、今日の議員を立身させて、大臣の椅子に就かしむるものは、依然として議場の雄辯であるが、彼等をして一黨の領袖たらしめるものや、その黨の盛衰にも影響あるものは議場裡の演說ではなくして却て議院外の政壇演說である。將來に於いて議場の聲望がどんなに偉大になる人でも、政壇演說で民衆に自分の所說を訴へ、民衆の後援を得て黨員の信望を得たものでなければ、議政壇上の人となることは出來ない。そこに最も銳い戰の叫び聲は揚げられ、そこに舌戰の火蓋は切られる。政壇演說の成功、即ち舌戰の勝利者でなければ、議員となることは出來ない。殊に普通選擧が實施せられてから、この舌戰は白熱化され雄辯は候補者の重大なる資格の一つとなつた。

（二）議場の演說——政壇演說と議場の演說とはその性質を異にしてゐるから、一方の成功者であり乍ら、他方の失敗者となるものも頗る多い。選擧演說の時には、立候補して、花々しく政見發表演說會で、舌端火を發して戰つたものが、いざ代議士となつて議場の人となると、その人が議場に出席して居るのかゐないのか、少しもその存在が判明しないといふやうなことが屢々ある。これは何の爲めであらうか、彼は政壇演說の勝利者ではあるが、議場の演說の勝利者ではないからである。しかし又政壇議場共に大雄辯を揮つて、それに成功した人もある。例へば英國の**ダニエル・オーコンネル**、**グラッドストーン**、**ブライト**等や、佛蘭西の**ミラボー**、**ラーマルチン**等は兩刀使ひの名手であつた。この二つのものの差異を考へてみると、先づ政壇演說の場合には演說は多くの場合に於て自黨の聽衆を相手にしてゐる。聽衆はその雄辯家の演說を聽く爲めに集まつて來たもので、その雄辯家はその場面に於ける立役者である。彼の雄辯は聽衆が鮓詰めにされた大會場の

電氣のやうな雰圍氣の間に流れたゞよつてゐる。そして彼に同情し、彼を翹望せる群衆の心理上の感染は雄辯家と聽衆を醉はしめ狂熱せしめる。

これに比べると議院の空氣は甚だしく異つてゐる。對論には法則があり、擧立進退禮に協はなければならない。聽衆が雄辯家を歡呼して迎へる政壇演說とは全くその趣が異つて、議席の議員連は時には演說に食傷してゐる。此處では演說者は感情よりも理性に訴へなければならない。續々と退席する議員の爲めに空席が多くなるのを見ては、どんなに大膽な雄辯家もその勇氣に挫かれるであらう。又滔々たる大雄辯が鮮かな答辯の分言雙語に見事に一蹴し去られる危惧もあらう。兎に角この二者は全然異つた別個の演說法であつて、別個の才能を必要とするのである。議場の演說は何處までも嚴正な素養のある雄辯でなければならない。しかし政壇演說は自由奔放のスタイルを尙ぶのである。

ヴイルバーフオースが**メルヴイル事件**に於いて、**プランケツト**が天主教徒釋放問題に關し、**マコーレー**が著作權法案に付いて大雄辯を揮ひ、その結果議場の投票を一變せしめたやうな勢力を今日の議場裡の雄辯に期待することは出來ない。今日では議場の雄辯の勢は失墜して、政壇演說に移つた。黨派の統制が進歩してその結束が鞏固となつたので、自己の黨派に反對して投票したり、或は反對黨員の雄辯に動かされて、投票を決するといふことは殆どなくなつた。かういふわけで、雄辯を以て議場裡の投票を左右することは出來なくなつた。しかし大臣の雄辯の爲めに、今迄疑惑を以て迎へられた政策が喝采せられて成功することもある。攻擊演說の爲めに當局大臣をしてその計畫を撤回せしめるが如きことはある。

日本では**尾崎咢堂氏**の攻擊演說は實に鋭いものである。馬觸るれば馬を斬り、人觸るれば人を斬るの慨がある。氏が五十議會で陸軍機密費問題で田中大將を暗に攻擊した時、政友會の連中が頻りに妨害したので「諸君がそんなに騷ぐと益々怪しまれるぞ。」と釘を打つた如きは寸鐵殺人的である。又大正二年の政變の時、議會で時の首相桂太郎公を不信任案で攻擊した時などは、舌端火が出る樣で滿場の血を沸かせた。

(三)　**選擧應援演說**　――は立候補の政見發表の演說と共に雄辯界の巨星である。選擧の言論戰は各黨相戰つて、さながら戰場である。さてこの立候補推薦の演說で、わが國雄辯界の巨人**尾崎行雄氏**はどんな雄辯を揮つたか、序ながら茨城縣下で**河野正義氏**を應援した時の演說の主眼を述べて見よう。**「河野君は腕の人だ。僕は口の人だ。河野君の腕と僕の口とを結び附ければ鬼に金棒だ。諸君。僕の腕を投票すると思つて、河野君に投票して呉れ給へ」**

實に巧妙なものではないか。普通選擧が實施されて、諸君も選擧應援演説を何度も聞いて、その演説が未だ鮮かに思ひ出されるほどであつて、この種の演説は充分に理解してゐるであらうから、説明を省くことにする。

（四）學術及び文藝講演――この種の演説も文化の發達と共に益々發展して、單に大學の講堂や都會の智識階級のみの專用物ではなくなつた。この頃では地方でも學術や文藝の講演が開かれるやうになつた。殊に青年團や處女會で主催して、どんな片田舍でも年に二年や三度は開かれるやうになつた。かうして文化が全國に行き渡ることは何と云つても有難いことである。この種の講演によつて、人格者や、學者や、諸先輩の言葉によつて、人々が漸次に自覺し、各自の生活の向上を期し、國家社會有爲の人材が增えて行くことは好ましい。

（五）説教――これを長演説のうちに屬するものであるが、昔の説教と今の説教とは可成り違つてゐなければならない。と云ふのは、現代人は何れも學の洗禮を受けてゐるからである。科學が發展しなかつた過去には迷信によつてともすると自分の宗教を宣傳しようとしたが、それでは現代人は誰一人として滿足するものはない。科學的論理的に宗教を説いて、それで若し人々魅惑することが出來なければ、其處に何等かの興味ある問題を加へて説くべきである。若し過去に於けるやうな説教を何時までも僧侶たちがしてゐるならば、遂には宗教は過去のものとならなければならない民衆を慰め、民衆の靈に云ふべからざる神靈の糧を與へるものは宗教であるが、十年一日の説教をしてゐたならば、我々青年にとつて宗教は何等用のないものになるのである。思ふに正しい宗教は宗教そのものが惡いのではないがそれを扱つてゐる人があまりに頭が古い。彼等の中には民衆が目醒めたことも何も氣附かないで、依然として深窓に眠りを續けてゐる者も多い、宗教家にとつては今は重大な使命を果すべき時代である。たゞ老翁老婆に極樂への道を迷信によつて説いたり、婦人にセンチメタルな愛を説くだけで滿足してゐてはならない。民衆に、有爲な青年に、呼びかけなければならない。眞の人生や、人間の爲すべきことや、深い愛の問題や、何の爲めに生きるかといふことや、彼等が叫ばなければならないこと、彼等が一身を投じて、研究すべきことはあまりに多い。

もつと聲高く宗教家は叫ばなければならない。若し彼等が、我々に最も親しい見解を以て眞の宗教を叫ばなかつたなれば、宗教は遠からずして滅亡するであらう。

（六）辯論會の演説――中學校や、專門學校、及び青年團等で時に辯論會を催して、互に意見を交換する習慣をつけるのは、何と云つても有爲の青年にとつて有益なことである。かう云ふ機會

がある度に、辯を練り思想を磨くことを忘れてはならない。**ピツト**が議政壇上の大雄辯家になつたのは、最初にこの種の辯論會で雄辯を修練した結果である。この辯論會は雄辯家の登龍門である。

以上は立案して、時としては草稿を作成して壇上に現れ自己の所見を滔々と述べる長演說の重なものを擧げたのである。この種の雄辯は長い——古い歷史を持つてゐて、その間興亡轉々として文化が榮えた各國に於いて燦然たる光彩を放つた來たのである。而して現今ではこの雄辯は遂に民衆のものになつて、民衆の正義、人道の爲めに、眞の雄辯を生み出す時代となつた。時々刻々にこの眞の雄辯の時代を現出してゐる。そして時代は民衆と共に叫び、民衆と共に步を續けようとしてゐる。

二、五分間演說

時代は簡單明瞭を尙び、近代のビジネスは能率をのみ求めてゐる。此處に時代の要求として生れたものが五分間演說、卽ち卽席演說である。これは倶樂部の集會や晚餐會等で會衆の親睦を計る爲めに用ひられ、又青年團等の茶話會で一場挨拶を兼ねて、所感を述べる爲めに用ひられる。

この演說は最も近代的な色彩を帶びてゐるもので、滔々懸河の辯を揮ひ、舌端火を發するやうに熱烈なものではない。これはたゞ聽衆に快感を與へ直截明瞭に所感を述べ、其の場の空氣を考へて辯ずべきものである。

卽席演說は一場の挨拶と所感とを述べれば足りるもので、何人でも心得て置かなければならないまのであるそれが出來ないと云つて斷ることは、少くとも現代の空氣を呼吸してゐる青年にとつて大きな恥である。

ある時、日本倶樂部で町田忠治氏と、井上匡四郎氏の入閣を祝して午餐會を催したことがあつた阪谷芳郎男は司會者として開會の辭を述べて、「永田町で大普請が始まり、棟梁の材を或方面で探したが思はしからぬので、我日本倶樂部員から二名採用された。しかし當倶樂部には尙我らも準備がある。」と云つた。

農相たる町田氏は答辭を述べて「——日本倶樂部は倶樂部中の第一と云ひたいが、その言葉が若し他の倶樂部に敬意を失するやうではよくない。それにしても第二と下らざるこの日本倶樂部へ、私は最も多く出入した。それに報知新聞社が近いので每二三回は來た。それで何か貢献したかと云へば、老人たるにも拘はらず下手な玉を盛に突いたことである。

漸く三十位しか撞けないのに、頻りに撞いた爲めに、從來下手で耻しいと思つてゐた會員も、勇

氣を出して撞き出した方が多くなつた。それが爲めに、玉場の收入が大に增加して、倶樂部の財政に貢献したことである。」と云つた。

この一例から考へても、卽席演說なるものは、當意卽妙の機智がなければ巧妙なものは出來ない町田氏のこの卽席演說はユーモアがあつて面白い。若し雄辯に志すもので、この當意卽妙の機智がけてゐるものがあれば、先人の言葉を參照して機智を養はなければならない、五分缺間演說は短いもので、所感と挨拶さへ述べれば足りるものであるが、此處にも眞の雄辯に等しく花もあり實もなければならない。何等かの點で人を「なる程」と感服せしめるものがなければならない。親しい仲でも矢張りあまりふざけたのはいけない。

かう云ふ點から考へてみると、長い演說よりも、五分間演說の方が、その技倆が堂に入ることはむづかしい。と云ふのは、長い演說なれば、論旨を一貫させて述べるのであるから、遂には人々を說服することも出來るが、五分間演說は整然たる理論で陣容を整へて出陣するものではないからである。卽席演說は簡單にして要を得なければならない。直截にして、しかもその意味が明晰でなければならない。短いものではあるが、人をびりつと感動せしめるものでなければならない。

當意卽妙！ これが五分間演說、卽ち卽席演說のモツトーである。而して唯一の戰術である。この點を充分に注意して演說しなければならない。この演說に常に成功しようと思ふなら、當意卽妙の源泉である機智を充分に養はなければならない。

三、討　論

先づ討論として第一に擧げなければならないものは議場裡の演說である。第二には法廷に於ける辯護士の演說である。しかし私が此處で述べたいと思ふものは靑年が一堂に會して、ある定められた題の下に、自己の所見を主張する討論である。

私が嘗て田舍で討論會を開いた時、どうしたことか殆ど立つて自己の所見を述べるものがない。たゞ二三の人のみが交互に立つて自己の所見を述べてゐる。そしてある者は隅の方で聲を潛めて自分の所見を隣席のものと語り合つてゐる。彼等はどうして立つて自己の所見を述べないのであらうか。これは現代の靑年として恥ずべきことではないであらうか。

自分がある定められた題の下に、動かすことが出來ない定見を、明確な判斷力によつて得たなれば、立つてその所見を何處までも主張しなければならない。隅の方でこそこそ喋つてゐるのは、あまりに意氣地がないではないか。

ともすれば自己の所見が笑はれるかも知れない。謗られるかも知れない。反對されるかも知れない。間違つてゐるかも知れない。しかし自分がこれが是であり、これが非であると判斷した限り自己の主張を人々に訴へるべきではないか。自分が眞と信ずるものを主張するのに、誰に恥ぢ誰に恐れる必要があらうか。進んで自分の意見を述べるべきである。赤誠が溢れ、眞實がみなぎつて、自分が壇上に現はれたとすれば、俯仰天地に恥ぢるものはない。公平無私ではないか。

かくて壇上に立つたなれば、明快直截に他の意見を說破し、自信ある自己の所說を述べなければならない。この場合何等の遲疑逡巡も要しない。而して自己の所見を押し立てて、進むべき地點までは堂々と黑白を爭つて進まなければならない。その上で自己の意見が正確なれば人々を說服し若し又間違つてゐるところがあれば潔く矯正すべきである。凡て人文が進步發達し、人智が啓發され思想が鍛練されるのは、人々が一堂に會して自己の所見を述べて、互に啓發されるからであるこれがなかつたなれば、どうして人智が進步することが出來やうか。これによつて人智は相寄り相助けて今日のやうに進步したのである。そしてこの地點まで進んだ民衆には、討議しなければならない多くの懸案がある。この時に當つて、我々は大いに討論會を催して、相討議しなければならない。隅の方でこそこそ云つてゐたのでは何にもならない。思想を實行に移して、生活の力とし民衆の希望としてこそ、初めて眞の價値を持つのである。實行の伴はないものは空論である。人生は充實したもので、空虛があつてはならない。我々は空論を吐いてはならない。我々の言葉、卽ち行爲でなければならない。我々は一堂に會して進むべき路を討議して、直ちにその路に進まなければならない。

四、儀式辭

儀式辭には二種ある。例へば卒業式の答辭や、吊辭のやうに朗讀するものと、今一つは卽席演說とも見做すべき性質のもので、天長節の儀式などで一場の祝賀を述べて會衆に挨拶する演說である答辭や吊辭は嚴肅に朗讀すれば足りるもので、此處に說明を加へる必要はないものと思ふ。

他の儀式辭は前に述べた卽席演說と等しく當意卽妙でなければならないと共に、莊重典雅でなければならない。大日本麥酒會社長馬越恭平氏の壽像除幕式が同會社の邸內で擧行された時、式場に於ける清浦奎吾子の祝辨演說は大いに揮つたものであつた。

「豫は元來銅像反對論者である。往年品川、大木兩氏の銅像建設の際反對したのである。その理由は銅像を建てるには何か意味がなくてはならない。何の爲めに品川子や大木伯の銅像を建てるのかと質問したら、國家の功勞者たるからだと云ふことである。

それなれば何故維新回天の大功勞者たる三條岩倉木戸大久保諸公の銅像を建てないのか。この大功勞者の銅像を建てない內に二流三流の銅像を建てるのは反對であると云つたのである　又假令銅像が出來てもその建設場所と保存とを深く考へなければならない。且つ銅像によつて川上大將の如く貧弱に見えるものもある。又後藤象二郞伯の銅像の如きは芝增上寺の境內にあるが、頭は鳥の便所になつてゐて如何にも氣の毒である。

壽像建設に至つては更に反對である。人は棺を蓋ふて後定まると云ふが、生存中に壽像を建てても、若し晩年にその人が失敗したら飛んでもないことが起る。伊藤博文公でさへ神戸に建てられたその壽像が、公の生存中政治の問題から、銅像に繩がかけられて引摺り廻はされたことがある。其處へゆくと山縣公は感心である。自分の銅像を公園などに建てることに反對して、有志が折角造つた壽像を邸內に建ててある。邸內から外へ出すことは反對された。

從來多くの銅像は皆寄附を募つて造るのだから尙面白くない。始めは五六人のものが某の銅像を建てて遣らうぢやないかと相談し、それから漸次に諸方へ勸誘するのだが、腹の中では餘り贊成でなくても斷るわけにもゆかず、已むを得ず寄附すると云ふのが先づ普通である。

然るに今回の馬越翁の壽像には贊成である。その理由は第一翁の壽銅は一般から寄附金を募集しない。聞けば大日本麥酒會社の株主總會で翁の三十年間の功勞を頌して、滿場一致の決議で建てることになつたと云ふことである。

それから第二に會社の邸內に建てられることである。第三に馬越翁が長い間會社の爲めに奮鬪努力され、以て今日の盛大を致したのであるから、將來この會社の經營に當る人、及び社員一同が、翁の銅像を見る每に奮勵されるであらうと思ふ。してみると頗る意義があるから、予は贊成して今日出席したのである。

所で最後に一言馬越翁に忠告することがある。それは斯く立派な壽像も出來た以上は、選擧の競爭は今後お癈めになつたら宜からうと思ふ。伊藤公の銅像の例もあるから、この事は時に一言する。」

と云つて降壇したが、實に拍手喝采場を動かした。

少し長かつたが、この祝辭演說は如何にも當意卽妙なもので、しかも祝賀の意味も充分あつて、最後の選擧のことに對する一言は寸鐵殺人の慨がある。これに加ふるに莊重典雅の辯を以てすれば儀式辭の演說として、完全無缺である。

雄辯の搖籃を戰勝將軍の挨拶にあるとすれば、この儀式辭が雄辯のうちで最も古い歷史を持つたものになる。從つて儀式辭には既に定まつた型が存してゐるが、我々はこの型を超起して新時代の儀式辭を創造すべきである。かく多種多樣に分化發達した雄辯なるものは何處にその搖籃を持つてこの現代の雄辯の時代を生み出したのであらうか。更にその研究をして、我々のこの時代の雄辯を一層明確に理解しようではないか。

第五章　雄辯の進化

一、希臘の雄辯家とデモステネス

　正義の鍵であり自己發表の劍であるこの雄辯は、何時頃からあつたものであらうか。その搖籃時代は果して、我々の文化とその源を共にしてゐるであらうか。この搖籃を研究するには、ともすると直接雄辯と交渉のない部分にまで立ち入つて十分に研究しなければならない。例へば金鑛を掘る人が岩を割き、土を潜つて、樣々な辛苦を重ねた後、漸く目的の黄金の光を見出すと等しく、雄辯の金鑛も亦古代文藝の岩壁土壤の奥深く埋れてゐる。その間から燦爛たる雄辯の黄金を探し出すことは容易なことではない。それにしても言語が文章に先んじ、詩が散文に先んずる如く雄辯が文藝に辯論が文章に――先んじたことは誰でも認めることが出來るであらう。この雄辯の搖籃に就いての人種學者の說が正しいとすれば、我々はその進化論を認めなければならない、と云ふのは、雄辯の濫觴は原始時代に、分捕品を携へて部落に歸來する凱旋者の歡迎の辭に始まつてゐる、との說である。しかしこの原始民族の所謂歡迎の辭なるものは、始めから雄辯の形式をそなへたものではない

始めは極めて簡單に勝利の喜びを言葉を以て發表したものが、人智の進歩と共に進化發達して遂に凱旋の稱讃演說となつたものである。

　かうして當時の雄辯家が、詩人、史家、作劇家、哲人等と相並んで、原始時代の文藝に永久不滅の足跡を殘したのである。從つて文人の著作中にも此處彼處に雄辯の斷片が散見される。**ホーマアの「イリヤッド」**に現れる勇氣鬱勃たる雄辯の如きはそれであつて、かうした生きた雄辯をそのまゝ詩人の靈筆によつて描いたものである。それにしても雄辯の原形質とも見るべきものは、一體何であるか。三千五百年の昔に**アポロノ神**を頌へる俚謠とか、竪琴掻き鳴して諸國を遍歷して佗しさのなかに甘い生活を續けた巡遊詩人の歌にもその原形質は發見されない。その次に起つた哲學的散文のなかにも亦それを發見することは出來ない。

　雄辯が文學中に牢乎たる一立脚點を保持するに至つたのは、有史時代に達してからのことである「歷史の父」と呼ばれてゐる**ヘロドドス**の挿話中には澤山にその例が載つてゐる。元來彼の性質が歷史家であると同時に、神學者といふ傾向を示してゐたので、その書中の演說も多くは抒情的である。從つて作者自らの思想感情が雄辯となつて現れてゐる。

　それから史學批評の祖と云はれてゐる**ツキデイデス**の書中の人物も、亦重要な場合になると屹

度雄辯を揮つてゐる。その作中の人物の思想感情に對して、著者自らその人物の胸中に潜入して、悉くそれを表現してゐる。このやうな方法は歴史の範圍外のものとして、當時は非難の的となつたが、後世の史家は彼は倣ふ者多く、希臘羅馬の歴史に香りゆかしき修辭を與へた。**ツキディデス**の最初の七冊の著述の中には、頌詞と法廷及び政治の演說が四十一の多きに達してゐる。その中で將軍から士卒に對するもの十四は、最も要領を得た得難い雄辯と云はれてゐる。

ホーマアや**ヘシオドス**の叙事詩の感化として、希臘人は英雄豪傑が何か行動をすれば、屹度これに演說が附いてゐるものと考へた。史家がこれを筆にするに當つては、演說をひてこれを補足しなければ、讀者の滿足を買ふことは出來なくなつた。その爲めに史家は事件の平明なる叙述のところどころに、將來や政治家の演說を交へたのである。

かくて雄辯が民家に異常な興奮を以て迎へられた希臘では、その結果として、當然戯曲にも深い關係を持つやうになつた、集會に於ける長い演說に慣らされた雅典人は、悲劇中に長い演說が挾まつても、毫もこれを怪しまなかつた。遂には演說が主要な部分として仕組まれた劇を多く生み出した。かうして雄辯が熱狂的に迎へられる希臘には、雄辯家が雲のやうにむらがり起つた。

先づ法曹界には、從來の技巧を顧みないで、單に思想と道德力とによつて、何處までも冷嚴にして、說破せねば止ない**ペリクレス**を始めとして、緩急度に適ひ、仰揚時を得て、その言々句々は力ある叫びであつて、素朴な自然的態度と相俟つて、堂々たる雄辯家、**アンチフオン** 平明體の開祖たる**リシヤス**の快辯、從横無礙適々として可ならざるなき **ゼイウス**等が千舌の雄辯を我々にまで呼びかけてゐる。

希臘政界の雄辯家としては、**リヤルガス**、**ハイペリデス**を始めとして、天才雄辯家**ヱスキネス**、及び千舌の大雄辯家**デモステネス**とを擧げるべきであらう。

雅典の雄辯は彼の**デモステネス**に至つてその絕頂に達したと云へやう。雅典の雄辯はその源泉を往古希臘の詭辯家（ソフイスト）と、ヽヽヽヽシシリイ島に於ける法曹の雄辯に發してゐる。かくて**アンチフオン**及び**ツキディデス**の嚴格苛烈の一派と、**ゴルジヤス**に創始せられて後、**アイソクラテス**の完成せる瑰麗雄偉なる一派とを生んだ。この二派の雄辯と日常の會話とを折衷して、地味な一派の雄辯を創始したのが**リシヤス**である。更にこれを活氣横溢せる政界に移植せる者は彼の**イゼウス**であつた。そしてこれ等の各派の雄辯を傳承完成せる者は卽ち我が**デモステネス**の政治的大雄辯である後世の政治家、學者、及び雄辯家は異口同音に**デモステネス**が雄辯界に於ける空前の巨星であると稱へてゐる。それにしても、わが**デモステネス**は生來その天禀に於いても、その聲量に於いて

も、亦態度に於いても特別に優れたものを持つてゐたであらうか。生れながらにして、その哲學と機智と悲壯沈痛の表情とを見備してゐたであらうか。傳へるところによると、此等の天賦の才能は何もなかつたとのことである。それにしても何等の天禀もなくして、彼の如き異常の成功を納むるに至つたのは、何故であらうか。私は此處で彼の生立ちを說明して、諸者の參考に供したいと思ふのである。

彼は富裕な一製造業者の子として生れた。敎育に就いても富の點に於いても、何不足はなかつた父は巨滿の遺產を未成年者の**デモステネス**に殘して世を去つたが、不幸にもこれが管理に當つた二舅と一友人とは不良の徒であつたので、彼が成年に達してその財產の引渡しを受けた時には、財產はその相當額の半にも達してゐなかつた。この不正を訴ふべき法術も辯護士も法律も儼乎として存在してゐる。**デモステネス**は當時遺產事件に就いて嘖々の名聲を擅まゝにしてゐたイゼウスの力によつて、直ちに不正漢を法廷に訴へた。この辯論の大部分は彼自らの立案起草にかかるものであつた。勿論それは別に光彩を放つほどのものでもなかつたが、彼が後年の雄辯に現れる力と直截とを充分に現してゐる。訴訟は彼の勝利に歸したが、色々な障碍の爲めに、彼の回復し得た損害はこれによつて贏ち得た名聲には及ばなかつた。それにしても人生の奮鬪に發足する青年**デモステネス**に取つては、これは金錢以上に有利な武器であつた。逆境に陷つた富裕の子弟によく見る如くに、彼の不幸は彼を鞭撻して、赤裸々の自己の技倆にのみ依賴する勇猛心を起さしめた。これが銀衣暖食の間にあつては、ともすると空しく逸し去らなければならなかつた彼の才能を發露することになつたのである。

ここで我々は注意して彼を見なければならない。と云ふのは、自己の上に加へられた害惡を排除して、喪失された利益を回復するといふことが、**デモステネス**の雄辯の端緒となつたといふことである。この點は希臘全體の雄辯がシシリィ島の法曹界の雄辯にその濫觴を發してゐるものと好箇の對象をなすものである。そして次に來たものが議政壇上に於ける民衆の眞の叫びである雄辯であつて、その完璧を**デモステネス**に於いて見ることになつたのである。

彼が如何に大雄辯家としても、生れながらにして雄辯家ではなかつた、先づ第一の準備として**イゼウス**の門下に於ける三ケ年の法律硏究と、聽衆を前にしての實地の論理修練が行はれた。かくて彼は自己の天性の欠陷と戰はなければならなかつた。彼は生れながらの吃者で、その上風采が貧弱で、呼吸が短く、言語が不明晰である上に、その態度は何となくギコチなかつた。この青年が會集の面前に於いて、若し演說をしたとすれば、滿堂の哄笑と冷嘲のうちに葬り去られるのは、あまり

に明白な事實である。しかも當時希臘は雄辯萬能の時代であつた。かくてわが愛すべき青年デモステネスの處女演說は全く失敗に歸した。それにしても彼の**デヰスレエリ**が議會の處女演說を冷罵裡に葬られながらも尙昂然として、**「余は後年必ずや諸君の謹聽を强要し得る大雄辯家たらん」**と云ひ放つたやうに、**デモステネス**も亦徐ろに自己の欠點を補足した、終局の成功を納めようとして勇猛心を奮ひ起した。彼は地下に書齋を設け、數ヶ月の間世間から退隱して、雄辯術を練磨し、時に礫を口にして詩を朗讀した。又時によつては急坂を驅け降りつゝ演說を試み、或は**エージアン**海の怒濤の前に立つて、音聲を絞り、或は鏡面に姿勢を正した。彼は又身振、表情の研究の爲めに、當時流行した諸俳優の態度を學んだ。

先輩の側に倣つて、彼は七年間辯護士の事務所に通つて、他人の爲めに訟廷の辯論を起草する修業をした。日夜歷史、法律、財政の研究に沒頭するかたはら、法廷の傍聽や準備書面の作成や、辯論原稿の起草を怠らなかつた。**デモステネス**が最初に管掌したのは民事事件であつた。しかし、漸次にその姿を議政壇上にも現して、雅典の希臘に於ける地位を擁護確立し、內政の腐敗を改革して、國民の眠れる愛國心を覺醒振作することに努力した。

彼はその歷史研究によつて得た知識を議政壇上の演說に利用してゐる。――その方法は史的教訓を現在目前の事實に應用して、これに活氣を與ふることである。政壇上に於ける彼の最初の雄辯は議論と冷罵と激怒とを以て終つてゐるが、このやうな方法は從來の雅典の辯としては勿論のこと、又彼自身の雄辯に於いても例外である。要するにこれは初心者の熱血と、まだ塵に染まぬ青年の鋭敏な道義的觀念の然らしむる所であらう。それにしてもその後の演說にも道德的感情は常に高調されてゐる。或は公德上に於ける信義の神聖を力說し、或は雅典の商業道德及び名聲はその富以上に尊重さるべく、その名譽は個人もそれに異ることなしと絕叫した。或は神に託言しても不正は依然として不正であると云つて、陋劣の精神を蛇蝎視した。又他の一雄辯に於いては、希臘諸國に對して雅典はその保護者である責任を持つてゐると說き、これに私情を結ぶの愚と、各國獨歩の行動が自由であるべき必要を主張し、希臘諸國を糾合して、波斯に侵入せんとするが如きは、畢竟一場の空想に終るべきものであることを教へてゐる。彼の常套語は個人も國家も共に道德的動機によつて羈せらるべきもので、正義に永遠の生命の存するのは、即ち我々がこれに服しなければならない理由があるからである。政治家は如何なる代償を犧牲にしても、常に眞實を語らなければならない。斷じて眞摯の態度を失つてはならぬ。そして政治家は亦その言行に對して個人的責任を負擔すべきである、と主張した。

彼の雄辯の基調をなすものは名譽の觀念である。進んでは國家として、退いては一市民としてしなければならないことは、それは快樂でもなく、利益をあげることでもなくして、名譽及び義務の命ずることである。道德的觀念の强烈なることに於いて、最も彼に似てゐるのは、英國の政治家**エドマンド・バーク**であつた。汎希臘的愛國心の强烈なることでは彼は遙に**ペリクレス**を凌駕し强いて彼に近いものを求めるなら、**エパミノンダス**が最も似てゐるであらうか。彼の高遠なる國家及び個人的道德觀念と、希臘諸國間の關係に對する廣汎なる見解とは、彼の雄辯に深さと廣さとを與へた。彼の**デモステネス**が偉大だと云ふのは、このやうに確乎不拔の思想の根柢上に、絕大なる雄辯の力を兼ね併へた點である。

デモステネスの雄辯は、初期にあつては幾分苦心彫琢の跡があつたが、後年の圓熟期になつてからは、變化に富み、豐麗を極めたものであつた。日常の會話の快語と、儼乎たる大文章と相交錯し、俗語と妙文と相紛更してゐる。日常の言葉は平凡に隨せざる妙腕を以て、自然に且淸新に採取され、可憐な喩言と、唯た一言に壓搾された譬喩とはその間に云ふべからざる趣を添へてゐる。しかもこれ等の絕妙な技巧の間にあり乍ら、論旨の主眼は一切の技巧を越えて、頗る直截に把握されてゐる。前後在右の各方面から主題を照し出さうとして、これに灑がれてゐる光線は、各種樣々に輝いてゐるが、その焦點は斷じて逸するやうなことはない。かくの如くして、彼は押しも押されもせぬ輿論の指導者となつた。彼の目的は雅典を盟主とする汎希臘同盟（パンヘレニック、リーグ）を組織することであつた。その努力の報酬として、彼は二年間至高の地位を占めて國家の指導者となつた。

天才の眼孔は廣くして且つ大である、と云へば、この言葉は恐らく各方面の天才に共通な現象で彼等の豐富な天稟は型に嵌つた一小天地に跼蹐するものではない。彼等は機に應じ時に順じてこれを適當に變化する。彼等は自ら起つて眼前の機會を捉へて時代の人となる風雲兒的機略を有してゐる。**デモステネス**をして人類最大の雄辯家たらしめた原因も亦此處にないであらうか。一瞬裡に各場合の事情と性質とを看破する烱眼は殆ど彼の天稟に出ずるところであつて、その裡に潛める力と可能性を測定して誤ることはなかつた。祭日の雄辯には魅するが如き瑰麗の辯を揮ひ、法廷には說明と議論とを以てし、議政裡には道德的觀念に訴ふるの機略を藏してゐた。

彼の文章と句讀とは、或時は緩流となつて、洪水の趣きを存するかと見れば、又或時は奔湍となつて急促の態を示し、その言語は時には威容堂々の大文學、時には快活洒脫の俗語である。彼はこの點に於いて、從來の雄辯の法則を捨てて、通常の言葉に異常の效果を生ぜしめた。この雄辯の神を評して**ロンギナス**は云つた。「**デモステネス**」が喚起して來る激越の感情を冷靜に斥け去る

ことは誰にも出來ないことであつて、それは丁度電光を凝視することが出來ないと同じことである。」と。かくて大雄辯家**デモステネス**の獅子吼は如何なる人をも魅了せずにはをかなかつたのである。

二、羅馬の雄辯家とシセロ

希臘の次に文化史に燦然たる光をなげてゐる羅馬の雄辯はどんなものであらうか。希臘人は冥想と思索の民族であつたが、羅馬人は實行の民族である。從つて散文は詩以上に遙かに羅馬人の天性に適した。政治的效果の多い文學は彼等の最も此迎したものである。雅典は**ソクラテース、プラトン、アリストテレス**等を生み出して、思想を以て世界を制服しようとしたが、羅馬人は權力を以て、政治を以て、劍をもつて世界を征服しようとした。千古に渡つて乾くことのない冥想の泉に全世界が蔽はれることが、希臘人の夢であるとすれば、全世界の主權者になることが羅馬人の夢であつた、かくて歴史、法律、及び雄辯學は次第に羅馬人の教養の目的となつた。

さて、此處で羅馬の雄辯を鳥瞰圖的に概觀してみる。**グラツカス**兄弟を代表者にする第一期時代は、學殖の匂ひ高き堂々たる雄辯で、全體が頗る調和的であつた。その次に來た中華時代、卽ち**アントニー、クラツサス、ホーテンシヤス**等が盛名を天下に馳せた時代は、今一層活氣に富み、態度も亦複雜であつた。それにしても第三期の全盛時代を飾つた代表的雄辯家は、希臘の天才も遠く及ばないものとなつてゐた。羅馬の天才雄辯家シセロのほかに、**大シーザー、ブルータス、キユーリヨ、ケリヤス、カルヴアス、カリダス、**等の雄辯家が雲の如くむらがり起つた。

渾身に力が溢れてゐる**ジユリヤス・シーザー**の雄辯は、赫々たるその武勳と共に千古に傳ふべきものである。若し**シーザー**が專心政壇上の雄辯に沒頭したなれば、**シセロ**に次げる羅馬最大の雄辯家として知られてゐたであらう。聰明で、精力的で、しかも全身に熱火も藏してゐた彼は、戰場に馳驅する時と同樣な氣性を雄辯にも現し得たのである。これ等の長所に加ふるに優婉無比のその聲調は、錦上更に花を添ふるやうなものであつた。

ケリヤスは機智縱橫の雄辯家であつた。殊にその得意とするところは、法廷の攻擊的辯論であつた。**カルヴアス**はその當時の批評家に、唯一の雄辯家であると推稱された。彼の辯は節制ある**アテネ**の先輩に模し、且つ極端に自己批判をする結果として、冷靜愼重であつたが、生來の精氣を減じて、街氣に墮するの憾みがあつた。

ブルータスは嚴肅な哲學的雄辯家であるが、時によつては温情と膽氣とを示してゐる。**カリダス**は織巧にして調和に富み**キユーリヨ**は膽大にして、朗々の辯を揮つた。

共和時代の諸雄辯家は政治問題に關して、聽衆の熱愛を唆るべき機會を持つてゐた。彼等は希臘文學や哲學の中から、箴言警句を汲み來つて、聽衆を喜ばせたり、演說を潤色することを知つてゐた。彼等の冒頭は長く、その敍述は博大に、岐論と區分は豐富に頻繁に、その結論は步々漸を逐ひ眞摯の氣に溢れてゐた。かくて公德と共和政とが同樣な意味に解せられてゐるうちに、彼等の雄辯は民衆の歡喜となり、健全な國民の誇となつた。

アレクサンダア大王以降、羅馬帝政の創始者**オーガスタス**帝に至る三百年間の大雄辯の運命を決定したものは、希臘領土に現はれた新奇な事情であつた。**アリストテレス**の提唱設定した修辭學の原則は、彼の流れを汲んだ學徒の間に暫く生命を保持し、**ローヅ**島學派に屬する亞細亞民族の間には、型に嵌つた流暢なスタイルが尊ばれ、醇乎至善の希臘趣味の正系は漸くにして喪はれつゝあつたのである。この時に當つて、彼の**ハーマゴラス**は**アリストテレス**以前の時代に屬する實際的修辭學と、**アリトテスレス**の創始せる哲學的理論とを折衷して、狂瀾を旣倒に反さうとした。そして希臘雄辯界の二系統である實際派と哲學派とに對峙して、學園派といふ一派を起して、亞細亞風の雄辯の弊所を救はうとした。希臘の雅典の諸雄辯家は、雄辯は深邃な研究と刻苦精勵の結果として始めて堂に入るべき至上の一藝術であると信じてゐた。しかし亞細亞の思想家は雄辯は單なる熟練に依つて容易に達し得べき末技であると思つてゐた。

雅典派の雄辯と、亞細亞派の雄辯といづれが優つてゐるか、と云ふことは學界で激烈な論爭が行はれて來た。所謂雅典派とは緊張した精力的のスタイルを云ひ、亞細亞派とは苛烈瑰麗の體であるこのやうな分派を生じた理由は希臘國權が伸張して、隣邦の諸民族にその文化を傳播した時、自然又亞細亞人種からも、その文化を移入しなければならなかつた。沈練渾成の性格を有する雅典人は無用冗漫を嫌つた、それに反して虛飾華麗を喜ぶ亞細亞民族は好んで瑰麗の辯を弄した。第三の流派としては、**ローヅ**島派と言ふのがある。これは小亞細亞の**ローヅ**島に流謫の身となつた**エスキネス**が創始したもので、雅典派の簡素と、亞細亞派の豐麗とを折衷したものである。この三派の優劣に關しては、要するに各人の趣味の問題である。人と時代と場所とに應じて、三者各々その特徴を發揮して、歡迎を受くべきものである。若し強いて三者の優劣を決すべき標準を求むるならその聽衆に及ぼす效果如何を擧げて來ねばならない。それにしてもその辯の力と活氣とに於いて、莊嚴と詞句とに於いて、此等乾涸細心の諸雄辯家を壓して、獨り大なるものは彼の**デモステネス**

であつた。羅馬の**シセロ**と相並んで、雄辯二千五百年の歴史に、二巨星と仰がるる**デモテスネス**は好んで形容を用ひ、詞藻の華麗の爲めには譬喩に手段を求め、無生物をして語らしむることさへあつた。**クヰンテイリヤン**は狹義にアテネの雄辯を用ひたけれども、**リシヤス**風の平明正確中庸の雄辯を喜ぶものと、**ゴルジヤス**風の瑰麗の辯を好むものとは、永久に二派を樹立して行くであらう。雄辯界にこの二傾向を存するのは世に質素を愛する人と、莊麗を愛する人の絶えざる如く普遍的な現象である。更に現性と感情と、思想と空想と、現實と理想との交錯折衷を喜び、相救ひ相倚らしむることを好む人は前二者以上に多數であらう。例へばこれを自然界の現象にしても、一方儼乎として聳え立つ山岳があるかと思へば、これを緩和し美化する森林もあり、光明と陰影とが美しく相交錯してゐる。海上の單調な水面を破る爲めには波濤奔湧し、陽光と色彩とは千々に變幻する。森羅萬象の變化と交錯は限りないものである。この自然の法則のやうに、雅典の平明簡素の雄辯が遂に亞細亞の雄偉瑰麗を生んだのである。と云ふのは、後者の文藝及び哲學が貧弱であつたのを隱蔽しようとして、殊更に外面的粉飾が積まれたからである。嘗ては希臘文明の中心として、平明を誇り雅典の都も、遂に亞細亞的風潮に抗することが出來なかつた。**シセロ**時代の**アテネ**の雄辯は前述二傾向の折衷たるの觀を呈してゐた。更に次の時代に入ると共に、羅馬の雄辯は瑰麗の體に遷り、そして雅典の都には亞細亞派の雄辯が時代の潮流として全市を蔽ふたのであつた。

かうしてゐるうちに、雄辯を生むべき感興と、自由と、藝術的諸作品とは、雅典を去つて、七陵の都**ローマ**へ流れ去つたのである、道はすべて**ローマ**に向つてゐる。この移動と共に尙武的な羅馬人に教育する爲めに學識あるものの子弟は羅馬に赴き、更に又その子弟の學業を完成する爲めには思想の都雅典の學園に送つた。この相互交通の結果として、羅馬では雄辯復興の新時代を再現した。希臘の古典的の研究及び模倣の爲めに、遠く**デモステネス**の時代にまで遡つてその風潮を研究した。この風潮の代表的人物はわが**シセロ**である。**シセロ** としても生れながらの雄辯家ではなかつた。彼は**アスカロン**の**アンティオカス**、**プラトン**の學徒である**フヰロ**及び**ローヅ**島の**アポロニヤス**等に師事したばかりではなく、亞細亞の有名な修辭學者を歷訪して、專心それの研究を續けた。**アポロニヤス**は拉典語を解しなかつたので、**シセロ** に對して希臘語で雄辯を揮はんことを求めた。彼はそれにきき入つて後、徐ろに口を開いて「シセロよ、予は卿を嘆稱すると同時にわが希臘を憐まざるを得ない、と云ふのは、今日まで世界の隨一を誇り得た希臘の雄辯御身によつて、羅馬に奪はれやうとしてゐるから。」と、嗟嘆した。

さて、私は**シセロ**と云つた。**シセロ**は**デモステネス**と並び稱せられる世界雄辯界の二大巨星

である。羅馬の**クヰンチリヤン**が「拉典文學には雅典文學特有の魅力がないと云ふ人は、希臘語の性味と博辯宏辭とを我々に示して貰ひたい。事實上拉典語にはこれ等のものを望むことは出來ないので、我々は餘りに纖巧な議論で論旨を紛更させるやうなことは避けなければならない。しかし優婉な點では我々は希臘には及ばないかも知れないが、力强い點に於いては確かに希臘を凌駕してゐると思ふ。」と云つてゐる。**シセロ**が進んだ路も亦これであつた。

羅馬初期の雄辯家は堂々とした形式を學ばうとした。この次のものは力の雄辯に成功しようとした。しかし、わが**シセロ**はそれ等の凡てを捨て、一個の言語を造り出すことに努力した。その方法は新奇な言葉を作り出さうとするのではなく、寧ろ舊來の人目に親しい言葉を結合することによつて、これを實現しようとした。彼の大手腕は手廻りの材料を以て異常の結果を生み出さうとするもので、この方法は眞の雄辯家が古今を通じて、渝らざる手段である。彼をして千古の大文章家としたものは、その文章の豊麗明皙と組織的構想と空辯博辭とである。他の點に於いては彼に優越せる雄辯家も數多いが、思想を表明すべき言語の豊富と變化とは、全く彼の獨り舞臺である。

シセロが自己の模範として辯力練磨の標的とした人物は云ふまでもなく**デモステネス**であるそれにしても彼自らの異常な成功は、**ジエローム**が**ブルータス**を許し「**デモステネスは御身の頭上より第一の雄辯家であると云ふ光榮を奪ひ去つたけれども、御身は彼の頭上より雄辯界唯一人者であるといふ名譽を奪ひ取りました。**」と云つた評語を思ひ起さざるを得ない。兩者の天才、技能、及び演説體は共に大同小異である。彼等の雄渾崇高にして規模宏壯なる大雄辯はあらゆる主題に權威を與へる。完璧無疵の兩者の雄辯はいづれに團扇をあげん術もない。**クヰンチリヤン**は**シセロ**を以て優れてゐると云つてゐるが、羅馬人たる彼のお國自慢の結果とも思はれる。

シセロには**デモステネス**の大精力を見ることが出來ないとしても、彼の優麗な口調と、その感情の變化と、從横の機略に至つては遙かに**デモステネス**を凌駕してゐる。**ロンギナス**の言葉によれば、**デモステネス**は聽衆を笑はせやうとする場合には、自ら滑稽なことを云つたり、又はしてみせたりしたので、ともすると自己の品位を害するやうなこともあつた。しかし**シセロ**の豊富なる機智は常に勞せずして聽衆を笑はしめることに成功した。**シセロ**は**デモステネス**同樣、崇高雄渾の大雄辯を揮つた。ある人が「**シセロとは或る一個人の名と云ふよりも、寧ろ雄辯そのものの名である。**」と激稱したのも無理のないことである。

シセロと**デモステネス**の酷似せる第一の點は、兩者が雄辯の鍛錬に盡した慘憺たる苦心の跡

である。彼等は共に師と仰ぐべき最善の人物を求めて、その缺點を矯正し、天分の及ぶ限り自己の完成に苦心したのである。それにしても兩者の相違點は、**デモステネス**は全身を雄辯の大成に投じて敢て他を顧みなかつたが、**シセロ** は雄辯以外にも各種の優れた學術を藏してゐて、殊に哲學に深遠な造指を示してゐた。**シセロ** は自己の技能が複雜であることを、思ひ切つて大びらに自慢するが、**デモステネス**は必要止むを得ぬ場合の外には、自家廣告はしなかつた、よしこれをする時でも頗る控目であつた。處が**シセロ**は自惚れも甚だしいが、それを發表することも無遠慮であつた。彼ば常に**ペン**と舌とは劍に勝つものであると廣言して、自分の雄辯に就いても盛んに手前味噌を並べ立てたが、**デモステネス**は自分の雄辯は單に練習の結果によるもので、成功の大部分は聽衆の誠意の然らしむるところであると云つた。

兩者の雄辯の情調にも非常な相違があつた。**シセロ** の天性は常に快活であつて、唇邊常に微笑みの漾ふのを見た。時によつては諧謔百出して聽衆に腹を抱へさせることも珍らしくはなかつた。殊に對手の議論を打破する策がないと見た時は、無暗に洒落のみ連發することもやり兼ねぬほどであつた。法曹界の雄辯家としての **シセロ** には、これ以外の點にも隨分倣ふべきものがあつたのであるが、彼の模倣者は徒らに快活の點のみを學ぶのに汲々たるの有樣であつた。これに反して**デモステネス**には諧謔の薬味はなく、常に眞摯莊重で、思慮深い中庸の雄辯家であつたので、彼の政敵は陰氣臭い人物だと貶つた程であつた。

立言の構想から云へば、**シセロ** の清澄徹透せる組織的文章は、**デモステネス**を壓してゐると云はねばならない。これは **シセロ** が生れた時には、既に修辭學が儼然たる一個の科學になつてゐた結果にするもので、時代が然らしめたのである。それにしてもこの科學の樹立については、希臘の雄辯家、殊に**デモステネス**の大雄辯の寄與する所は實に甚大であつた。故に**デモステネス**は自然に於いて勝つてゐるが、**シセロ** は技巧に於いて先人に優れてゐると云はなければならない。

デモステネスは確然たる一個の目的の爲めに奮勵した。彼はある事業を遂行し、人々をして行動せしめようとして雄辯を揮つた。聽衆の胸に信念の焔を燃やして、自分自ら進んで行かうとする目標に向つて、彼等を導いて行かうとするのが彼の願望であつた。しかしシセロは時によつては左程眞摯ではなく、氣易く洒落氣に滿ちてゐて、聽衆に愉快と恍惚とを與へるものである。その結果として、彼が雄辯の翼に乘つて、遙か雲上に飛翔する時でも、決して自己を見失はない。かう云ふ場合になると、**デモステネス**は自我を全的にその主張の中に融合せしめて、自我といふ觀念を失つてゐた。それだからこそ、彼の**デモステネス**が一度**マセドン**王**フヰリプ**を攻撃する熱辯を

揮ふと同時に、聽衆は皆立つて、「**マセドンへ！マセドンへ！**」と絕叫したのである。演說體の點に於ても同樣の相違があつた。**デモステネス**は形容と粉飾に何等努力しないで、形容そのものの爲めに形容を用ふると云ふやうなことはなかつた。しかし、**シセロ**はその探求創造に專念してこれを愛するが爲めにその蘊蓄に意を致したのである。**シセロ**の文は朗々誦ずべきものがあると同時に、ともすると冗言に馳するの危險があつた。この場合**デモステネス**は簡素雄勁實際的にして思想と實質と議論とに專心意を用した。**シセロ**が雄辯を揮ふ時、閃々たる光芒電間に躍り、光焰天に沖し、美はしき紫雲は搖曳した。**デモステネス**の獅子吼する時には、丈なす怪光は此處彼處に飛び違ひ、その靈光は如何なる聽衆をも動かして深く感淚せしめたのである。

シセロが希臘の雄辯を學んで、その堂に入つたと云ふ點は、俊速なる論旨の運用である。それにしても我々をこれを躁急進慮と混淆して、速斷してはならぬ。これは着々として望む彼岸に議論の船を操りゆく澱みなき雄辯の流れである。この**シセロ**の雄辯が、その處と時とにはなれなかつたとは考へられない。彼の雄辯がその堂々さと華麗とによつて、羅馬市民の大多數の喝采を博したのは彼の言論が同時の人心に共鳴する點が多かつたと云はなければならない。**ジョージ**朝時代の英國議會の大雄辯家**ピット**も、この先人に學んで時代精神上の共鳴を計つたのであらう。雄辯の目的が慰藉、說明、誘導、若くは歡喜を買ふ場合には、朗々として博大剩す所なき雄辯が必要である。即刻猛烈なる活動を捲き起さうとする場合には**デモステネス**の激動鞭韃の雄辯を學ばなければならない。彼の雄辯は戰ひの雄辯である。それにしても平和の時代に民衆に道德を說き、哲學、宗敎思想等を論ずる場合には悠々乎たる**シセロ**の暢達の辯を旨とすべきである。

最後に**シセロ**の雄辯を論ずるに當つて、その有力なる一要素である倫理の背景を忘れてはならない。**シセロ**の先進も亦彼自身も云つてゐるのである。「**完璧の雄辯は完璧の人格にあり。**」

三、十字軍とその時代の雄辯家

燦然たる羅馬の文化が時が移ると共に漸次に荒敗して、その光を失ふと、迷信と、暗黑の時代である所謂中世紀が來た。この時代の雄辯を求むるならば、神の敎を說かれた敎壇に眼を向けなければならない。それにしても十世紀の前後にわたつて、犯罪と無知と暗雲は全世界を包み隱してゐた神の敎理は單に傳說に於いて承繼せらるゝのみであつて、僧侶たちは日常の勤行の常套以外には殆ど何等の知識も有しなかつた。

しかし十一世紀の到來と共に文藝復興の曙光は地平線の彼方に認められて來た。希臘及び回敎徒

の諸都市に於いては、**アヴキセナ**、及び**アヴキセブロン**等によつて學藝は復興せられ、その他佛蘭西の**ジエルベール**や**カタベリイ**等も當時の錚々たる學者であつた。一方神學の獨斷は科學の力によつて統一せられ、**アリストテレス**の哲學論理學と、敎會の傳說並に宗敎會議の宣言は、茲に渾一融合せられること〻なつた。

この世の末葉に、法王**ヒルデブラント**の宗權と、佛英獨伊等に於ける國王の權力と封建的精神との間に大衝突を見るに至つた。英國は頑として法王の命に服從しなかつた。佛蘭西は獨立の態度を維持し、獨逸は彼に凌辱を受け乍ら、遂に法王を屈服したのであつた。一方法王も亦これに應答して、自己の選擧に就いて神聖羅馬帝國の認容を請けない。この動搖時代に人類はその智力を大いに活動すべき時であつたが、人類は墮落して、迷信と暗黑のなかに眠つてゐたのである。東方に於いてたゞの一時的に希臘文學の復興をのみ、また西方諸國に於いては、僅かばかりの拉典文化の飜譯が行はれたに過ぎない。この時代にあつて、一縷の望みを繼ぎ得るものは、神學、哲學、法律等の分科を擁する大學の進步發達であつた。

それにしても眼を一度轉ずれば、歐州の天地は今漠々たる十字軍の戰塵に蔽はれてゐる。この狂信的時代に適はしき一個の狂信的雄辯を以て頭角を露して來た者がある。彼は卽ち**アミヤン**の者**ピーター**である。

ピーターは紀元千五十年に生れた。彼が峻嚴なる隱者の生活に入る前に、**ブーロオニユ**侯の下に仕へてゐたこともあつた。**ジエルサレム**の地に基督の靈跡を尋ねた彼は、回敎徒の驚くべき褻瀆行爲に赫怒して、歐洲の尙武的國民を起して靈地を異端の手から恢復せねばならぬと決心した風采の揚らない小男の彼の口からこんなことが語られるとしたなら、ともすると一場の駄法螺として葬り去られるかも知れない。しかし法王は彼の計畫に贊同して、その運動に從事すべき相當の權限を與へた。**ウヰリヤム**といふ當時の一記者は**ピーター**の風貌を叙して「彼は見すぼらしい小男ではあるが、洛々とした機智と、快感を與へる明眸とを持つてゐて、しかも流暢な雄辯家である。」と書いてゐる。彼は無學だつたので、修練上の缺陷を補ふ爲めに、惻々として聽衆の肺肝を衝く如き有力なる感情の言語を用ひ、大聲疾呼して、主基督や聖母マリヤの名を呼び、自ら親しくこれと相語つたと稱した。自分の眼に一の幻影が啓示せられ、自分に宛てた一封の手紙が天上から舞ひ來つたと**ピーター**は宣言した。基督自ら彼の枕頭に立つて、回敎徒の手からその墳墓を奪回すべきを命じた。と彼は云つた。かくて**ピーター**は諸國遊說の途に上り、貴賤を論せず、敎會と街頭とを問はず、聲の限り言葉の限りを盡して、神の命令の宣傳に努力した。かくして後、眩然として淚

を垂れ、苦悶の聲を發して、胸を叩いて彼が常に携へてゐる大十字架を指すのであつた。群衆は彼の言葉に狂喜して、喜捨の品々を雨のやうに投げた、**ピーター**はこれを悉く貧民に頒け與へたとのことである。**ピーター**の雄辯は忽ちにしてその偉力を發揮して、輿論を捲き起した、今は早や問題は十字軍の入隊を募集することではなくして、熱狂の餘り直ちに**パレスティン**を指して進軍しようとする群衆を控制することであつた。熱狂した群衆は**ピーター**を促し立てゝ、豫定の日限よりも五ヶ年の前に、**ジエルサレム**を指して出發して了つた。**ピーター**は潮の如き烏合の衆を率ゐて、**ライン**河を横ぎつて一路徐かに**コンスタンチノープル**に進軍した。この五十萬人はその途中で死滅したので、第一次の十字軍は一大失敗となつた。これは要するに回敎對基督敎、亞細亞對歐洲の抗爭の第一もあつた。

全歐洲を撼蕩せしめた彼の**ピーター**は、このやうに無學で獨信家であつたけれども、彼が成し遂げた事業は、希臘最大の雄辯家が夢想することさへ出來ないほどの偉大なものであつた。彼は西方の諸民族を馳りて東方に向はしめたのである。彼等の多數はこれが爲めに滅盡したけれども**ジエルサレム**は回復せられ、靈地は基督敎徒の手に歸つた。これは基督敎徒たる彼等にとつて、十一世紀に於ける絕大なる事業に目されることはあまりに當然の事實である。

隱者**ピーター**は彼の**デモステネス**の如く自ら宣言したその事の爲めに戰つて、その至誠を立證し終つた後は、自分が創立した**エージユ**附近の一僧院につて退棲して、其處で十五年の餘生を送つて靜かに天上に消え去つた。彼の雄辯がかく成功した原因は、多くの大雄辯家に通有である時代精神に適合した感情思想であつたからである。彼の雄辯は粗野なものではあつたが、その裡にあらゆる至醇の雄辯の通有性である眞摯と直裁とを存してゐた。その上彼は確信の衝動にまかせて、何等の技巧もなく、又拘束もなく、天眞流露する特徵があつた。

アミヤンの隱者**ピーター**の外に、歐洲全土に大勢力を揮ひ得た大雄辯家としては、**クレールヴオ**の**ベルナール**を擧げなければならない。彼は盜賊の徘徊所である**ヴオームウツド**の谿谷に於ける似而非隱遁者であつたが、屢々歐洲諸國の王侯に招かれて、その國の爭議解決に任じ、或は法王と國王間の確執を解いた。從つて**ベルナール**の雄辯によつて、地位の安固を得た國王や侯伯も決して少くない。法王**インノセント**と歐洲諸國王との確執に際して、彼は法王を援け三寸の舌頭に能く佛英獨の帝王を屈服せしめたのであつた。

若し**ベルナール**が五百年後に生れ出たなれば、獨逸の**ルーテル**や、英國の**クランマア**等によつて叫ばれた宗敎改革の大運動にあたつて、彼等に負けない大雄辯を揮ひ得たことゝ思ふ。彼の

名聲は自己の思ふがまゝに王侯や法王を指導し得るといふ點に於いて、一層の重きを加へた。而して彼の目的は常に社會の利益幸福の增進であつた。結ばれ解けぬ代々の確執を融合せしむるといふことが、**ベルナール**の誇りでもあり、又歡びでもあつた。諸都府間の紛爭も彼の及ばぬといふことはなかつた。深怨容易に解け難しと見えた**ジエノア**と**ピサト**の爭ひも、彼の說敎にあつて和解の手を握ることになつた。騷亂に寧日なき**ミラン**の都も、彼が雄辯に魅了せられて市の大僧正たらんことを懇請するに至つた、それにしても彼が欲するものは、僧院の祖となるよりも信仰を宣傳することとであつて、僧正の椅子に踞つて號令することではなかつた。

その後**ミラン**の都は再び**ベルナール**の援助を求めた。それは判亂を企つた諸侯の一人を說服する爲であつた。又、ある時は羅馬を襲ふて法王を虜にした**シシリイ**の王**ロツシヤア**を說破した。敎會の統一と多數者の權利が**ベルナール**の口から諄々と說かれた時、**シシリイ**の暴君も兵を收めて故島に歸り去つた。

ベルナールの將來には、より以上に大きな成功が橫はつてゐた。それによつて愈々彼の存在は法王より以上に重大視せらるゝに至つたのである。と、云ふのは、曩きに第一次の十字軍の結果として遠く**ハレスチン**の野に建設せられた基督敎の一王國に內訌が生じて、危機に瀕したのを見て一方**サラセン**の大軍は領土の回復を叫んで潮の如く迫り來つた。救援の聲は性方から西方へ向つて送られて來た。この時**ベルナール**は嘗て**ピーター**が實行した任務に從事したのである。さうして獨逸や佛蘭西に遊說して、賤しきも、貴きも、罪あるも、罪なきものも皆立つて神聖なる戰ひに臨め、と絕叫した。富者には資財を提供せしめ、貧者には戰利品を納し、罪あるものには赦免を諾がつた。**ベルナール**の雄辯の偉力に當るものはたゞ一人**ピーター**あるのみである。不思議なほどこの雄辯も成功して、その效果は須臾にして現れた。彼の衣裳は裂かれて義勇軍の十字架となり、都市にも城廓にも、もう人影が見えないほどに民衆は競つて出征した。彼も亦**ピーター**と同じくその雄辯によつて卷き起された狂熱の奔流を阻止しなければならなかつた。千百四十七年の一年內に二個の大遠征軍はその征途に登つた。云ふまでもなく狂熱に囚はれた烏合の衆であるから、旣往の經驗同樣の混亂と慘事に附き纏はれてゐたが、これが爲めに**ベルナール**の大雄辯は毫もその光輝を減少するものではない。彼は軍旅の間に於ける弊事と過誤とを叱責し抗爭したけれども、それが爲に不成功に終つた時、當の責任者として非難の聲は彼の一身に集まつた。彼はこの失敗に深く感ずるところがあつたので、その後十字軍の糾合に彼を再び起たしめやうとしたものがあつたけれども、彼は頑として應じなかつた。

十字軍の糾合を斷然放棄した彼は、**ランドツク**地方に於ける異端者の教化に努力した。それにしても、その後幾くもなくして彼は自己の公生涯に終焉を告げて、**クレールヴオ**の隱遁生活にその餘生を樂しんだ。

ベルナールの數多き學藝と盛德との間に於いて、我々が最も興味を感ずるのは彼の雄辯の偉觀である。彼の不可思議な雄辯に觸れたものは、誰でも立處に魅了させられた。それ故に、彼の辯力によつて十字軍に奪ひ去られることを恐れて、妻はその良人の、母はその子が彼の演說に赴くことを拒んで、彼等をして彼の魔力の下に置くことを避けたのであつた。國王も、顯官も、又法王自身も同樣に**ベルナール**の辯力に推服するの外はなかつた。彼の雄辯は身を顫はして聽衆の感情に愬へる煽動演說ではなくして、牢乎として拔くべからざる大確言の源泉から滾々として流れ出る熱誠摯實明晰の雄辯であつた。その論鋒の印象的なことや、滿身が磁力的であることや、壓伏する如き音吐や、『人格の力等が相俟ち相助けて、彼の雄辯を形造つたのである。この無智と狂信の時代の闇のなかに、輝々として雄辯の光を放つたものは甚だ少ない。勿論地方的に一時の名聲を博した者もあつたけれども、永遠の榮光に身を包み得るほどの雄辯家は單に二三者に過ぎない。**パデユワ**の僧**アントニー**は十三世紀初頭に於ける人氣ある有功の辯舌家であつたが、彼の巡錫の地域は伊太利の北部と中央部以外には出なかつた。說教の當月には聽は曉かけて教會に殺到し、時には入場し得なかつた。聽衆の爲めに、戶外に出て說教しなければならない程であつた。商店は店を閉し、取引の盛り場には人影も見せないほどで、通常の時でも三萬の聽衆があつたと云はれてゐる。說教の效果も頗る目覺しいもので、仇讐相和陸し、生活は改革せられ、富者は私財を信仰の爲めに投じたと云はれてゐる。

彼と同時代の**ボナヴエンチエラ**も亦高名であつた。それにしても時代の風潮として奇怪な觀察や解釋を好むことが一般に宗教界に行はれてゐた結果として、彼等をして後へに瞠若たらしたるが如き奇拔な說教が時折り聽かされたのである。ある說教家が風俗が紊亂した港の町で說教してゐたが、町の住民等の餘りの墮落に嫌氣がさして、「汝等は地上の鹽なり」といふ題の下に、海中の魚に向つて說教を始めた。冒頭に彼は、少くとも魚には二つの善いところがある。彼等は聽くことは出來るが話すことは出來ない。それが二つである。しかも魚はすべての生物に先ちて神に創造せられてゐる。魚は馴らすことも、手馴つけることも出來ないが、彼等は人間を恐れることを知つてゐる。彼等は水中に愉快に生活して、時には同類を相食むこともあるが、この町の人達ほどは墮落してゐない。そして彼は飛魚を輕蔑して云つた。「泳ぐことが出來ながら、尙その上に飛びたいと願ふ

ものは、終ひに泳ぐことも飛ぶことも出來なくなるに違ひない。」と、而して最後に「私の同胞である皆さんと、魚達よ。私はこれを最後の一言として、皆さんにお訣れを告げるのです。皆さんは名譽も解せず、又優雅の何たるを知らない人達であるから、この說敎も優雅でもなく、名譽でもない終りを告げるのです。」と云つた。慨して云へばその當時の說敎はこんなものであつたが、かくて奇を好んで、其處に何等根底のない說敎が漸次に流行して、十四世紀末から十五世紀にかけて、雄辯の墮落時代が來たのである。

四、佛蘭西革命の雄辯家とナポレオン

歷史は流れる。暗黑の時代は過ぎ去らなければならなかつた。人々を窓を開けて、麗らかな大陽の光を仰いだ。と云ふのは文藝復興期が來た。さうして自由開放の聲は市井に高く叫ばれた。この思想の一投石は遂に佛蘭西革命を卷き起したのである。

さて、この天雲急なるこの時代の雄辯は一體どんなものであらうか。佛蘭西革命時代の雄辯によつて我々が第一に感じることは、雄辯には古今を貫いて一定論る所なき型が存在することである。希臘には彼の國の生み出した雄辯が存在し、羅馬には又彼の國が生み出した獨自の雄辯があつた。

佛蘭西では革命に於いて**ヌゴール人**の焰のやうに燃える熱血が獨特の雄辯を生み出したことは怪しむに足らない。衰龍の袖の下に君主の殊寵を辱ふした少數者の雄辯は最早昨日の夢である。この時、佛蘭西では暴政が自ら蒔いた種子を自ら刈り入れつつあつた。驚くべき精力を以て跳躍し來つた下層階級は、不測の大成功に自失するが如き喜びを感じながらも、彼等が辿り着くべき永久の港に如何にして行くべきか、何等の確信も持たなかつたので、夫の一角を望んで彼等を統率し指導すべき人傑の出現を待ち佗びてゐた。

それにしても幾世紀の積弊を一掃し去るには英雄の健腕によつて、寧ろ過激猛烈な方策を取るべきである。統治機の一切を擧げて民衆の手に移さしめよ。君主の肝腦を碎いて彼が權威を虀粉せしめよ。このやうな時代には、最も極端な主張を持つてゐるものでなければ、民衆の信望を維ぎ、一世の輿望を鍾めることは出來ない。而して最も極端に走る人こそ最も偉大な統率者となり得る人である。その人は誰であつたらう？云ふまでもなく**ミラボオ**であつた。

ミラボオ――彼の肖像を一瞥すれば誰にでもどんな人物が想像がつくであらう。生れながらにして脚の一方が彎曲して、舌は縺れ、一雙の齨齒を以てゐた。「惡魔のやうに醜く、」「身心共に怪物」であると彼の父は云つた。彼は波瀾重疊の青年時代から壯年時代の始めにかけて、軍隊と監獄と塡

太利**ボヘミヤ**地方の放浪とに送つた。千七百八十五年に、政治記者として巴里に流れ着いた時には、彼は文なしであつた。彼の著述中の一小冊子は警察で燒き棄てられた。**エークル**市の下層社會の代表者として議會に送り出されたので、彼は此處に始めて革命の喇叭を吹奏したのである。

この頃が**ミラボオ**の大活躍の時代であつた。議員としての職務が既に忙し過ぎる位なところへ彼は尙國會の評論記者としての任務を持つてゐた。この忙しい境遇を少しでも樂にしやうと思つて彼は今までの雄辯家に餘りその例を見ない奇拔な手段を案出した。とふのは雄辯の草稿に助手を用ふることである。**デユモン**、**デユロヴレエ**、**レエバ**等は彼の協力者であつて、**ミラボオ**の雄辯の傑作には彼等の寄與せる所が頗る多い。助手達の供給した材料に對して**ミラボオ**がその天才によつて新生命を吹き込んで行つたことは、恰も沙翁が舊來の劇を鑄直して、復活せしめたと同樣であつた。**デユモン**や**デユロヴレエ**が彼の爲めに書いた草稿と**ミラボオ**が實際にやつた演說とは沙翁の劇に於けると等しく生ける人と死せる人との相違があつたと言はれてゐる。それは彼の天才から湧き出て來る生命の光がこの草稿を美しく輝かせたからである。**ミラボオ**は草稿の書き拔きを手にして演壇に起つて、表面上少しも屈托を示さないで巧みにこれを自分の錦繡に織り込むのである。彼は先づ腹案を授けてこれを書きあげた後、經驗上の判斷によつて更にこれに力を注射するのである。それにしても**ミラボオ**の演說の大部分はその前に充分準備を盡したものであつた憲法、君主の拒否權、及び國民敎育に關する有名な演說等は、皆苦心して彫琢推敲の結果によつてなつたものである。力強く、生氣橫溢し、自然にして且つ粉飾の跡なき彼の雄辯はその論調は常に直裁であつた。事實の敍述には明々晰々、疑問の敍述には積極的で、豊麗朗々の詞藻を運び來る彼は、謹恪莊重の論客であつた。言語の調和よりも、思想の連絡に腐心する**ミラボオ**の論鋒の壘層的に進擊し來る勢は抗拒し難き概を示した。彼の秩序井々の論理は何人もこれを犯すことが出來なかつた。從つて攻擊の正面に禦ぎ矢を放たうとすることも無駄であつた。又彼の結論の打擊から免れやうとしても到底不可能であつた。又彼は壇上に足踏みならし、咆哮怒號しつつ長髮を振り亂しながら、威風邊りを拂ふ國王の如き態度を以て壇上を濶步した。平常の莊重と嚴肅とは消え失せて雷の如き疾呼と沈痛とを以て絕叫する時でも、彼の自制心は毫も喪はるることはなかつた。彼の即席の演說は常に長いものではなくして、希望通りの打擊が與へられた後には巧みにその陣營を撤し去つた。どんな所で、どんな風に演說を切り上ぐべきかを知らない即席演說家の缺點に陷るやうなことはなかつた。雄辯家並に政客として**ミラボオ**の偉大を語るものは、國王並に民衆に對する彼の獨立公平の態度に如くはない。國會は大臣彈劾の發議權なしと主張する論客に對して、彼は答へ